
モンスターハンター・ハンティングワールド

九鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター・ハンティングワールド

【Nコード】

N2991C

【作者名】

九鬼

【あらすじ】

大陸中のハンター達。英雄として崇められる者から、駆け出しの未熟な者まで…。彼らハンター達に招待状が届けられた…。夢の大陸に招待する。誰も見たことの無いモンスターや長い年月を生きる巨大なモンスター達を狩って見ないか？大陸中の選ばれたハンター達は招待状に書かれた場所に集まった。ハンターの血に従いやつて来た彼らの中に中堅クラスのハンターアッシュ、そしてその仲間達の姿もあった…。モンスターハンターファンフィクションです！！知らない人でも読めるように努力します！！あと読んだら、ぜ

ひ評価を！！

1話：夢の大陸に向かって（前書き）

モンスターハンターのファンフィクションです！！未開の大陸でハンター達はどのようにして戦っていくのか……？初心者ですが宜しく願います！！

1話：夢の大陸に向かって

あらずじ

大陸中のハンター達。

英雄として崇められる者から、
駆け出しの未熟な者まで…。

彼らハンター達に招待状が届けられた…。

夢の大陸に招待する。

誰も見たことの無いモンスターや長い年月を生きる巨大なモンスター達を狩って見ないか…？

大陸中の選ばれたハンター達は招待状に書かれた場所に集まった。
ハンターの血に従いやって来た彼らの中に中堅クラスのハンター
アッシュ、そして、その仲間達の姿もあった…。

モンスターハンター

～1話 夢の大陸に向かって～

とある港町、

普段はそこまで賑やかではなく、むしろ寂しい雰囲気を受ける港町
だった…。

しかし、今日、いや…1週間も前からこの町はかつて無かったほど
賑わっていた…。

理由は大陸各地からハンター達が集まって来たためだ…。港の人々は焦った。

この地方は強力なモンスターや珍しいモンスターがいるわけでも無いので普段はハンターなどを見かける事はほとんど無い。

港の人々は不思議に思い、一人のハンターに聞いたところ、招待状の事と、この港町が集合の場所に指定されているとの事だった…。

それから毎日のようにハンター達がやって来るようになった。

町は昼夜を通して、ハンター達の宴がおこなわれ、活気に包まれていた。

そして町の酒場の中でも大騒ぎが繰り広げられていた…。

「オイッ！！しっかりしろハサン！！」

酒場の中央に置かれたタル…。

その上で今ちょうど腕相撲が行われていた…。

今、必死の形相で踏ん張っている男、ハサン。

そして、それをはやしたてているのが俺ことアッシュ。

「アーツ！！もう無理！！」

ハサンは限界を迎え、軽くねじ伏せられた。

「ハサンおまえへボ過ぎ！使えなさ過ぎ！！」罵声を浴びせる俺。

「まあ、ハサンだし仕方ないんじゃない？」

そしてそれを止めたのがカイン。

俺はカインの意見に納得した。

「まあ、確かにハサンだからな。」

正直な話、失敗を罵倒されるよりも、こつこつ納得をされる方が普通に通に傷つく…。

「ホントにスマン」

ハサンはとりあえず土下座

「死ね!!」

俺は即刻にハサンの存在を否定する…。続けてカインもさりげなく疑問を口にする…。

「ハサンそんな腕力でよくハンマーとか使ってるよな？」

「何故か使えるんだ!!」

ハサンは傍に置いてあつた
巨大なハンマー“アイアンストライク”を持ち上げようと…

バキッ！！！！

「ぐはあ！！」

ハサンは肩を脱臼した。

「駄目じゃん！！」

さすがに俺も驚く。

しかしカインは冷静に分析する。

「まさかハサンは今まで自分が凄いという思い込みだけでハンマーを持ち上げていたのか…」

それがさっきの腕相撲で腕力の無さを自覚してしまい持ち上げられなくなつたのか…」

「ああああっ！」

ハサンは転げ回る。

回りのハンター達も新たなモンスターを見つけたと思うただろう。

その後ハサンは俺が顔面を踏み碎いて止めた。

腕力の問題も怪力の種という一時的にドーピング効果を与える種を過剰に摂取させておいた。

話はようやく本筋に戻るが俺達3人もハンターで招待状を貰ってやって来た…。

港町に来たのは決められた日の2日前…、そのまま酒場に入り浸っていたのだった…。

そして、当日となってようやく酒場から出て来た…。

「おいハサン、しっかりしろよ!!」

俺は先ほどから訳の分からない言葉を乱発して、いかにも“薬をやっています”みたいなハサンを一括する。

「アヒヤアヒヤー!!」

ハサンは謎の動きをしている…。

「さすがにドーピングはマズかったか…」

俺達はちよつと反省した…。

俺達はなんだかんだ言いつつも港へとやって来た…。

辺りには100人以上のハンター達がいる…。

中には、赤い飛龍の防具や、翡翠の水龍の身より作られた巨大な剣を背負った大陸の英雄達の姿もあった…。

俺達が啞然としているところに一人の男がやって来た。

「オマエらまだそんな貧弱な装備なのか？」

やって来るなり見下して来た男、ラムザ…。

「俺なんかレイアの鎧だぞ！」

ラムザが言ったのは密林に住む、女王と呼ばれる雌の火龍…、毒の針を持ち、敗れたハンター達は山程いると言われ、同時にこれを倒したハンターは一流として認められる“リオレイア”のことである…。

「くっ…!!」

さすがに俺もこれには苦渋を舐める…。

何故なら、俺の装備はラムザと比べるまでもない…。

俺の愛用している片手用の剣は“スネークバイト”と呼ばれる、扱い易いが、初心者でも2・3度狩りに出れば作れる物である。威力もそれに見合うだけの物でしか無い…。

対するラムザは“ブロスホーン”と呼ばれる砂漠の覇者との呼び名を持つ砂龍の角を折った者のみが手に出来るランスである。

さらに鎧にしてもラムザがレイアの鎧ならば俺は“イヤンクック”と呼ばれる、飛龍ではあるが小柄で、実力もせいぜい初心者の最初の関門になるといった程度のモンスターの物であった…。

ちなみにハサンは鎧など着ていない…。あえて言うならば持ち前の生命力が鎧である…。

「ハッハッハ!!どうや!!」

ラムザは勝ち誇っている…。とそこに更に男がやって来た。

「あつ!エバンスさん」

エバンスと呼ばれたその男を見て俺は啞然とした…。

そのエバンスの持つ武器は龍刀と呼ばれるタイプの太刀で名を“焰”
”と呼ばれる龍殺しの武器…。

素材にはいくつもの町や砦を踏み潰して行き、その被害は天災と呼ば
れるほどの山の様に巨大な龍。ラオシャンロン“老山龍”の素材が必要となる…。

防具の方も語るまでも無く強力な物だった…。

「ラムザ…、他のハンターに迷惑をかけるな…。」

「ハイ!すいません!!」

エバンスは一声でラムザを黙らせた。

俺は悟った、ラムザは最近までは自分と対して変わらなかった。
それが急に強力な装備を手に来る訳がない…。

おそらくはこのエバンスという男のおかげだろうと…。

そう思っているとそのエバンスが声をかけて来た…。

「うちのラムザが無礼な事をしてすいません…。お詫びと言っては
何ですがこれをどうぞ…。」

エバンスはそう言うつと緑色のいびつな形をした物を取り出した…。
これは…鱗…だろうか…？

イヤ…、これは“逆鱗”だ…。
それもレイアの持つ物だ…。

逆鱗とは極マレに飛龍のアゴの下にあるとされる、よく加工などで
使われる通常の鱗とは違い、質や強度が遥かに高く、強力な武器に
は欠かせない…、がしかし、それを手に入れるには何十頭の飛龍を
倒さなければならぬ物だ…。

欲しい…。

しかし、ハンターのプライドがソレを許さない。

「いや…、ラムザとは顔見知りですし構いませんよ…。」

俺はキツパリと断った。
すぐ後ろで

「ゲキリン！くれ〜！！」

と叫んでいるプライドのプの字も持たないキチガイはカインにアイコンタクトを送った直後、

グシャアアア！！

という何かが千切れとんだ音と共に静かになった…。

「とりあえず、いりません」

俺は再度断る。

「そうですか…、では私達はこれで…。」

そう言うとラムザを連れてエバンスはどこかに行ってしまった…。

その後、俺・カイン・物体Xの二人と一つは港に停泊している船に乗ることになった…。

船は大陸を支配する軍隊の物だった…。

招待状は軍隊…、いや…もっと上からの物であろうか…？

とりあえず、俺達はパーティーごとに割り当てられた部屋に入った。

部屋は軍隊の使っている物にしては結構キレイで居心地がいい物だった…。

「エバンスって言う人はただ物じゃないな…。」

今まで口を閉ざしていたカインが口を開いた…。

「たしかにあの装備は凄い…」

俺もそれに合わせるがカインからは少し違う意見が返ってきた。

「イヤ…、何かもの…。根本的に何か違う…。」

カインは意味ありげな言葉を口にする…。

「…？」

俺にはカインの言いたい事を理解出来なかった…。

二人の間にきわどい空気が流れていた時にハサンが異常な事を言った…。

「エバンスサン、カッコエエわー！マジで惚れたわー！！」

二人はハサンの方を振り返ると同時にザァッと後ろに下がる。未知なる物に対する好奇心と恐怖心が両立した瞬間であった…。

「何だ!？」

脳みそに異物でも入ったか…!？」

俺は有り得そうに無いことを口にする…。

「ごめん、港でアイコンタクト貰った時にコイツの頭にマンドラゴラを突き刺した。」

有り得た…。

「よく刺せたな…。って言うかグロくね…?」

そんな感じで夜になり、船は出航の時を迎えた…。

大広間で今回の招待に関して説明がなされるらしい…。

俺達は大広間へと向かった。

《続く》

1話：夢の大陸に向かって（後書き）

とりあえず第一話です。

次からはもう少し読みやすくするために短めに話を切っていくたい
と思います！！

感想や修正点、アドバイスを頂けると感激です！！

モンスターハンターについての面白いネタなども待ってます！！

2話：炎上する船（前書き）

キャラ紹介

アッシュ

身長170くらい

赤い髪を肩くらいまで伸ばしている。

童顔で髪型とあわさって女と間違われることもある。

使用武器

メイン・片手剣

サブ・双剣

好きな物

目立つこと・甘い物・仲間

嫌いな物

軍隊・暑い場所・フルフル（雪山や沼地に生息するグロテスクな外見をもつ白い飛龍、退化した目と発達した嗅覚、そして電撃が特徴的。）

2話：炎上する船

船は夜の闇の中を進んでいた…。

その頃、船の甲板の真下にあたる大広間にハンター達が集まっていた。

今回の招待の目的が明かされるはずなのだが、同時に食事会といった形相を呈していた…。

あたりのテーブルは大陸中の珍味や豪華な食材がふんだんに使われた料理が並んでおり、ハンター達は食事を楽しんでいた…。

そして、俺達もまた料理の味を楽しんでいた…。

しかし、ハサンだけは間違いなく問題を起こすので先手を打って潰して置いた…。

今ごろ足にイカリを付けて海の底だろう…。

半端な殺り方ではすぐに返ってくる、これでも不安な位だ…。

しばらくすると堅牢な鎧に身を包んだ男達が壇上に上がった。

「ハンターじゃないな…？」

俺は疑問を口にする…。

「《鉄騎》だ…。」

カインが疑問に答えた…。

「《鉄騎》…？」

あの大陸で名をはせている傭兵団か？」

「名をはせると言ってもあまりいい噂は無いけどな。」

壇上で挨拶をしたのは間違いなく傭兵団《鉄騎》だろう…。

噂によれば嵐を司る古龍を雪山まで追い込んだらしい。

真偽は分からないが実力は本物なのであろう…。

そんな中、《鉄騎》の話は本題へと入った…。

「さて…、今回あなた方を招待したのは我々ではない…。我々はハ
ンター達と協力し目的を達成せよとの依頼を受けここにいる。」

《鉄騎》の言葉にハンター達の間にはざわめきが起こる。

「慌てるな…、我々の依頼人にしてあなた方の招待主は、大陸の国王様だ…。」

今回は国王様じきじきの依頼だ…。

君たちを島に招待したというよりも、君たちは依頼を受け、島に向かっているのだと考えて頂けると有難い…。」

「国王の依頼…気になるな」

カインはボソツと呟いた。

「依頼内容は簡単だ…。」

今回、新たな大陸が発見された…。

その調査をするにはモンスターが邪魔になる…。

大陸中のモンスターを狩れとは言わない…、ある一定の区域のモンスターを掃滅してくれればいい…。」

《鉄騎》はそれだけ言うとは壇上から降りて行った…。

「夢の島に招待とか言って、結局は軍事作戦の手伝いか…。
上手くやられた訳だ…。」

俺はイラだつが何か出来るわけでも無く部屋へと戻る事にした…。

「珍しいモンスターを狩れるのに変わりはないって…。」

カインは俺をなだめる様に言うが続いて部屋へと戻った。

モンスターハンター

～2話 炎上する船～

それから、3日が過ぎた。

俺は潮風に当たりに甲板へ出ていた…。

今日の夜には目的地に到着しているそうだ…。

俺は一息ついて空を見上げていた…。

すると、3つの影が上空を舞っているのに気がついた…。

「うん？」

影の1つから赤い光の球が落とされてきた…。

俺はソレを何か確認するまでもなくその場所から飛び退くように離れた…。

その行動は正解だった…。

俺が離れた直後、俺のいた場所に赤い球が落ち爆発を起こしていた…。

さっきの赤い球は火龍の火球に間違いは無かった。

俺はすぐに天を仰いだ。

3つの影は急降下してくる!!

その赤色の姿はまさしく毒の爪を持ち、青空を支配する。

リオレイアの対を成す荒々しき雄の火龍…、

「リオレイウス」か!!」

俺は叫び声を上げる。

リオレウスは強力な力を持つ飛龍だ…。

そこらへんのハンターでは手も足も出せずにたちまちあの世行きとなる…。

それが3匹も現れたのだ…。

普通なら絶望的な状況だ…。

逃げ出すことも危うい…。

他のハンターもレウス達に気がついたのか叫びを上げる。

3匹のレウスの内、2匹は甲板へと降り立ち、啞然とするハンター達をその巨大な尻尾でなぎ、高温の炎で焼き払い、猛威を振るっている。

空中を漂うレウスも無差別に火球を吐き、狭い通路で立ち往生するハンター達を焼き、巨大で鋭い必殺の毒爪がついた前足で強襲していく。

だが、しかし3匹の脅威もそこまでだった…。

たしかにレウスが3匹集まれば勝てるハンターはいない。

しかし、ここは100人近いハンター達の乗る船だ…。

騒ぎを聞きつけたハンター達が武器を持って集まり、空中にいたレウスは弓矢やボウガン、挙げ句の果てには船に着いたバリスタで射ぬかれ絶命した…。

甲板で暴れていたレウスも切り刻まれ、突き崩され、叩き潰されて同じ末路を辿ることとなった。

「ふう〜、ビックリした〜！」

俺はレウスの攻撃を避けるだけで精一杯だった。

レウスの方に目をやると素材としての有能さからか争奪戦が行われていた…。

「よしっ！ー！」

俺も争奪戦の中に飛びこんで行った…。

「…やはり目指す大陸に我々の求める術があるか…。」

《鉄騎》の団長、ベルガーは一人意味もなく呟いた…。

その視線の先にはハンターの群がる3匹レウスの姿があった。

「珍しいなレウスが3匹の群れを作るなんて…。作意的なものを感じるぞ…。」

カインは俺から話を聞いて疑問を口にした…。

「まあ、レウスは単独で行動する事が多いらしいしな…。」

俺はレウスの鱗や甲殻といった日頃手に出来ない物を手に入れてご機嫌だった…。

「まあ、たまたまだろ…。」

カインも適当に納得した。

それからしばらくして俺は船内にある工房にいた…。

手に入れたレウスの素材を加工するためだ…。

あの時、レウスにはハンターが群がっていたが、乗船していた軍隊によって素材は均等に配分された。

しかし、その結果として一人あたりの報酬は人数のためか鱗一つほどとなってしまうた…。

だが、俺はレウスを発見し全員に危機を知らせたという“軍の評価基準”で武功を認められ、他のハンターよりもたくさんの報酬を貰って来た。

そして俺は新たな武器、“レッドサーベル”を手にした。

レウスの素材を使っているこの武器の威力はスネークバイトを上回り、斬った対象を炎上させる特殊な力まで備わっている。

青空の王・レウスを倒した者のみが手にするこの剣を、俺はただ逃げてただけで手にできた訳なので俺としては若干複雑な心境では

あつた…。

俺は部屋に戻ってはしゃぎ疲れたのか眠りについてた…。

起きた頃には島に着いているだろうか…？

カインは部屋で俺を起こさない様に愛刀である鉄刀“神楽”を研いでいた…。

強固な鉾石であるマカライト鉾石を惜しげもなく使い鍛えられた刃は、たとえ相手が強靱な甲殻を持った飛龍でも切り裂くだろう。

しかし、世の中にはこの神楽に雷の力を加えた太刀が存在するらしい…。

カインの武器マニアとしての血が騒いでいた…。

その夜、俺は騒がしい音で目が醒めた…。

何か叫び声の様なものが聞こえてくる…。

俺は剣を持ち、鎧を付けて警戒心をあらわにして叫び声の方へと向かって行った…。

上…甲板の辺りから聞こえてくるのは無数の叫び声や爆発音…、辺りは火に包まれている…。

俺は火の中を突破し甲板へと飛び出した…。

「何だ…これは!？」

俺が目にした物は、火の海となった船で戦うハンター達。

火によって赤く夜空に浮かびあがる飛龍の群れ。

船上を蹂躪するその姿はまさしく昼に船を襲ったレウスその物だった…。

それだけでは無く火の海の中にはレウスの対をなすレイアの姿まであった…。

その数は40にもものぼる…。

俺は恐怖で身がすくんだ。

動けない…！！

それを見つけたリオレイアが獲物を喰らうべく突進してくる…！

俺は目を見開いているだけだった…。

「オイッ！！しっかりしろ！」

聞き慣れた声が聞こえ、俺の体は状況を理解する前に左手の盾をレイアに突き出していた…。

間一髪だった…。

俺はレイアの突進を見事に防ぎきった…。

俺は衝撃で尻もちをつく。

レイアは突進の反動で体制を崩している…。

俺は起き上がりレイアに反撃しようと目をやる…、

すると先ほどの声の主… カインがレイアに向かって神楽を振り降ろしていた…。

神楽はレイアの翼を切り裂き、鮮血を噴き上げさせる。

しかし、レイアは一旦怯んだものの、すぐに体制を立て直してカインにむかって長い尻尾を振るう。

カインはレイアの尻尾を避け、レイアの両足の下…、股下を上手く抜けて行く…。

そして、レイアの足に鋭い突きを入れて、そこから更に切り上げる。

そこに俺が走りこんで来て、自重を乗せた飛び込み切りを放った。

レイアも体重を支える足を斬られてよろつく…。

カインはそのレイアに神経を集中させ太刀の切れ味を最大まで引き出した斬撃を入れる。

「気刃斬り！！」

レイアは鳴き声をあげながらバランスを崩して転倒する…。

「よしっ！！」

俺はすかさず追撃を入れようとする。

「待て！！」

カインは俺を止めて後退を促した…。

俺もそれで今の状況が一体のレイアに構っていられる状況で無い事に気づいた。

俺達は倒れて足掻いているレイアを放って後退する…。

「何が起こってる！？」

船の後部まで後退したところで俺はカインに尋ねる。

「分からないが、さっき島が見えたと思ったら…、その島から無数の飛龍が飛んで来たんだ！！」

「島！？」

島と聞いて俺は前方に目をやる…、するとレウスやレイアの舞う火の海の向こう側に島の影が見える…。

「とにかく、このままでは全滅する…！！
何とか島に着くまでの少しの時間だけでいい…！！
船を守りきらなければ…！」

カインはハンター達の考えているであろう事を口にする…。

事態は急をようするのだ…。

これだけのハンターがいてもあの数の飛龍は相手に出来ない。

俺は覚悟を決めてレッドサーベルを握る手に力を込めた。

その時、目の前に先ほどのリオレイアが執念深く現れ降り立った。

《続く》

2話：炎上する船（後書き）

どうでしょうか？

いちおうモンスターハンターを知らない人でも読めるように努力してるつもりです。

感想など待ってます。

3話：女王降臨（前書き）

キャラ紹介

カイン

身長

アッシュより数センチ高め。

特徴

短めの黒髪。

頬に十字傷。

実は有名な名家の出身。

兄を殺した隻眼の黒狼鳥を探している…。

武器

メイン 太刀

サブ 大剣・弓

好きなもの

武器・調合・仲間

嫌いなもの

自分の身の上・堅いモンスター（武器の切れ味が落ちやすいため）

3話：女王降臨

モンスターハンター

〈3話 女王降臨〉

俺はレイアに向かって走り出していた…。

レイアは口を大きく開き、俺を噛み砕こうとする。

「いくらなんでも、そんな簡単にはやられないさ!!」

俺は床を転がるように右へ飛び退いてレイアの牙を回避する。

さらに俺は起き上がると同時にレイアの顔面を斬り上げた。

グシャアア!!

という肉の裂ける音がする…。

すると、さらにはレッドサーベルに宿る炎の力がレイアを襲っ…。

…が、しかしレイアは元より炎を吐き出す火龍である…。

この程度の炎など女王の前には無意味であり、斬撃も大したダメージになっていない…。

その証拠にレイアはダメージを無視して動き、アッシュをその強大な力で叩き潰さんと突進する…。

「うわつと!？」

俺は辛うじてレイアの突進に加速がのる前にレイアの死角となる側面へと飛び出すことに成功した。

そのレイアは突進の勢いで大きな隙を見せている…。

これが俺の狙いだっただ…。

俺の持つ片手剣は威力が低く、致命的な一撃を与えるのは難しい。

しかし、軽量の片手剣は手数を出し、その機動力で相手を翻弄、そして隙を作りだす…。

「頼むぜ！！カイン！！」

「任された！！」

そして、俺の作りだした隙を狙ってカインが太刀を振るう。

その狙いは飛龍狩猟のキーポイント…、“尻尾”である…。

飛龍の尻尾は、飛龍の凶悪な破壊力と攻撃範囲の要であり、これを斬り落とせば飛龍の戦力を大きく削ぐことができる…。

「たたき斬る！！」

カインの放った斬撃はレイアの尻尾を捉える…。

しかし、神楽の切れ味を持ってしても、女王レイアの尻尾を切断するには至らなかった…。

「クッ!!」

…不味い…!!」

さらにカインの一撃は逆に危機を招いた…。

カインの持つ神楽はレイアの尻尾の半分程のところで刺さったまま
抜けなくなってしまうた…。

「カイン!!」

武器を離せ!!」

俺は悲鳴に近い叫び声をあげる。

レイアは刺さった太刀を離さないカインを弾き飛ばそうと、半分ま
で斬れた尻尾を大きく振るった。

「クッ!!」

離してたまるか…!!」

カインは振り回され、床に叩きつけられながらも神楽を握り続けて

いる…。

そして、俺がカインを助けるべくレイアに走りこんだ時だった…。

「…ウラアアア…！」

カインは叫びとともに神楽をグツと握り、強引に引いた…。

神楽はその切れ味でレイアの尻尾を引き裂き、その尻尾を両断することによって自らの刀身を解き放った…。

カインは降るわれた尻尾の勢いそのままに吹っ飛ぶ。

が、レイアもまた尻尾を斬られたことにより重心が崩れ、同じく吹き飛ばす様に倒れる…。

「どうだ！？

見たかよ…！！」

カインは若干ふらつきながらも立ち上がり、笑みを浮かべる。

「無茶しやがって!!」

俺はカインの捨て身の行動を賞賛してやる。

しかし、俺の目は今まさしく立ち上がらんとするレイアを見据えたままだった…。

さしものレイアもダメージが溜まっているはずだ…。

戦いの終わりは近い…。

他のハンター達も必死に戦い船を守っている…。

レイアとレウスを倒すまでは至らなくても追い返すことに成功している…。

「さて、そろそろ俺の見せ場がきても良いだろう…?」

俺はダメージを受けたカインを一旦下がらせる。

「攪乱は終わりだ!!」

俺の戦いを見せてやる!!」

俺は自分を鼓舞してレイアに挑んだ…。

俺はレイアに斜めから突進していく…。

対するレイアも向き直り、口を開き灼熱の火球を放たんとする…。

「このまま駆け抜ける!!」

俺はなおも突っ込む…。

レイアの火球は3連発で放たれ、俺を狙う…。

一発目…。

俺のすぐ真横に着弾し外れる…。

二発目…。

真っ正面から迫ってきた火球を、俺は横に飛び退いて回避する。

三発目…。

体勢を崩した俺に狙い澄まされたかの様に火球が迫ってきた…。

激しい爆発が粉塵を撒き散らし、辺りは煙で覆われる…。

レイアの必殺の炎の威力を物語っている…。

そして、火球の着弾地点には大穴が空き何も無い…。

煙の向こうにはレイアが未だにたたずんでいる…。

獲物を見失ったレイアは警戒心をむき出しにしている…。

しかし、獲物の姿を探して前方に気をとられ過ぎて、後方に気がまわらなかった様だ…。

…そう…。

後方より近づく俺の姿には…。

俺は爆発を盾で防いだ…。

片手剣の対になる小さな盾では完全に防ぎきれぬ威力ではない…。

しかし、充分に威力を軽減してくれた…。

そして俺は爆発で足場を失い床下に落下したがすぐに立ち上がり燃える通路を突っ切り、階段を駆け上がり、レイアの背後に出ることができた…。

今、レイアは俺に無防備な姿を晒している…。

火傷が痛むが、かまわずに俺は跳躍した…。

レイアの急所である頭を一突きにして止めを刺さんがために…。

俺はレイアの首に股がる様に飛び乗った…。

剣を両手で握りレイアの頭に突き立てようとする…。

しかし、レイアも己の危機を悟り激しく暴れる…。

だが、俺もさっきのカインと同じく振り落とされまいと必死にレイアの首を跨ぐ脚に力を込める。

「アッシュー!!」

その時、ダメージから立ち直ったカインがレイアの足下まで走り込んで来る…。

「お前も相当な無茶してるじゃねえかああー!!」

カインは叫びながら神楽でレイアの腹を裂く…。

それによるダメージでレイアが一瞬硬直して動きが鈍る…。

俺はその隙を逃がさなかった…。

レッドサーベルを全身全霊の力でレイアの頭に振り落ろした…。

レイアはビクンと痙攣した後、短く小さな鳴き声を一つあげてその場に倒れ伏した…。

「ぐっ…！…！」

俺はレイアの下敷きになり、なんとか這い出る…。

「ラムザの奴…。

なにがレイアの防具だ…。

俺だってやってやったぜ…!!」

強気のセリフを吐いてはいるが正直な話、体力的にも精神的にもかなり疲れていた…。

既に夜の闇は朝の霞へと変わっている…。

「やったな…アッシュ!!」

カインが笑顔を浮かべて近寄って来る…。

「へっ…!!」

何匹でもかかって来いって!!」

俺がそう言った時だった…。

ザパアアアアーン!!!

背後から凄いい水しぶきと共に何かが飛び出して来た…。

「ギヤアアアア！！」

「ゴメンなさい！！！」

俺は反射的に何かに向かって謝っていた…。

だが…

「謝って済む問題じゃねえ！！
人を海に捨てやがって…！！」

何かはハサンだった…。

鎖の切れたイカリを手に持ち、全身には海藻類が巻きついてる…。

「ビビらせやがって…！！」

死んで詫びろやゝ!!」

俺はハサンにドロップキックをかました…。

「グハア!!」

ハサンは物理法則を無視する軌道で、きりもみ回転しながら吹っ飛んでいった…。

「ふう…。

ハサンのせいで勝利の余韻が台無しだぜ…。」

俺は笑いながら言う…。

「オイオイ、まだこれからなんだぜ…。

ほら、見ろよ…。」

カインはそう言うところボロボロになった船の前方を指さした…。

「すげえ〜!!」

俺の目の前に広がっていたのは朝靄の向こうに広がる、海岸線…。そして、その向こうには密林、遠くには山脈が広がっている…。

海岸沿いには既に草食獣ケルビの姿も見受けられる…。

人の手が一切加えられていない真の大自然…。

ひょっとすると未知のモンスターに出会えるかもしれない…。

まさにハンター達にとっては…

「最高の“ハンティングワールド”じゃねえか〜!!」

俺は船が上陸するのを待たずに海に飛び込んだ…。

「ギヤアアア!!」

か…海水が…、火傷に染みる〜!!」

「当然だ…、バカが…。」

カインはそう言いながらも、俺と同じく、何か待ちきれない様子だった…。

辺りでは他のハンター達も海に飛び込み始め、俺と同じ様な悲鳴をあげていた…。

「…そうだった…。
俺達、レイアに勝ったんだよな…?」

カインは目の前の光景に氣をとられ、ようやく自分の偉業に氣がついた…。

しかし、浮かれるハンター達は誰も今が最悪の状況であることに氣がつかなかった…。

この大陸こそが地獄の入口であることに…。

《
続
》

3話：女王降臨（後書き）

ようやく新大陸につきました。

1話の時点できいてるっていう展開の方がよかったかも…。

多少書き方が変わるの意見や感想などの影響で…。
まあ、初心者らしいってことで…。

意見、感想を待ってます！！

4話：ハンター達よ、いざ原生林へ（前書き）

キャラ紹介

ハサン

身長

165くらい

特徴

小太り（メタボリック予備軍）
不死身のギャグキャラ。
短めの金髪。

武器

メイン ハンマー

サブ 狩猟笛

好きなもの

金・食い物・貴重品・エバンスさん（おそらくは一時的なもの）

嫌いなもの

シリアスな展開・難しい話

4話：ハンター達よ、いざ原生林へ

俺は新大陸に上陸した…。

その他大勢のハンター達も砂浜に上陸を開始している…。

砂浜には新しい足跡が無数に残されていく。

「最高だぜ…。

まさに新天地って感じだな…。」

俺は辺りを見回し、生い茂る原生林に感嘆の声をもらした。

背後の海では船が浅瀬に乗り上げ、上陸の準備がおこなわれている。

「しかし、よくこの惨状でここまでもつたな…。」

俺は正面から船を見てあらためて戦いの激しさを思い知らされた…。

船の帆は焼け落ち、すっかりとしていた外装にはところどころに穴

が空き、さらには船全体が右に少し傾いている…。

あと少しで全員まとめて船ごと海底行きだっただろう…。

まわりのハンター達もまた船の惨状に言葉を失っていた…。

その時、黒い鎧を着込んだ集団が上陸して来た…。

「鉄騎…。」

俺は鉄騎の中でも一番強固な鎧を着込み、鋭い槍を持つ男を視界にとらえた…。

その男…ベルガーは砂浜にハンター達が集結しているのを見つけると、好都合だと呟き、この場にいるハンター全員に聞こえるように叫び声をあげた…。

「ハンター諸君…！！」

私は鉄騎の団長であるベルガーだ…！！

ご覧の通り、予想外の事態で船は大破し、動かぬ状態だ…！！

我々はこれより帰りの船を調達するためにここより北東の海岸沿いにある軍の先見隊の駐屯地に向かう…！！

諸君達も時刻までにその場所に向かって欲しい…！！」

ベルガーの発言に辺りでざわめきがおこる…。

そして、一人のハンターが疑問を口にする。

「ちょっと待て…！！」

俺達のすぐ後ろにはすげえ宝の山が広がってるんだ…！！

悪いが、俺は自分のハンターの血を抑えられないぜ…！！」

他のハンターも同じ考えなのか頷いている…。

俺もあのハンターの意見に賛成だ…。

しかし、ベルガーという男は盛り上がるハンター達を一旦落ち着かせて言った。

「ハンター諸君…。

私は君達のこともしっかり考慮している…。

その証拠に私は“夕刻までに”駐屯地にたどり着け…、としか言っていないぞ…。」

辺りのざわめきが急に静かになる…。

そして、一人のハンターが叫びをあげた…。

「…今はまだ早朝…！！
たつぷりと時間はあるわけだ…！！」

辺りでゴクツと唾を飲む音が聞こえる…。

そしてさらに今のハンターの言を別のハンターが引き継ぐ…。

「…っていつとは…！！」

…狩り放題ってことかあゝ!!」

「『ウオオオオー!!』」

その言葉と同時にハンター達、そして、もちろん俺も一斉に密林に突っ込んで行く…!!

それを見たベルガーは呆れて言った…。

「一つ言っていなかった…。

我々にはあまり価値の無い物ゆえに…、諸君がいらないと言っなら焼却処分してしまうぞ…。

船を襲って来た飛龍どもの死体をな…。」

「『ウオオオオー!!』」

ハンター達はバック走で一斉に帰ってくる…。

そして…

「どけっ！！」

コイツは俺の物だ！！」

「うるせえ！！」

俺が先に手をつけたんだよ！！」

「なんだと！！」

ヤル気かテメエ！！

上等だ！！！！」

辺りでは仁義なき戦いが始まった…。

ちなみに俺は…

「クソッ！！しまった！！」

出遅れた…！！」

完璧に出遅れていた…。

「アッシュ！！」

こっちだ！！！！」

名前を呼ばれ振り向くと、カインが手招きしていた…。

「俺達の狩ったレイアはちゃんと俺がキープしといたぜ!!」

カインは背後にある巨大な布に覆われた物を指さした…。

「さすがはカインだ…!!」

俺はカインに走り寄って行った…。

俺達はハサンを呼んでレイアを解体した…。

逆鱗の様なレア素材は出なかったものの大量の素材を手に入れることができ…、さらにはその一部を他のハンター達と交換して貴重なアイテムや素材に変えることができた…。

ちなみにハサンは通常の素材にはあまり興味を示さず、代わりに“リュウノテール”という食材として最高級の物を貪り食っていた…。

ハサンは食える物と金になる物が大好きなのである…。

今思えば何故こんな奴がパーティーにいるのだろうか…？

とりあえず、俺はカインとこの後のことについて打ち合わせをした…。

「アツシュ…、さすがに俺は疲れた…。

俺は海岸沿いを鉄騎の奴等について行くよ…。」

「…そう言うなら仕方ねえ。

俺“一人”で密林に向かうことにするか…。」

「…！？」

ハサンは頭数から外されていることに驚愕の表情を浮かべている…。

だが無視しておく…。

「じゃあ、行ってくる…!!」

「おう、気をつけろよ…!!」

俺は密林に向かって駆け出した…。

疾走する俺の背景には必死の形相で存在をアピールするハサンがいた…。

俺は無視しておく…。

そのほうが楽しいから…。

「Look me!!」

そして、叫び声がただ虚しく響いていた…。

とにかく俺は密林を突き進む…。

今までに人が通らなかつた道はかなりの難路だが構わずに突き進む…。

太く、高く繁つた木の幹で他のハンター達も既に見えなくなっている…。

俺は足を止めた…。

見えなくなったハンター達に代わり、俺は肉食のモンスターであるランポスと遭遇した…。

ランポスは青い色をした人間位の大きさで、尖った爪を持つ鳥竜種のモンスター…。

それが目の前に三匹…。

これくらいなら全く障害にならない…。

ランポスはハンターからすればほとんど雑魚扱いが基本だったりする…。

ただし、ランポスは生息数が多く集団で狩りを行うので囲まれると危ない…。

俺は先手必勝とばかりに一番近くにいたランポスに突っ込んで斬りつける…。

ランポスは俺の攻撃に全く反応できず、レッドサーベルの斬撃と炎をもろに受ける。

それにより後ろに大きくのけぞったランポスに更なる攻撃の手を加える…。

片手剣の手数はあっさりとランポスを押し切って、反撃を許さぬままに一匹を仕留めた…。

仲間がやられたことで、ランポス達は牙と爪をかがげ、その高い音の鳴き声で俺を威嚇する…。

「…お前達なんて全然怖くねえよ…!!」

俺は威嚇をもともせず、二匹目に斬りかかる…。

たしか、ハンターになって本当に駆け出しの頃はランポスにすら脅威を感じてたんだよね…。

などと考えながらも俺は二匹目を討ち果たす…。

三匹目が跳びかかってくるが俺が体を少し左にずらしただけでその攻撃は空を切った…。

俺はそれによって生まれた隙を見て攻撃を加える…。

が、しかし、ランポスは強靱な足で後方に飛び跳ねて俺の攻撃を回避する…。

「うおお!？」

俺は予想外の動きに驚嘆の声をもらす…。

しかし、俺は笑顔だった…。

この原生林の中で戦っていると普段は狩りに出るたびに一度は目につくランポス達でも何故か新鮮なものに感じられるのだ…。

俺は空いた間合いを自ら詰めて攻撃し、三匹目も斬り倒した…。

「…なんかいい感じだ…。」

俺は率直な感想を述べた…。

すると、その時

「ハサン様、参上!!」

俺が来たからにはもう大丈夫だ!!」

何の影響を受けたのかハサンが奇声をあげながら飛び出して来た…。

俺は殴り飛ばそうと思ったが、あることに気がついたのでそのまま調子にのせることにした…。

「ハサン!!」

いいところに来てくれた!!

じゃあ、後は頼んだ!!」

俺はハサンを置いて走り出した…。

「ようやくハサン様の素晴らしさが分かったようだな…!!」

って何処に行く…!?!」

ハサンは走り出した俺を追おうとする…。

しかし、ハサンの目の前に何かが飛び出してくる…。

「なにっ…！？」

ってランポスか…。」

ハサンの目の前には新手のランポスがいた…。

「どけえ！！」

俺はアッシュを追わねば…、うん！？」

ここでハサンは俺と同じものに気づいた。

ハサンを囲む数十というランポスの大軍に…。

この原生林で育まれ、異常繁殖したランポス達…。

その中に取り残されたハサン…。

彼の運命は…！？

俺にとってはどうでもいいので先を急ごう…。

「どうでもよくねえー！！」

叫び声が聞こえた気がした…。

…無視…。

とにかくにも俺は夕刻までの時を有意義なものにするために原生林を駆け抜けた…。

《
続
》

4話：ハンター達よ、いざ原生林へ（後書き）

ランプスなんですけどね…。

モンスターハンター2では普通に目についたら倒してたんですけどね…。

ポータブル2ではプレイ時間が200を越えてるのに狩猟数が僅か40頭前後…。

相手するのが面倒で…。

ボスモンスターがいても無視していますしね…。

小説の感想を待ってます！！

5 話：アレムンドという男（前書き）

読者数がとりあえず100人を越えました…。

力及ばずながらも努力していい作品にしあげていきたいと思うので
よろしく願います！！

感想や意見など大歓迎です！！

5話：アレムンドという男

俺は原生林を走るうちに木々の無い広い場所に出た…。

「むっ…！？」

俺は広場の中央部で一人のハンターがランポスの群れと交戦しているのを発見した…。

ランポスの集団には群れを統率するリーダーであるドスランポスの姿もあつた…。

対するハンターは体つきのいい大柄の男でかなり熟練されたハンターだと思われた…。

なぜなら、30歳前後と思われる男は、身の丈ほどの大剣を振り回しており、その一撃は確実にランポスを捉え、なおかつ大振りの一撃を放ちながらもランポス達には全く隙を見せていなかった…。

その男は遂にドスランポスに大剣の一撃を叩き込み、見事に討伐を

果たした…。

残るランポス達もリーダーをやられて一目散に逃げ出して行った…。

「…すげえ…!!」

俺は感嘆の声をあげる…。

「うん…!？」

その男はこちらに気がつき歩み寄って来た…。

「…凄いですね…!!」

扱い難い大剣をあそこまで使いこなすなんて…!!」

俺は男を賞賛する。

すると男は少し照れた様子で謙遜を口にする…。

「いや…、大したことじゃないよ…。

それに思わぬ数のランポスに苦戦しているところを見られるとは恥ずかしいよ…。」

…あれで苦戦してるっていつのかよ…。

俺は男のレベルの高さに驚きを隠せない…。

「俺はアッシュです。」

とにかく俺は軽く自己紹介をする。

男もそれに応じてくれる。

「私はアレムンド…。」

ところで君は一人で狩りに出てるのかい…?」

「いえ…、連れがいますが、先に駐屯地に向かいました…。

アレムンドさんはお一人で?」

「そうさ。」

私はあまり人付き合いが得意ではなくてね…。

なんとか他のハンターと協力関係を築きたいとは思っているんだが…。
」

最近ではソロで狩りをするハンターは珍しくなっている…。

俺はアレムンドさんに深い興味を抱いた…。

「…じゃあ、アレムンドさん…!!」

俺のパーティーに入りませんか…!?

アレムンドさん程の力量の持ち主なら大歓迎ですし、仲間も歓迎すると思いますから…。」

俺はアレムンドさんをパーティーに誘うことにした…。

「えっ…!?

いいのかい…?」

君とは歳も離れてるみたいだし、迷惑じゃないかい？」

「問題ありませんって!!」

逆に俺が足を引っ張ってしまいそうですから…!!」

俺は熱意を込めてアレムンドさんを誘った…。

「…よし!!」

そこまで言ってくれるなら一緒に一緒させてもらおうか…。

ではあらためて宜しく、アッシュ君!!」

「こちらこそ宜しくお願いします!!」

それから俺のことはアッシュでいいですし、敬語じゃなくても結構ですよ…!!」

俺の予想ではアレムンドという人は人付き合いが苦手と言っか、腰が低すぎるのだと思う…。

「そうか…。」

じゃあ、アッシュー!!

行くでしょうか…!!」

「はい!!」

こうして俺はアレムンドさんをパーティーに加え、森の奥地へと歩を進めた…。

俺は歩きながらアレムンドさんと会話を交わした…。

仲間の事や船での戦いなど…。

アレムンドさんは知識豊富でかなり俺の知らない事を教えてくれた…。

そうして歩を進めて行くと、湖に出た…。

そして、その場であるモンスターを発見して俺達は足を止めた…。

「どうです…？」

アイツを相手に一戦やりませんか…？」

俺はアレムンドさんに提案する。

アレムンドさんはしばらく考えてから言った…。

「ダイミョウザザミ」か…。

たしかにパーティー結成の初戦の相手としては丁度いいな…。

…仕掛けるか…!!」

アレムンドはダイミョウザザミの側面に回り込むように走りこんで行く…。

俺もそれを見て自分の仕事をするべくダイミョウザザミの正面に出た…。

ダイミョウザザミは砂漠や密林に生息する、巨大な飛龍の頭骨に身

を宿す甲殻種…。

分かりやすく言えば、巨大なヤドカリの様なものである…。

ただ背負う物が貝ではなく飛龍の頭骨になっただけだ…。

しかし、その大きさは人間よりも遥かに大きく、ハサミのサイズが人間と同じサイズなのだ…。

「よし、やってやるか!！」

俺はまずダイミョウザザミの気を引くために正面に飛び出して片手剣を突き出す…。

ダイミョウザザミは突然現れた外敵に驚きハサミを振り上げて威嚇する…。

俺はダイミョウザザミの大きさに少し戸惑いつつも、片手剣で攻撃を仕掛ける…。

だが、ダイミョウザザミを覆っている甲殻は堅く、片手剣のダメージはうまく通らない…。

せっかく付与されている炎の力も甲殻の前に跳ね返される…。

しかし、ダイミヨウザザミは俺を敵と認識し、ハサミを構えて接近してくる…。

俺はダイミヨウザザミから離れる…。

だが、ダイミヨウザザミの巨大な脚は瞬く間に俺との間合いを詰め、その巨大なハサミが振るわれる。

俺はそれを盾をうまく使って受け流す…。

「これで側面はがら空きです!!」

俺はアレムンドさんに合図を送る…。

アレムンドさんも俺の意図をしっかりと理解した…。

ダイミヨウザザミが正面にいる俺に気をとられた隙を突いて、巨体を支えるその脚に向かって大剣を振り落ろした…。

大剣は俺と同じくダイミョウザザミの甲殻にぶち当たるが、

「俺のブレイズブレイドを止めて見ろおおお!!」

という叫び声と共に甲殻は破られた…。

アレムンドの持つ大剣、ブレイズブレイドは鉤爪がいくつか取り付けられており、それが獲物の身体を挟る様に引き裂くのだった…。

ダイミョウザザミの脚からは青い血が飛び散る…。

「ふんっ!!」

さらにアレムンドはブレイズブレイドを今度は真横に振り抜いた…。

アレムンドの強靱な肉体によって振るわれた剣はダイミョウザザミの脚の一本を砕いて強引に引きちぎった…。

「うわ…。
すげえ…!!」

俺は想像を絶するアレムンドさんのパワーに圧倒される…。

「でも、俺も負けてられねえな!!」

俺は一本の脚を失いながらも怯まずに動くダイミョウザザミに突進する…。

ダイミョウザザミはアレムンドを狙い、口から高圧で水を吐き出していた…。

アレムンドさんは肩の部分にそれをかすりながらもダイミョウザザミの脚の間を転がり抜けていた…。

その隙に俺は先ほどアレムンドさんが砕いた甲殻部分をめがけて突進の勢いそのままに片手剣を振るった…。

レッドサーベルはダイミョウザザミに見事に突き刺さり、高熱の炎

を吹き上げさせる…。

これにはたまらずダイミヨウザザミも大きな音をたてて転倒した…。

「もらったぞ…!!」

アレムンドは大剣を大きく構えて、溜めを作ってから地面に倒れて足掻くダイミヨウザザミに向かって思いっきり振り落ろした…。

グシャアアア!!

凄まじい一撃にダイミヨウザザミのハサミの一方が切断される…。

ダイミヨウザザミは泡を吹きながら暴れる…。

「ぬぐう…!!」

逆にそれは相手の動きを読んで動く熟練ハンターのアレムンドにと

っては有効となり、アレムンドは弾き飛ばされる…。

「アレムンドさん！！
俺が行きます！！！」

俺は機動力で振り回される残り一つのハサミをかわしてダイミョウザザミに斬りかかる…。

だが、甲殻に阻まれて有効的な攻撃ができない…。

俺は一旦、間合いを空ける。

しかし、突然ダイミョウザザミは俺に向かって背を向けた…。

「なに…！？」

俺の目に飛び込んできたのは、ダイミョウザザミに背負われた、巨体な飛龍の頭骨だった…。

ダイミヨウザザミはその体勢のまま俺に向かって突進してくる…。
迫りくる飛龍の頭骨は威圧感を放ちながらも加速にのる…。

俺は凄まじい威圧感に動きを止めてしまう…。

「グハア!!」

俺は思いっきり弾き飛ばされる…。

「アッシュ!!」

アレムンドさんが俺の名前を呼ぶ…。

「大丈夫です…!!」

俺は、怪鳥イャンクックの素材で作られた鎧のおかげで難を逃れた…。

俺を跳ね飛ばしたダイミョウザザミは砂を撒き散らしながら地中に潜り始める…。

それを見たアレムンドはダイミョウザザミにペイントボールをぶつける…。

独特の匂いと色を発するペイントボールはモンスターの逃げた先を教えてくれる…。

ダイミョウザザミはそのまま地面に潜って逃げ出したが、これで居場所は分かる…。

「追いましょうー!」

俺は回復薬を服用しながらアレムンドさんに言う。

「ああ、ダメージは大丈夫か!？」

「大丈夫です!!」

そろそろ奴も弱ってるはずですし無理はしませんよ…!」

俺とアレムンドさんは逃げたダイミョウザザミを追って行き、ようやく追いついた…。

予想通りにダイミョウザザミは弱っており、口から青い泡を吐いていた…。

ダイミョウザザミは俺達を発見すると特殊な行動をとった…。

殻に閉じ籠もる様に全身を丸めて堅い防御を展開したのだ…。

「…くそ…!!
俺が炎で焼いてやる…!!」

俺はレッドサーベルを構える…。

が、アレムンドさんは俺を静止した…。

「こついつのは経験が物を言うのだ…。」

そう言つてアレムンドさんは何かをダイミョウザザミに投げつけた…。

「耳を塞げ…!!」

アレムンドさんの声に、俺はとつさに耳を塞いだ…。

すると、凄まじい音がした…。

投げつけられた何かが、爆発と共に凄まじい音を発したのだ…。

アレムンドの投げた物は音爆弾。

文字通り、凄まじい音を発する爆弾である…。

俺はダイミョウザザミがその音を受けて麻痺し、堅い防御を開いているのを見た…。

「攻撃するだけが全てじゃないんだ…。

時と状況に合わせて道具をつまく使いこなすことも重要なことだぞ、アッシュー！」

アレムンドさんそう言って動きの止まっているダイミョウザザミに突っ込み、止めの一撃を振り落ろした…。

俺はアレムンドという人がパーティーに入ってくれたことを感謝した…。

これほどまでに頼りになる人物はいないだろう…。

アレムンドさんは俺の方を見て言った…。

「…しかし、俺一人だったらここまでスムーズにはいかなかっただろうな…。

君と出会えてよかったよ…。」

俺とアレムンドさんは力強く握手を交わした…。

そしてアレムンドさんは倒れているダイミョウザザミを見て言った…。

「さあ、コイツを解体しよう…。

そろそろ駐屯地に向かわないとな…。

君の仲間にも早く会ってみたいからね…。」

既に日は傾きかけていた…。

俺達はダイミョウザザミを解体し、駐屯地へ向かった…。

その頃、ハサンは…。

「おい！？
アッシュ？

誰かいないのかあゝ!？

ここはどこなんだあああ!！」

原生林にて遭難していた…。

《続く》

5話：アレムンドという男（後書き）

アレムンドについてですけど。

モンスターハンターにはやっぱり一人は豊富な知識を持ち、色々なところで頼りになる熟練者が必要かな…。

と思い、登場させました…。

モンスターもこれから強力なのが出てくると思うので丁度いいくらいかなとも思ってます…。

6 話：休息の一時（前書き）

キャラ紹介

アレムンド

身長

190くらい

特徴

赤みのかかった茶色の髪を後ろで束ねている。
筋肉質で大柄。

老けて見えるが実はまだ20代
意外と精神的に脆い。

武器

メイン 大剣

サブ ハンマー

好きなもの

珍しい物・新たな知識

嫌いなもの

自分の老け顔・湿地帯での戦い（大剣やハンマーを振るう時に足を
とられるため）

6話：休息の一時

俺はアレムンドさんと共に軍の駐屯地へとたどり着いた…。

駐屯地は簡素な城壁に囲まれており、その周りを取り巻くように杭が打ち込まれていた…。

既に辺りはちょうど日が沈んで薄暗い闇が辺りをつつみこんでいる…。

「…なんとかたどり着いたか…？」

思っていたよりも長かった道のりに俺はため息をついた。

「疲れたか…？」

アレムンドさんが心配して声をかけてくる…。

「…よく考えれば、昨日の夜に飛龍の襲撃で叩き起こされてから、

ほとんど休まずに密林に突入しましたからね…。」

…今思えばこれは暴拳と呼ぶにふさわしい行動じゃないだろうか…？

そう考えると疲れが一気にでてきた…。

早く休みたい…。

そう思いながら俺とアレムンドさんは駐屯地へと入って行った…。

「さてと…、カインはどこだ…？」

俺は先に着いているであろうカインを探した…。

すると、

「おっと！！アッシュじゃねえか…！！？」

カイン…、ではない…。

この声は…

「…ラムザ…。」

俺は疲れている時には会いたくない奴と出会ってしまった…。

「なんだ、その嫌そうな顔はよく…！
せつかく俺が良いものを見せてやろうと思ったのに…。」

「疲れてるからいい…。」

俺は適当にやり過ごそうとする…。
俺はどうもこのラムザという男が嫌いと思まではいかないが、好きにはなれなかった…。

「そんなこと言わずに見ろって…！
この鱗をよ…！…！」

ラムザはそう言って黒光りする鱗を見せてくる…。

「また、エバンスって人のおかげだろう…?」

俺は思ったことを口にする。

しかし、ラムザはいつになく真剣な表情になっていた…。

「今回は違うつて…!!」

これは拾ったんだって…!!」

ラムザは黒光りする鱗を指さしながら言う。

「なんだよ、拾った物かよ…!!」

俺は拾った物なんて大した物ではないだろうと思い、その鱗を手にとってみる。

「…うん!？」

鱗にしては重量感があるな…?」

俺は違和感を覚えた…。

鱗にしては重く、そしてかなり堅い…。

まるで鋼の様だ…。

俺はこんな鱗を持つモンスターを知らないし、噂を聞いたこともなかった…。

だからこそ、ラムザは凄い物を拾ったと言いたかったのだろう…。

「…私にも見せてもらってかまわないか…？」

するとアレムンドさんが鱗を手にとり、それをじっくりと眺めた後に口を開いた…。

「…本物の鋼に近いな…。
よく見ると錆び付いた部分もある…。」

アレムンドはいかにも興味津々といった目でそれを観察する…。

すると、ラムザが初対面のアレムンドが気になったのか俺に尋ねてきた…。

「誰だ…、この“オッサン”は…？」

「…お…オッサン！？」

反応したのは俺ではなく、アレムンドさんだった…。

アレムンドさんは驚愕の表情で言葉をつなぐ。

「お…俺はまだ“20代”で、けしてオッサンでは…」

「「20代」…！」

俺とラムザの声は重なり、アレムンドさんの言葉を打ち消す。

「ウソ、俺、ずっと30代だと思ってた…！！！」

俺は正直に驚いた…。

アレムンドさんは俺達が“20代”という言葉信じなかったのがショックだったのか、顔面蒼白で口をパクパクさせていた…。

そして、

「俺は20代なんだー!!」

と叫んでどこかに走り去った。

「えっ!?!ちよつと!?!
アレムンドさん!?!」

俺は驚きつつもアレムンドさんを追いかける…。

「…なんなんだ…このギャグみたいな展開は…!?!」
とり残されたラムザは一人啞然として呟いた…。

「…あつ！？しまった！！
鱗…持って行かれた…！！」

…まあ、あんな気味の悪い物はいらないし、いいか…。」

ラムザは、どうでもいい、と言いたそうに呟いた…。

俺はその後、アレムンドさんに謝罪して落ち着かせた後、ようやくカインを見つけることに成功した…。

「カイン…！！」

紹介したい人がいるんだ…！！」

「どうした…！？
帰ってきていきなり…？」

ハンターに用意された宿舍で休んでいたカインは帰ってくるなり叫び声をあげた俺に驚いて、目をパチパチさせている…。

「俺が仲間に誘った…、アレムンドさんだ…！！」

俺はアレムンドさんをカインに紹介した…。

「…アレムンドだ…。
よろしく頼む…。」

アレムンドさんは先ほどとは別人のような威厳をだしている。

カインはアレムンドを見上げた後口を開いた…。

「仲間にしたって…、この人、今アレムンドって…ええ!!
アレムンドオオ!!?」

カインは突然叫び声をあげる。

「どうしたカイン!？」

俺は一瞬カインがイカれたのかと思った…。

「アレムンドって、あのアレムンドさんを仲間にしたのかあ!!」

カインは声を荒げる。

この時のカインの反応を見て、俺はアレムンドさんは有名な人なんだなあ、と思った。

「アレムンドっていえば、重量武器の使い手で、国境を襲ったディアブロス2頭を一人で倒した人だぞ!!」

カインがのほんとする俺を一喝するように叫んだ。

すると、先ほどから誉めちぎられていたアレムンドさんも照れくさくなったのか口をだす。

「いや…、あの2頭に勝てたのは偶然だよ…。」

アレムンドさんがディアブロス2頭を倒したのは本当のようだ…。
俺はさすがに驚きを隠せない。

しかし、カインはここで地雷を踏んだ…。

「ところでアレムンドさんはまだ若いハンターだと聞いたんですが

…。」

カインとしては興味本意だったのだろうが、それは禁句というものだ…。」

「俺はオッサンじゃないんだあああああ〜!~!~!」

そして走り去ったアレムンド。

追いかける俺。

啞然とするカイン。

とにもかくにも気がつけば夜になっていた…。

ハンター達には食事とこの付近で調べ終えている範囲のみが記された地図が支給された…。

「話によれば明日の夜頃は嵐がくるらしい…。」

明日も夕刻までに帰ってこいとさ…。」

食事をとった後にカインが話しかけてきた。

「明日はカインも一緒に行くだろう…?」

「ああ、明日は俺もついていくよ…!!」

そんな会話をしつつ俺達は早めに休んで明日に備えることにした…。

そして俺達は港を出てから動きっぱなしで疲れが溜まっていたためかすぐに寝息をたて始めた…。

その夜は何ごともなく過ぎていって、次の日の朝を迎えた…。

《続く》

6話：休息の一時（後書き）

今回は短めの文章です!!

これから話を急展開させていくつもりです。

感想、意見などを待ってます!!

7話：王の領域へ…（前書き）

少し更新が遅れてしまい、すみません…。

多少遅れることがあっても頑張って完結させたいと思うので応援よろしくお願いします！！

できれば評価をしていただきたいんですが…。

7話・王の領域へ…

朝になって、俺はカインと共に宿舎の外でアレムンドさんを待っていた。

今日は昨日よりもさらに密林の奥地…森丘へと踏み込むつもりだ。

「すまない…。
待たせたか…？」

しばらくするとアレムンドさんがやって来た。

「俺達も今来たところですよ…！」

俺達は予定通り森丘に出発することにした。

「…今日は何か狙いがあつて森丘に行くのか？」

移動中にアレムンドさんが森丘に行く目的について聞いてきた。

実のところ、森丘に行くのには目的があったりする。

俺はレイアと戦って、勝利した時からある考えがあった…。

「…森丘に行くのは、そこに蒼空の王、リオレウスがいるからなんですよ…。」

そう、俺はリオレイアと対になるリオレウスをこの手で倒したいと思っていたのだった…。

船の上では多数のハンターの前に敗れたリオレウスだが、おそらくリオレイアを凌ぐ力と気性の持ち主だと思われる…。

彼を倒すことで俺は一つ上のレベルに上がる気がするのだ…。

「リオレウスとは…、これまた危ない相手を…。」

アレムンドさんは心配と驚きの混じった様な表情で言う。

「俺の実力でリオレウスを相手にするのが無謀かもしれない…。

だけど俺達ならやれるって感じがするんです…!!」

リオレウスに勝てる、という根拠はどこにもない…。

しかし、負けるという確証もないのだ…。

俺のハンターの血は勝てると言っている…。

「ハハハハッ、まったく…アツシらしいな…。

でも、俺はたとえ古龍が相手だって一緒に戦ってやるぜ…!!」

「俺も構わないぞ…。

ふむ…、リオレウスか…。

久しぶりに骨のありそうな相手を狩れそうだな…。」

カインとアレムンドさんは笑いながらも俺に賛同してくれた。

「よし!!」

じゃあ、早速出発しよう!!」

俺は声を張り上げて気合を入れた…。

敵はリオレウス、蒼空の王。

そういうことで、愛用のレッドサーベルを使う気はない…。

元よりリオレウスの身から作られた剣がリオレウス自身に通用するとは思えないのだ…。

だから今回は別の剣を使うことにした…。

俺の手には二対の剣がある…。

片手剣の盾を棄て、代わりにもう一本の剣を持つことで攻撃性を増したスタイル…。

今俺が持っているのはギアノスクロウス改…。

雪山に住むランポスの亜種の素材で作った双剣に少し手を加えた物だ…。

この双剣にはリオレウスの苦手とする氷の力が備わっている。

これならリオレウスにもそれなりに有効的なダメージを与えられるはずだ…。

もちろん防御の面でも抜かりはない…。

昨日狩ったりオレイアの素材で俺は胴と腰の部分の防具を作って防御力を強化したのだ…。

「準備はバッチリだし、まずは早めに密林を抜けることにしよう…
！」

俺達は森丘地帯を目指して密林の中を進むことにした…。

密林は他のハンター達を通った道があったので昨日よりも歩きやすかった。

「このまま行けば思ったよりも早く着きそうだな…。」

カインもそう思ったのか、俺と同じ考えを口にする。

「体力的にも万全で戦いたい相手だからな…。」

好都合というものだ…。」

アレムンドさんもカインの発言を補足するように言う。

「今のところモンスターの姿も見当たらないしな…。」

昨日と違ってモンスターの姿が少ない密林に、俺は少々退屈、といった声をだす。

しかし、楽々ムードは長くは続くものではない…。

どこからともなく鳥の様な鳴き声が聞こえる…。

鳥にしては大きいその声に俺達は足を止めた。

すると上空から突風が吹き、同時に地面に影が落ちる…。

俺達は突風で体勢を崩されるが、その目は地面に降り立たんとする

鳴き声の主…、イヤンクックを捉えていた…。

「イヤンクックか…！？
目にするのは久しいな…！！」

突風の中でアレムンドさんが呟く様に口にする。

風を起こしている翼…、小柄な体型…、大きなクチバシ…、そして特徴的なその巨大な耳。

太陽を背にして降下してくるシルエットは間違いなくイヤンクックだった…。

が、しかし…。

「…こいつは驚きだな…！！」

アレムンドは呆気にとられて口を開いたまま固まった…。

黒い影はイヤンクツクだったのだが、その姿がハッキリした瞬間にアレムンド…、いや、アッシュ達全員の動きは止まった。

なぜなら、その姿が緑色の鱗で覆われていたためだった…。

「…イヤンクツクは赤色だろ…？」

カインも呆気にとられて呟く。

「…珍しい青色のイヤンクツクも確認されているんだがな…。

緑色を見たことないぞ…。」

アレムンドさんはイヤンクツクの希少種を目にして興味津々といった感じだった…。

着地したイヤンクツクはそんな二人に突然として襲いかかった…。

獲物を見つけたかの様に鳴き声をあげながら鋭いクチバシを振り落とす…。

しかし、先制攻撃を仕掛けていたのはイヤンクツクではなかった…。

「こんなイャンクック見たことねえ…！！
絶対に仕留めてやる…！！」

そう、他ならない俺自身だった…。

俺はギアノスクロウズで一回転しながら斬りつけた…。

ギアノスクロウズは氷の力を纏いながらイャンクックの脚を斬り裂く…。

確かな手応えと共に斬り裂いた脚から血が飛び散った…。

「…ダメージが多い…」。

コイツは氷の属性武器に対して耐性が低いみたいだな…。」

俺は希少種のイャンクックが高い耐性を持っていないかと懸念したが、結論は弱点を見抜くこととなった…。

イヤンクツクは突然現れた俺に驚いたのか攻撃の手を止め、今度は俺を狙って短めの尻尾を振り回してくる…。

「基本的な動きが通常種と一緒に当たらねえよ…!!」

俺はイヤンクツクとは過去に何度も戦っているため、相手が希少種だとしても難なく回避することができた…。

「…この大陸で生まれた新種の亜種の様だな…。

…興味深い…!!」

そう言いながら突っ込んできたのはアレムンド…。

彼の背中に背負ったブレイズブレイドは勢いそのままに振るわれる…。

しかし、イヤンクツクはアレムンドに気づき後ろに大きく飛翔する…。

そしてアレムンドの豪快な一撃はイヤンクツクに回避され、ブレイズブレイドは地面を抉るだけとなった…。

「次は俺がいく…!!」

地面に大剣を叩きつけたアレムンドの横をカインが駆け抜ける…。

カインの右手はアレムンドと同じく背中に背負われた太刀・神楽に添えられている…。

イヤンクックはカインを迎え討たんと体内の火炎袋で炎を生み出し、それを吐き出す…。

カインはそれを視認するが脚は止めず、むしろ加速して炎の着弾地点を着弾するよりも速く駆け抜ける…。

「このチャンスはいただく…!!」

カインは背後で立ち上った火柱を背景にしながらイヤンクックに斬りかかる…。

神楽はカインのスピードと体重をのせて振るわれ、そのままイヤンクックを襲った…。

それだけではない…。

俺自身も既にイヤンクックに肉薄しており、ギアノスクロウズを振り回した…。

同時攻撃がイヤンクックを強襲し、致命的なダメージを与える。

イヤンクックはたまらずに体勢を低く沈め、苦痛に耐える様に短く鳴き声をあげる…。

「…まだまだいくぜ…!!」

カインはさらに翼を、俺は脚を狙って攻撃を重ねる…。

アレムンドさんも間合いを詰め終える…。

「まだまだ、まだいくぜ!!」

さらに…、もう一撃…。

今度はアレムンドさんの一撃も加わった一撃でイヤンクックは転倒する…。

「こいつで終わりだあああ!!」

イヤンクックの耳はすでに力なく折れており、破損している。

そこに三重の攻撃が叩き込まれる…。

イヤンクックは大きく口を開いて最後の一声をあげようとしますが、それすらも叶わずに絶命した…。

「…かなり珍しいが、強さは普通のイヤンクックと大差はないな…。」

倒した緑色のイヤンクックを見てアレムンドは呟いた…。

「でも緑色のイヤンクックなんて見れて少し感動したかも…。」

やっぱりこの大陸に来てよかったよ…。」

俺は感動を噛み締めながら口を開く…。

「今度は色だけじゃなくて、異形のモンスターと出会えるかもな…。」

「

カインはさらなる期待を感じさせてくれる…。

「そうだ…、これだけ珍しい素材を持ち帰れば…。」

俺はイャンクックを解体しようとする…。

しかし、アレムンドさんに止められる…。

「…鱗を剥ぐだけにしといた方がいいと思うぞ…。」

「えっ？」

俺はこんなにも珍しいイャンクックを放っておく、というのを理解できなかった…。

するとカインが呆れた様に言った…。

「…これから本命と戦うのに荷物になるだろ…。」

その言葉で俺はハッとした…。

「…そうか…、そうだな…!!」

そうだ…、リオレウスが俺達を待っている…。

イヤンクックが目的じゃないんだ…。

「待っている…。
リオレウス…!!」

俺は眼前まで迫った急斜面、森丘と分別されているエリアの入口を目にし、自分に気合をいれなおした…。

《続く》

7話：王の領域へ…（後書き）

これからは多少更新が遅れるかもしれませんがご了承ください…。

評価や意見は大歓迎です！！（毎回のようには書いてるのは評価に飢えてるからです（笑））

8 話：天空の覇者（前書き）

また更新が遅れてしまいました。最近少し忙しいので更新が遅れることが結構あると思いますがご理解下さい。

8 話：天空の覇者

俺とカイン、そしてアレムンドさんの三人は木々をかき分け、立ち
はだかるランポス達やその他の小型モンスター達を退けながら歩み
を進めた。

そして足元の傾斜が急なものに変わってきた時だった…。

ついに俺達は王の姿をその目に捉えた…。

蒼空を切り裂きながら羽ばたく翼、鋭く大きな爪。

さらには猛々しい鳴き声。

見間違えるはずもなく、それはリオレウスだった…。

「リオレウス…!!」

俺は目的を見つけ叫びをあげる。

「いや…、確かにリオレウスには違いないが…!？」

しかし、リオレウスの姿をしっかりと目にしたアレムンドさんが焦
りを見せる。

「さっきのイャンクックといい、この島はやはり独自の環境で変異
した新種が多いみたいだな!!」

カインもまたリオレウスを見て驚愕している。

リオレウスは基本的には赤色、珍しいもので蒼色をしている。

しかし、今上空を飛んでいるリオレウスは赤色が黒っぽく変色した
様な赤銅色をしている…。

そして、色だけではなく決定的に異なるのは尻尾と脚の長さ…。
通常種の2倍にはなるうかという大きさだった。

「あの脚と尻尾の長さ…。おそらくは空中からの攻撃に特化した変異を遂げたようだな…。」

アレムンドさんが息を呑みながら考えを口にする。

「あの尻尾と脚、特にあれがリオレウスだとすると脚には猛毒の爪があるはず…。空中からアレで襲われたら危ないな…。」

カインも上空のリオレウスを冷静さを取り戻した目で見ている。

たしかに上空のリオレウスはまさに長い年月を経て徐々に変異していったという印象を受けるものだった…。

だがしかし、ここでアレムンドは一つの見解を得た。

「…いや、アレは変異したのではなく、リオレウスの本来の姿じゃないのか!？」

島の閉ざされた環境が進化を止めて、今のリオレウスの姿になる前の姿、すなわち“リオ・アンセス（祖先）”を生んだのでは…!!」

「…リオ…アンセス。」

俺もその名前こそが異形のリオレウスにふさわしい名前だと感じた…。

「…それで…どうするんだ?」

カインが太刀を抜いて刃を確認する。

「…よし!! リオアンセスを狩る…!!」

俺もハンターとして目の前の大物を取り逃がすわけにはいかなかった…。

「…なんだか凄い大物と戦うことになったが異論はないな。」
アレムンドさんも覚悟を固めたようだった。

「…よし、行こう!!」

俺の合図で俺達はリオアンセスを追いかけて走り出した。

道とは言えない道を通り、木の枝を払い除けながらも懸命に獲物を追いかけた…。

そして、リオアンセスとの距離が近くなってきた時だった。

「…準備はいいな？」

アレムンドさんが俺とカインに声をかけてくる。

俺とカインはいつでも大丈夫、と合図で返す。

「…ではいくぞ!! むんっ!!」

アレムンドさんは凄まじいパワーで閃光玉を上空に投じた。

閃光玉はかなりの高度まで達して破裂…、凄まじい光を発した。

リオアンセスは突然の閃光に眼を回してバランスを失い、螺旋状に回転しながら落下した。

バキバキと木々が折れる音とズドンという鈍い音がした。

俺達はすぐにリオアンセスが落下した場所に走る。

するとそこには何事も無かったかのように立ち上がるリオアンセスの姿があった…。

そして衝撃で土煙が立ち込める中、俺達はリオアンセスと対峙した。

その紅い眼は怒りに満ちており、俺達を睨みつけるように見ていた…。

俺達は武器に手をかける…。

「…近くで見るとさらに大きく見えるな…!!」
俺は息を呑んだ…。

リオアンセスの巨大な脚によって支えられる胴体、そして飛龍の弱点である頭は地上からかなり離れた位置にある…。
アレムンドさんの大剣でも射程のギリギリかもしれない…。

「…脚を狙うしかないか…？ただ近づくことを許してくれるかは微妙だけどな…。」

カインも相当焦ってるようだ。

攻撃が届かない俺達は脚を狙うしかない…。

しかし、奴には圧倒的なリーチの尻尾がある。

俺達は奴まで十歩程の位置にいるが、すでに奴の間合いに入ってしまった…かもしれない、と思わせるほどだった…。

「…とにかく…やるしかあるまい!!」

アレムンドさんは大剣を背負ったまま駆け出す。

「…先手必勝か!!」

俺とカインもまたリオアンセスに向かって走り出す。

下手に動けば尻尾の餌食になる。まっすぐに走って奴の腹の下に潜り込むしかない…。

しかし、俺達の動きを見たりオアンセスもまた猛々しい叫びをあげて動き出した。

まず長い尻尾を振り敵を払い除けんとする。

「く…ッ!!」

アレムンドさんはその場で大剣を抜いて防御する。
やはり防御を駆使して接近するしかないようだ…。

しかし、アレムンドさんと違い俺の双剣とカイン太刀はモンスターの攻撃を防御をすることができない…。

「俺が奴の攻撃を引き付ける!!その隙に攻撃するんだ!!」
アレムンドさんが叫ぶ。

俺もそれしか作戦がないと思い尻尾を抑え込むアレムンドさんの横を抜いてリオアンセスに迫る。

だがリオアンセスはその巨大な翼で後方に羽ばたいて退き、さらには同時に火球を一つ地面に放つ。

「があっ…ッ!!」

俺は自分の勢いを止めることができずに見事にその一撃を受けてしまった…。

「俺が行く…!!」

しかし、吹っ飛ぶ俺の横を抜いて今度はカインがリオアンセスに突撃する。

カインはリオアンセスの着地の瞬間を上手く狙う。

リオアンセスも着地の瞬間は尻尾を振るうこともできずに接近を許した。

「…もらった!!」

カインは神楽を振り抜く。

が、しかし…

ガキイーン…ッ！！

「な…なに…ッ！！」

カインの神楽はリオアンセスの脚を捉えたのだが鈍い音をたてて弾かれた…。

「こいつの赤銅色の鱗は一つ一つが鋼の様に硬いぞ…！！やはりただのリオレウスじゃない！！」

カインは苦虫を噛んだ様な顔で言い、リオアンセスから一旦離れる。

おそらく今のリオレウスはこのリオアンセスが天敵がいないために退化していったものだろう…。

確証は無かったがそんな気がした…。

「…今のままでは歯が立たない…！！…アッシュ、援護するから突っ込むんだ！！属性攻撃が効くなら勝ち目はある…！！」

カインが叫びをあげる。

「…わかった…！！」

俺は先ほど受けたダメージから立ち直った俺は再び攻撃のチャンスを探す。

しかし、リオアンセスはその翼を広げ、凄まじい風を生み出しながら飛翔する。

「…逃げる気か！？」

カインはリオアンセスを仰ぎ見る。

「いや…違う！！思うにあれがりオアンセスの戦闘スタイルなんだろう…、空中から長い尻尾と脚の爪で一方的な攻撃を仕掛ける…まさに捕食者…！！」

「…感心してる場合じゃないですよアレムンドさん！！空から攻撃されたら反撃どころか逃げることしかできませんよ！！」

「…閃光玉も一度使って警戒されているからな…。よほどタイミングよく投げなければ効かないだろう…。」

「…おい！！くるぞ…！！」

カインがりオアンセスの動きを見て警戒を促す。

リオアンセスは遙か上空まで飛翔し、何度か旋回した後、ついに狙いを定めて急降下した…。

恐ろしいスピードで降下しつつ毒の爪の付いた脚を俺達に向けている…。

その姿を確認した時には既にリオアンセスの脅威は間近だった。

「ぐお…ッ！！」

俺は思いっきり横に飛び退いて命からがら相手の攻撃コースからギリギリ外れた…。

リオアンセスは俺達いた場所の真ん中を地面スレスレの超高速・低空飛行で一文字に突っ切り、地面を引き裂き深い亀裂を残した…。さらにその勢いで再び上空へと舞い上がる…。

「…もう一度くる気か！？」

俺は上空で旋回を始めるリオアンセスを見上げる。

「…俺達がくたばるまで狙い続ける気かも…。」

カインもさすがに戦う相手を間違えたとも言いたそうだった…。

「…当たったら一発でやられるぞ…！！相手をよく見ろ！！」

アレムンドさんが叫ぶ。

「でもこのままじゃマズイですって…！！」

「ここは木の様な障害物が少なくて狙われやす過ぎる！！遮蔽物のある場所まで逃げるんだ、…丘を下りて密林地帯まで何とか持ちこたえろ…！！」

アレムンドさんは叫ぶと同時に走り出す。

「誰だよ…！？あんなの狩ろうつて言った奴は…！？」

俺も愚痴を言いながらも走り出す…。

「オマエだよ…！！責任とってオトリにでもなりやがれ！！」

カインもキレ気味に叫んで走り出す。

「…おい！！また降下してくるぞ…！！」

リオアンセスは俺達を逃亡を阻止せんとはかりに狙いを定め、俺達の直上で急降下の姿勢に入っていた…。

《続く》

8話・天空の覇者（後書き）

オリジナルモンスター、リオアンスス……。名前が気に入っていたりします。オリジナルモンスターの批評が気になるので評価や意見をお願いします。

9 話・舞い降りた宿敵（前書き）

しばらくはハサンの出番がないような気がします…。

感想・指摘などを待ってます!!

9 話：舞い降りた宿敵

リオアンセスは目にも止まらない速さで滑空し、太く尖った爪を用いて攻撃してくる。

正面直上から突っ込んでくるリオアンセスの軌道は明らかに俺に向いている…。

あのスピードだけに降下途中で標的を変えるなんて真似はできないだろう。

間違いなく俺を狙っている。

「…ッ！！まともに当たったら死ぬ…！！」

俺は生き延びるため、あえて自分にプレッシャーをかけて集中力を高める…。

相手の攻撃のコース、タイミングを予想して前に向かってダイビングする要領でジャンプする。

…しかしリオアンセスの長い脚からは逃れることはできなかった。だが同時に致命的な一撃を受けることもなかった。

リオアンセスの爪はアッシュの肩を掠める程度に終わった。

しかしそれでもリオアンセスの速さと力は強烈で、アッシュの着ていたレイアの鎧をもつてしても爪の当たった肩部分はバラバラに碎けてアッシュ自身の肩からも血が吹き出る…。

「…ぐうッ…！」

俺は肩に激しい衝撃を受けて呻き声をだしてしまふ。

キズは深くはなかったが奴の爪には毒がある…。

しかし焼ける様な痛みに耐えながらも脚を止めずに走る。

走りながらも持ち物から回復薬、そして解毒薬を取り出して傷口にぶちまける…。

「アツシュ！！大丈夫か！？」

カインが走りながらもこつちを気にしてくれる。

「大丈夫だ！！毒も消せたみたいだし！！」

そしてリオアンセスが次なる攻撃体勢に入った時には俺達は森丘と密林のエリアの境まで戻ってくる事ができた…。

リオアンセスは予想通り木々が邪魔で狙いがつけられないのか急降下攻撃を断念して地上に降りてくる…。

「…ここからが本当の正念場ってことか…。」

俺は風で巻き上がる砂煙に視野を削られながらも確かにそこにはリオアンセスの姿があることを確認する。

「さっきも言ったが普通に攻撃しても弾かれる…。アツシュの武器が頼りだ…。」

カインが言ったことは俺に独自の緊張感を与える。

「俺が可能な限り攻撃を引き付ける…。」
しかしアレムンドさんの一言が俺の緊張感を和らげてくれた。

「俺の攻撃は一度は奴に弾かれたが次はどうなるか分からない…。
少なくとも奴の気を引き、奴の注意を逸らすことはできるだろう…。」

「
カインは再び神楽を構え、そして目の前のリオアンセスを睨みつける。」

リオアンセスは最初は辺りの木々に動き難そうにしていたが、こち

らの殺気を感じ取ったのか俺達の動きを警戒していた…。
しかし、俺達が動かないためリオアンセスは痺れを切らし攻撃に移った。

体勢を落として口を開き、高温の火球を俺達めがけて吐き出したのだ…。

「…きたぞ！！散開するんだ！！」
アレムンドさんの合図で各自バラバラに動く。

そして火球は誰をも捉えることなく、俺達のいた位置にあった大木に直撃して爆発した。

大木は火球の当たった場所からへし折れ、高温の炎に包まれながら倒れる。

「基本的に大抵の攻撃が必殺級の威力か…。当たりたくないな…。」
カインがぼやきながらも先頭を切って走り込む。

俺達の作戦は基本的に連携攻撃、足の速いカインが切り込んで相手を崩すのだ。

カインは全速力でリオアンセスの側面から攻撃を仕掛ける…。

「…さつきは効かなかったがコレならどうだ！？」

カインは勢いそのままに神楽の切っ先を相手に向けて押し出す。
つまりは“突き”。

剣術の基本にして最速の攻撃。

放たれた高速の突きはまずリオアンセスを覆う硬い鱗に衝突する…。

ガキイ…ッ！！

鉛に刃を当てた様な感触がカインの神楽を握る手に伝わる…。

「…覇…ッ！！」

カインはさらに気合を込めて神楽を押し出す…。

ザクリュ…ッ！！

カインの気を纏った神楽はリオアンススの鱗を突き破り、その肉を貫く。

が、しかしリオアンススはダメージを受けた様子を見せない。

「…くそっ！！勢いが足りなかったか！？」

カインの突撃は敵の注意を引くためのもの…。

実のところは特攻とも言える無謀な攻撃だったのだ…。

しかし、それは通った…。

むしろ通された…。

リオアンススは常にアッシュの姿を見ていたのだ…。

カインが注意を引き付けようと仕掛けた攻撃をも意に介せず…。

リオアンススは感じたのだ…。

アッシュの持つギアノスクロウズに込められた力を…。

そしてそれが相手の切り札であるということも…。

「…ッ!？」

俺はカインとは反対の方向から挟み撃ちの要領で攻撃を仕掛けていた…。

カインが引き付け、アレムンドさんが守られた俺が本命を入れるハズだった。

しかし、俺はリオアンススに睨みつけられて足を止めてしまう。

リオアンススは動きの止まった俺を見逃すはずもなく再び体勢を落とし火球を発射した…。

それも今度は一発ではなく数発…。

質量こそ単発に劣るが一つ一つは相変わらず凄まじい熱量を発している…。

しかし、足がすくんだ俺は回避行動どころか動くことすらできなかった…。

「…アッシュ!！」

俺の背後に控えていたアレムンドさんが俺の前に飛び出す。

アレムンドさんは背負った大剣を地面に突き立てて盾にする。

そしてリオアンススの連続の火球に立ち向かう。

火球は空気を焼きつくしながら襲いかかってくる…。

「ぐおおおお…ッ!！」

アレムンドさんは雄叫びをあげながら高熱と爆発の破壊的衝撃に耐える…。

アレムンドさんの剣・ブレイズブレイドはその威力に刃が欠けてヒビがはいる…。

アレムンドさんの巨体もまた業火の洗礼を受けて傷ついていく…。

「…ぐう…ッ!!」

しかし、激しいダメージを受けながらもアレムンドさんはなんとか耐え抜いた…。

でもそれはボロボロになったブレイズブレイドを支えに何とか立っているような状態だった…。

半分からいはいは気を失った状態だろう…。

…だが無情に、その彼がアンセスという名前をつけた飛龍は今の攻撃と同じ体勢のまま、今度は単発で最大の破壊力を持つ一撃を放とうとする…。

「…!!こいつ…、止めやがれ!!」

カインはそれを阻止せんと神楽を振るう…。

その必死の一撃は体勢を低くしたりオアンセスの首筋を切り裂くことに成功する。

が、しかしリオアンセスの攻撃は止まらない…。

「…アレムンドさん!!」

今度は俺が自分の身を盾にアレムンドさんを守ろうとしたが間に合わない…。

そして圧倒的火力で大木をもへし折った悪夢の一撃がアレムンドさんの巨大な体を軽々と宙に舞わした…。

《続く》

10話：デッド・オア・アライブ（前書き）

ようやく10話達成！！

さりげなく気にしていた読了時間も一時間を突破！！

作者は勝手に感動しています。

これも感想や意見をくれる人がいてくれたからです！！

感想、意見には本当に支えられるのでこれからも応援お願いします

…！！

10話：デッド・オア・アライブ

アレムンドさんの体は炎に纏われながら吹っ飛んで地面に叩きつけられた…。

俺は目の前の光景に啞然として硬直してしまふ…。

「…アッシュ！！しつかりするんだ！！」

「…！！」

俺はカインの一声で意識を取り戻してアレムンドさんに近づこうとする…。

だが俺はその場からは動けなかった…。

今アレムンドさんの方に向かえば奴に背後を見せることになる…。
そうなれば今度は自分がやられるだけだ…。

まずは現状を打破しなければいけない…。
せめて奴をこの場所から退けなければ…。

この難敵を退ける方法…。

それは簡単だろう…。

俺の持つギアノスクロウズの氷属性の攻撃を直撃させる。

俺の勘だが奴は必要以上にギアノスクロウズを警戒している。

それは奴がハンターが生み出した属性武器を知らず、その威力を体感したことがないからだろう。

奴が人の踏み入らないこの地で育ったことを考えれば当然ではある…。

得体の知れない物でダメージを受ければ生物のとり行動は単純だろう…。

目の前の脅威に対して逃げ出すか、もしくは徹底的に排除しようとするか…。

前者の行動なら良いが、後者なら俺達は全滅する…。

デッド・オア・アライブの賭けだ…。

「まあ、それ以前に攻撃を当てないと賭けにもならないんだけどな…。」

俺是最悪な現状を嘆きつつもハンターとしてこの上ない見せ場に燃えていた…。

ただ気をつけなければならぬのは狙う場所だ…。

攻撃を当てるのは脚ではダメ、それは相手をただ怒らせるだけに終わるだろう…。

一番効果的に相手を逃走させるだけの恐怖を与えられる場所。

生物が一番恐怖を感じるのは視覚、つまりは目の位置、すなわち顔。

「誰だって自分が傷つけられるのは怖いんだよ…。そして目の前で大事な仲間がやられるのも…。ましてそれが自分が足を止めたのが原因ならな…。」

俺は言いながらリオアンセスに向かって走り出した…。

「…やるしかないか…!!」

カインもやるべきことが分かっているのかリオアンセスの正面に向かって飛び出す…。

リスクの高いオトリの役だ…。

それでもやらねばならないのだろう…。

俺の持つ双剣ギアノスクロウズの間合いは長い脚を持つリオアンセスの顔の高さには届かない。

体勢を落とさせるしかないのだ…。

「…アツシュ!!正直に言ってどうしていいか分からん!!」

カインはお手上げと言わんばかりに叫ぶ。

なぜならリオアンセスはどういう訳か他のモンスターよりも賢い…。すでにこちらの狙いはある程度分かっている様だし、だからこそ体勢が下がってしまうブレス攻撃はしない…。

カインがどれだけ懸命に誘発させようとしても意識の一部は常に俺を警戒しているのだ…。

「…最悪の展開だな…。」

俺もカインも振り回される長い尻尾を懸命に避けてはいるが、チャンスなんて生まれない…。

アレムンドさんのことも気にかかる状態としては最悪だった。

「…チャンスを作るしかないか…。」

カインがボソツと言う…。

「…どうすんだよ…!!」

「……。」

カインは一旦相手の間合いから大きく外れて何やら考えている。

その間は当然だが俺に攻撃が集中する…。

「くそっ…!! 策があるなら早くしてくれ…!!」

リオアンセスの攻撃は全て俺の目と鼻の先を通過している…。
いつまでも避けていられる状況じゃない…。

ここでカインは何か閃いたのか俺に向かって叫んだ…。

「…よしっ!! やっぱリアッシュ、オマエがオトリになれ!!」

…何を言いやがるこの馬鹿は…

「はぁ！？何を言っているんだオマエは…！？」

俺は心の底からカインに叫んでやった…。

「……。」

しかしカインは聞く耳持たず、と言った感じだった。
さらには何故かこちらに背中を見せる様に後ろを向いて背後の木々の群れとにらめっこをしていた…。

それを見て俺は何かあることを信じるしかなかった…。

「…しかたねえ！！オトリは俺が一番得意だしな…！！」

俺は叫んで前に出る…。

この状況ならある程度相手に近づいた方が安全だ…。

さいわいにもリオアンススの注意は完全に俺に向いており、カインは意識の外になっている…。

これは逆手にとれる…。

「…見やがれリオアンスス！！このギアノスクロウズでオマエを倒

す!!」

俺は挑発と言わんばかりにギアノスクロウズを天に掲げる。

リオアンススはその挑発にのったのか暴れ狂う…。

これで完璧にカインはノーマークだろう…。

「…でもコレはコレで問題アリだな…!!」

俺はリオアンススの激しい攻撃に悲鳴をあげる…。

すでに体には無数の新しい傷ができてしまっている…。

「…カイン!!まだか…!!」

俺はカインをチラリと見る。

カインは何やら鞘に収めた太刀に手をかけて神経を集中している様だった…。

そして…

「…剣・魂・一・躑…!!」
気刃斬り…ッ!!」

カインは鞘から神楽を一気に抜き放った…。

カインの紅い炎の様な気を纏った神楽は紅い光を放ちながら目の前
のとてつもなく巨大な大木を斬り倒した…。

大木は大人が4・5人くらい両手を伸ばしてようやく囲めるという
位に太く立派な物だったが、カインはそれを一閃した…。

切口は異常なほど綺麗で、長い時を生きた大木の年輪がハッキリと
見えた…。

「アッシュ！！潰されてくれるなよ！！」

カインが叫ぶまでもなく俺は倒れてくる大木から逃げ出していた…。

しかし完璧に意表を突かれたリオアンセスは倒れてくる大木から逃
れることはできなかった…。

ドカァーンという爆発音に近い音が響き渡る…。

それと同時に衝撃と舞い上がったが粉塵があたりを覆った…。
空には突然の出来事に驚いた無数の鳥達が飛び上がっていく。

「…なんて無茶苦茶な作戦を使いやがるんだ…。」

俺は土煙の中で顔を手で覆いながら言う…。

「…いい作戦だったろう…。」

カインが一仕事を終えたという感じで応える…。

そしてリオアンススは大木の下敷きになって身動きがとれなくなっていた…。

必死に足掻いているが大木はビクとも動いていない…。
自慢の炎も押し潰された体勢では使えない様だった。

「…とりあえず眠っていてもらおうか…。」

俺はリオアンススに捕獲用の麻酔玉をぶつける…。

まだ相手が元気なので中々効き目が無かったが相手が動けないので効くまでぶつけた…。

4つ、5つぶつけたところで大人しくなったので俺はカインが介抱しているアレムンドさんのところに急ぐ…。

「…大丈夫なのか…？」

「…命に支障はない様だが危険だな…。一刻も早く治療しないと…。」

カインは回復薬で応急処置を施しながら言う…。

「…拠点まで行けるか…？」

「分からない…、それよりも昨日に今日は夜に嵐がくると言ったが、もう今は夕方だ…。」

カインが空を見上げる…。

たしかに風がだんだんと強くなってきたし、空も黒い雲に覆われている…。

「マズイな…。」

どうするべきか…。

そう考えていた時にリオアンセスがイビキをかいて眠っているすぐ横の茂みで何かガサガサと動く音がした…。

「…な…なんだ…？こんな時にモンスターか…！？」

俺は最悪の事態を想定しながらも音がした方に近寄る…。

「…この展開ならハサンの奴かもしれない…。」

カインが言う…。

…たしかにあり得る…。

その場合はドロップキックで失神させて嵐の密林に放置しておいてやろう…。

俺達はアレムンドさんを担ぎながら茂みまで来た…。

「出て来い…ハサン!!」

俺は一気に茂みをかき分けた。

「……………」

カインは沈黙した…。

「…あれ…ハサンじゃない？」

俺は啞然とする…。

茂みの中に隠れていたのはメタボリック予備軍と名高いハサンなんかではなかった…。

半泣きで震えている一人の幼い少女だったのだ…。

《続く》

11話：嵐の前の静けさ（前書き）

最近ちょっと強引な展開がありますがそれは作者の未熟さ故です

感想や意見をくれる読者や他の先生方には感謝しています。

すでにやってしまったミスなどはもはや仕方ないので、これからどうすれば面白い作品になるかと試行錯誤してまですので、アドバイスは歓迎です。

初心者は色々と不安なので…。

11話：嵐の前の静けさ

俺達は眼を疑った…。

なんで未開の大陸に少女がいるんだろうか…。

ここにいるのはどう猛なモンスター達とそれを求めてはるばる海を越えてやって来たハンター達だけのはずだ…。

「…こ…殺さないで…。」

少女はかなり怯えている様だった…。

完璧に悪役みたいな俺達は顔を見合わせる…。

そしてあらためて少女を見る。

少女は幼く、だいたい10歳くらいだろうか…。

肩くらいまでの黒髪に長めの耳と紅い瞳…。

竜人族か…。

「…安心してくれ。君を殺そうなんて思っちゃいない…。」

とりあえず俺は優しく声をかけた…。

すると竜人族の少女は首を振って言った。

「…“フレイア”を…殺さないで…」

「…フレイア…？」

俺が首をかしげると少女は俺達の背後を指さした…。

俺達もそれにつられて背後を振り返る…。

「…アレか…？」

俺は呆氣にとられる…。

「…アレみたいだな…」

アレムンドさんを背負ったカインも啞然としている…。

「…フレイア…私の友達。」

少女が言う…。

その友達とやらはどうやら後ろでイビキをたてて熟睡しているモンスター、リオアンセスのことらしかった…。

モンスターが友達とはこれまたデンジャラスな少女だ…。

「……。」

俺は何て言えばいいか分からなかった…。

「…とにかくだ…。君は誰なんだ…？」

カインが混乱する俺の代わりに話を進める…。

「…ナズナ…。」

少女は出会った時よりも少し落ち着いた様子だった…。

「オツケー、ナズナ。…君はどこから来たんだい…。」
カインは引き続きで尋ねる。

「ポポロ村…。ここから少し行ったところ…。」

ナズナの言ったことにカインは一瞬戸惑って言葉を止める…。

162

「…村があるのか…?」

俺はカインと目を合わせて言う…。

「…そうらしいな…。」

カインも半信半疑といったところだろう…。

「……。」

ナズナはうつ向いたまま黙っている…。

「…村があるのは本当だろうな…。でなければこんな場所に少女が

一人でいるはずない…。」
カインは冷静に考える…。

「…ナズナ…。ここから近いと言ったな…。案内できるか？」

「オイオイ!!…行くのかよ…!？」

俺はカインの考えに驚きを隠せなかった…。

「…一刻も早くアレムンドさんを治療できる場所まで運ばないといけないだろ…。」

「……。」

カインが言ったことで俺は現状を再認識して言葉を失う…。

「…フレイアは…？」

「殺さない…。放っておけばすぐに眼が覚めるだろう…。」

ナズナは心配そうに言うがカインはあくまでも優しく対応する。

「…アツシュ、少し頼む。」

カインはそう言うとアレムンドさんを託してくる…。

そしてカインは神楽を抜いてフレイアと呼ばれたりオアンススに近

寄って行く…。

カインは神経を研ぎ澄ませ…

「…ふん…ッ!」

カインはリオアンセスの上に倒れている大木を斬った…。

大木は重心がズレて転がり、下敷きになっていたリオアンセスは解放された…。

「…これでいいな…。」

カインは神楽を鞘に収めた。

「…ありがとう…。」

ナズナは今ので俺達が悪者ではないというのが分かったのか笑顔で礼を言ってきた…。

「…まあ、これで村に連れて行ってくれるならイーブンだ。」

カインは少し照れて横を向く。

「…分かった。連れて行く。」

ナズナはそう言うつと後ろを向いて駆け足で進み出した。

「…村か…。原住民がいないって方がおかしかったのか…？」

俺は一人呟いてナズナを追ってアレムンドさんを背負った状態で歩き出した。

ナズナの案内で俺達は密林を進んだ…。

迷宮の様な森をナズナは軽快な足取りで進んで行く…。

そこにはれっきとした道が存在していた…。

「…こんな道があったのか…」

俺は密林の中に意図的に隠された道が存在しているのに驚いた。

「…村があるのは確実に…な…。」

カインはアレムンドさんを支える俺を手伝いながら辺りを見回している…。

おそらくは辺りの地形を把握して覚えているのだろう。

「…ところで、ナズナ。モンスターが友達とはいったい？」

ここでカインが疑問を言う。

するとナズナはこっちを振り返って答える。

「フレイアはとってもいい子。話せば分かる…。」

「……………」

カインと俺はまたもや沈黙してしまう…。

モンスターと話すなんておとぎ話もいいところだ…。

ナズナはその後モフレイアという長い脚と尻尾を持つ飛龍のことを話した…。

どうやらあのリオアンセスはナズナを守っているらしく、俺達が閃光玉を投げて戦いを挑んだ時は近くに散歩に出たナズナがいたため向こうも必死に攻撃してきたらしい…。

しかもあの時、リオアンセスに俺が不思議な力を持った武器を持っていることを伝えたのは戦いの一部始終を見ていたナズナらしかった…。

ますます訳が分からない…。

そんなことを考えているとナズナが足を止めた…。

「…ここがポポロ村だよ。」

俺達はナズナの見ている方を見る。

すると密林の出口があつてその向こう側、切り開かれた大地の中央に村があつた…。

村は高い塀で囲まれている…。
そして入り口には巨大な門。

その門の前に一人の竜人族の男がいるのを発見した…。

「…お父さん!!」

ナズナはその男を見た瞬間に走り出した…。

どうやら父親らしかった…。

「…ナズナ!!勝手に村から出るなと言つたろっ!!心配していたんだぞ…。」

父親らしき人物はナズナを抱きしめる…。

俺達はその感動の現場に近づいて行く…。

向こうもそれに気づいたのか少し驚いた顔をしていた…。

「…なるほど君たちも異国から来た人間か…!!」

あの時、俺達はこれまでの経緯を話した…。

今は村の中心にあった一番大きな建物の中にいる…。

アレムンドさんも別の部屋で治療を受けて安静にしている。

ナズナの父親はこの村の村長だったらしく事情を話したところ滞在を許された…。

「…ところでジンさん…。」

俺はナズナの父親で村長のジンさんに尋ねた。

「…今、俺達“も”異国から来た人間って言いましたけど他にもハンターが…?」

「…ああ、ナズナを探している時にね…。なにやらボロボロだったから介抱したんだ…。今は隣の家にいるけど会うかい？」

「ええ、ぜひとも。」

俺は他にもポポロ村にたどり着いたハンターがいたのかと思いつつジンさんに案内されて外に出る。

外はすでに日が落ちており、嵐がくるという情報通りに風が強いものになっていた。

まだ小雨だが雨も降っている。

「…強くなりそうだな…。」

「やっぱり嵐がきますか…？」

カインがジンさんの漏らした一言に反応する…。

「年に数回ある大嵐さ…。でも大丈夫、村には守護神様がいるからね…。」

「…守護神…？」

再びカインが反応する。

「村の守り神さ…。奥に祭殿があるんだよ…。明日あたりに拝んで

おきなよ。」

ジンさんはそう言って隣の家の扉を開けて中に入って行く。
俺達もそれに続く…。

家の中はそれなりに立派なものだった…。

「…ここは少し前までは君達と同じくハンターを生業としていた村人が使っていたところだよ。今日はここを好きに使ってくれていい。」

ジンさんはそう言ってもう一人のハンターを呼びに行った。

「…なあアツシュ…。この展開はマズいな…。」

カインが思い立った様に言う。

「…ああ、奴だ…。奴の生み出す独自のタイミングだ…。」

俺も感じる…。

奴の気配を…。

ジンさんはその男がいるであろう扉を叩く。

「…おそらく奴も俺達を感じているはずだ…。」

カインが言う…。

「ならば奴を放置することはできないな…。」

そう…、俺達には何故かは自分達にも分からないが奴を潰すという使命があった。

そしてジンさんが扉を開く…。

「…せいやぁーッ!!」

俺はその瞬間に飛龍もイビキをかく麻酔玉を投じる…。

そして見事に部屋から出てきた存在にぶち当たる。

「…やはりハサン、貴様であつたか…。」

カインは呟く…。

「…せめて一言…、一瞬でいいから出番を…。」

「今、喋っただろ…。」

扉の向こうにいた存在、ハサンは無情にも深い眠りについた。

「…まあ、知り合いみたいだから大丈夫かな…？」

ジンさんは戸惑いながらも適当に納得してくれた…。

「…まあ、さつきも言っただけどこ使ってくれていいから。今日は疲れているみたいだからこれで失礼するよ。」

ジンさんはそう言って出て行った…。

「…早速だが、寝るか…。」

思えば結構なダメージを受けている…。

明日のことは明日考えよう。

それがハンター流…。

「だいぶん適当だよな…。」

俺達は結局、ハサンを縛って外に捨ててから眠りについた…。

《
続
》

11話：嵐の前の静けさ（後書き）

ハサンが出ました、一瞬ですけど…。

感想まっています

12話：ポポロ村

翌朝…。

俺達はずっと意識を失ったままだったアレムンドさんが意識を取り戻した、という報せを受けたので様子を見に行った。

アレムンドさんは多少のダメージはある様だったが、治療を受けて傷はほとんど塞がっているらしかった。

「…いやゝ、焦ったよ。目を覚ましてみると全然知らない場所にいるんだからね…。」

アレムンドさんは笑いながら言う。

アレムンドさんには既にある程度の事情を説明してある。

「…俺のせいで…。」

俺は申し訳なくて顔を合わせることができずに下を向いていた。

「いや…、アレは誰だって予想できない事態だった。仕方のないことだろう。」

アレムンドさんを俺を責める気が全然ない様だった。

「そうだ。その事でジンさんに聞きたいことがあるんだった。」

今の会話でカインが何かを思い出した様だった。

「…ナズナのことだな。」

さすがに察しが良いとは言えない俺でも分かる事ではあった。

「ああ…。」

カインはそう言うつと辺りを見回した後、近くに控えていた一人の村人に話しかけた。

多分、ジンさんの居場所を聞いたのだろう。

「…ジンさんは祭殿の方にいるらしい。」

カインが言う。

「昨日言っていた場所だな。」

俺達はジンさんが祭殿の方にいると知り、とりあえずそこに向かうことにした。

「私もついていこう。」

横になっていたアレムンドさんがムクリと起き上がる。

「もう起きても大丈夫なんですか？」

カインが少し驚いて言う。

「寝てばかりでは体がすぐになまりそうでね。少し歩くぐらいなら大丈夫だろう。」

「それならいいんですけど…」

俺達はジンさんが村の奥にあると言っていた祭殿に向かって歩き出した。

村の中は案外賑やかで辺りで採られた食物が運ばれてくる。

「…これだけモンスターの生息する場所だ。この村にもハンターがいても不思議ではないか。」

カインが突然そう言ったのは運び込まれる物資の中に混じって運ばれる討伐されたモンスターの姿もあったからだ。

モンスターの素材は日常生活でも何かと有用なのだ。

そういえば昨日泊まった家も元ハンターの物だとジンさんが言った気がする。

「おっ！？アレじゃないか？」

俺は討伐されたモンスターの足下に一人のハンターらしい人物を発見した。

「レウス装備か…。さすがこんな秘境の中でハンターをやるだけはある…。」

カインも俺の視線の先を見る。

カインの言った通りそのハンターはあのリオレウスの素材で作った鎧を着込んでいる。

鎧は軽めで弓やボウガンといった飛び道具を使いやすくするための特殊な形状をしている。

おそらくあのハンターは遠距離武器を得意とするんだろう

そう考えるうちにそのハンターは見えなくなってしまったが、代わりに俺達の目にはジンさんの言っていた祭殿が見えた。

「立派なものだな。」

アレムンドさんが言う。

たしかに明らかにこの建物は他の建物よりも力を入れて作っていると思う。

しかし、何かを祭っている建物というよりは、何かを守っている建物という印象を受けるのは俺だけだろうか…？

祭殿の入り口には立派な門。

ところどころに細かいレリーフが施してある。
レリーフは全て飛龍を描いたものみたいだ。

俺達は門をくぐって中に入ろうとする。

すると門の脇にあの少女がいるのを発見した。

「…ナズナ？」

俺は声をかける。

「あっ！！」

ナズナは笑顔でこちらを見返してくる。

「ここで何をやってるんだ？」

カインが尋ねる。

「…お父さんを待ってるの。」

ナズナは答える。

やはり中にジンさんがいるようだった。

「この娘が例のリオアンセスを友達って言った娘かい？」

アレムンドさんが俺にそっと聞いてくる。

「ええ、そうです。なんでもリオアンセスのことをフライアって呼んでるみたいです…。」

俺も小声でアレムンドさんに返す。

「あっ！！おじちゃんも元気になったんだ！！」

ナズナはアレムンドさんを見て言う。

ただ俺はNGワードがはいっていたと思う。

「おかげさまでね。ただ私のことはおじちゃんではなくお兄さんと呼んでくれないかな？」

やはりアレムンドさんは気にしてるみたいだ。

「おじちゃんはおじちゃんだよ!!」

ナズナはハッキリと言った。

「俺は…まだ…お兄さんと呼ばれたいんだあああーッ!!」

「あ…アレムンドさん!!」

アレムンドさんは例のごとく走り去った…。

「アレさえなければな。」

カインが言う。

それには俺も同意する。

「…？」

ナズナは未だに分からないみたいだった。

「ところでナズナ。俺達もこれからジンさんに用があるんだがナズナも待つてゐるならついて来るか？」

俺はナズナに聞いてみる。

しかしナズナは首を縦には振らなかった。

「あそこは嫌な感じがするから行かない…。」

ナズナの表情は曇る。

「…？まあ、イヤなら無理には行かなくていいよ。」

俺はまたもナズナの言動が分からなかった。

そしてナズナを置いて俺達は祭殿の中に入って行つた。

「…ナズナはこの雰囲気は嫌だったんじゃないか？」

カインが言う。

「たぶんな…。」

俺は辺りを見回す。

祭殿の中は薄暗く。

無数の飛龍を型どった像が並んでいた。

レリーフの数も奥に向かうほど増えている。

そして一番奥には巨大な龍の形をした他のよりも大きな像。
アレがどうやら御神体の様だった。

さらに俺達は御神体の足下にジンさんがいるのを見つけた。

俺達は御神体に近寄って行く。

「ジンさん!!」

俺はジンさんに声をかける。

ジンさんはこっちを振り向く。

「おお!! 君達も御神体を見に来たのかい?」

「ええ、まあ。龍ですか?」

俺は興味津々に尋ねる。

ジンさんは御神体を見上げながら答えた。

「ああ、我らが護り神、ミラ・ボレアスの像さ。」

「「ミラボレアス!?!」」

俺とカインの声が重なる。

なぜならミラボレアスというのは伝説上の邪龍だ…。破壊の化身とも言われるミラボレアスは大昔に実際に存在し、いくつもの国を滅ぼしたという。

なぜそんな邪龍が護り神として祭られるのか…。

たしかに黒龍信仰という圧倒的な力を持つミラボレアスを神と崇める考えはある。

しかし、この大陸でそんなものと巡り会うとは思わなかった。

ただ黒龍伝説は海を越えてこの大陸にもあったようだ。

考えをまとめているとジンさんは真剣な面持ちで言った。

「ミラボレアスについては正直に言っと私にもよく分からない。だがこの祭殿が昔からこの村にあつて、災いから村を守ってくれているのは確かなんだ…。」

「…。」

俺はジンさんがそう信じている以上、何も言えなかった。

「あつー！ところでジンさん、お聞きしたいことがあるんですが…。」

ここでカインが口を開いた。

「ん？何だい？」

「…ナズナのことなんですけれど。」

「…。」

ナズナの名前を聞いた瞬間にジンさんは口を閉ざしてしまった。

しかし、少しの間の後で再び口を開いた。

「言おうとしていることは分かるよ。モンスターと話ができるとナズナが言ったことだろう？」

「ええ、そうです。」

ジンさんが確認したことにカインは肯定する。

「知ってしまった以上は仕方がないか。村人だって知らない者がほとんどなんだ。絶対に他言無用だよ。」

ジンさんが俺達を見据えて少々威圧的に言う。

「じゃあ、ナズナの言ったことは本当なんですか？」

「ああ、その通りだ。ナズナはミラボレアスの巫女にして“竜操術”の担い手だ……」

「竜操術……」

俺達はこれから話されるであろうことに息を呑んだ。

《続く》

13話：穏やかな時（前書き）

最近は少し微妙な話が続いている気がします。

ぜひとも感想を聞きたいです！

13話：穏やかな時

ミラボレアスの生態には様々な説があるが詳しい事は分かってはいない。

ただ俺の知る全ての逸話の中で奴は破壊の限りを尽くす。

それはまさしく邪龍そのものだが、例外もある。

要は視点の違いだ。

例えば大国が小国を侵略しようとしていたとする。

しかし、戦争になる直前に大国はミラボレアスに滅ぼされた。

大国からすれば悪夢以外の何でもないが、小国からすれば邪龍ミラボレアスも救世神の様に思えるだろう。

それが黒龍信仰の始まりだ。

しかし、ポポロ村の黒龍信仰は別のパターンらしい。

だが、それについては村の秘密に関わるらしく教えてもらえなかった。

しかし、竜操術については教えてもらった。

まず、ジンさんの言ったミラボレアスの巫女とは、守護神とは言ったものの、危険性を伴うミラボレアスの力を抑え込むための存在だという。

さらに巫女は代々モンスターと話ができるらしい…。

しかも巫女の言葉はモンスターに対して特殊な拘束力を発揮するらしかった。

それがいつの間にか竜操術と呼ばれるようになったらしい。

馬鹿げた話だとは思ったがナズナを見るかぎりはそうは思えなかった。

ともかくナズナはまだ幼いが竜操術が外部に知れると、それを利用しようする奴が出てくるかもしれない。

だから口止めされたのだ。

「信じられないよな……。」

「まったくだ……。」

まあ、そんな半信半疑の話のあとで俺達は村の門の所で待ち合わせをしていた。

何故そんなことをしているのかと言うと、俺達はしばらくこの村に滞在することにしたので、軍の駐屯地にある自分達の荷物を取りに行こうとした。

するとジンさんが村のハンターの一人に密林の道案内を頼んでくれたそうだ。

たしかにあの原生林の迷宮を俺達だけで抜けるのは辛い。
おそらく日が暮れてしまっだろう。

「おい！！ひょっとしてあの人じゃないか！？」

俺は装備を整えた姿でこちらに歩いてくるハンターを見つけた。

「どうやらそうらしいな。しかも朝、村の中で見たハンターじゃないのか？」

カインも俺の視線の先にいるハンターを見て言う。

俺達の視線の先のハンターは確かにリオレウスの鎧を着たあのハンターだった。

その背中には鎧と同じくリオレウスの素材を使った弓、プロミネンスボウが背負われている。

プロミネンスボウは使い勝手がいいだけでなく、放った矢には炎属性の力が宿る。

ただし手にするには最低でもリオレウスを倒せるだけの实力がいるわけなんだが。

「あなたがジンさんの言っていたハンターですか？」

俺はやって来たハンターに聞いてみる。

するとそのハンターは顔を隠していた兜をとって答えた。

「私がアナタの言うハンターに間違いないわ。私はエレノア。今日はこちらで頼むわ。」

後ろで纏められた長い亜麻色の髪が揺れる。
やって来たハンターは女性だった…。

竜人族だけに俺の目測が正しいかは分からないが、外見的には俺達よりも年上だろう。

20代半ばってどこか…？

「…驚いた。」

とにかく俺とカインは呆気にとられた。

「男だと思っただのかしら？」

エレノアさんは微笑んで言う。

「ええ、正直に言っただけ外でした…。リオレウスを倒せるだけの
実力のハンターのイメージとは違って…。」

「フフフ、外見で判断するのは良くないわ。それでも弓を持たせて
くれたら男にだって負けるつもりはないわよ。」

エレノアさんは自信ありげに手にした弓を引くフリをしながら言う
てのける。

「今日は頼りにさせていただきます。」

俺とカインはエレノアさんに素直に平伏した。

「さてと…。密林の抜け道を教えればいいのね？」

エレノアさんは仕事の確認を始める。

「はい、海岸沿いに仲間達の駐屯地があるんで。」

「それなら一回見に行ったことがあるし大丈夫よ。なにか珍しい人がやって来たと思ってたわ。」

エレノアさんもやはり外から来た俺達に興味があるようだった。

「じゃあ今日はあらためてよろしくお願いしますー！」

俺達は頭を下げて言った。

「任せておいて。じゃあ、行きましょうか？」

そして俺とカイン、そしてエレノアさんは密林に入って行った。

「なんかミラボレアスが御神体って違和感を感じますよ。」

密林の秘密通路を進む途中で俺は声をあげる。

「まあ、確かにな…。」

カインも俺に同意してくる。

巧妙に隠された道を見つけながら先頭を歩くエレノアさんは少し困ったような顔で振り返る。

「まあ、そう思うのも仕方ないわね…。一応だけれど私達の村にも邪龍・ミラボレアスの黒龍伝説は伝わっているわ。」

「えっ！？じゃあ、どうしてミラボレアスを村の護り神にするんですか？」

驚きのあまり俺はエレノアさんの言葉を遮る。

「村長に秘密にしろって言われてるんだけど…。」

「そこをなんとか…！」

カインは俺よりも気にかかっていたのか渋るエレノアさんに食い下がる。

「…どうしようかしら。私としては別に構わないんだけど、村長がこだわってるから…」

エレノアさんはしばらく考えた後、突然として歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

カインは突然足を止めたエレノアさんを不思議がる。

「静かに!!」

しかし、エレノアさんは右手で俺達を制して、左手の人差し指を口元に当てた状態で言った。

「…どうやらナワバリに入ってしまったみたいね。」

「ナワバリ？誰の？」

俺はエレノアさんに尋ねる。

すると、エレノアさんに代わりカインが答える。

「臭いだ…。鼻を使え。」

「臭い？そういえば何か独特な香りが…？」

俺は香りの正体を探るべく鼻を利かしてをよく嗅いでみる。

…この臭いは…。

「くさあ…ッ！！何だよコレ、フンの臭いか！？」

俺はやばいくらい刺激的な臭いに鼻を塞ぐ。

「モンスターのフンで正解よ。ただし、この臭いは自らのナワバリを表すためのものよ。」

エレノアさんが鼻を塞いで驚く俺に言う。

さらにカインがエレノアさん言葉を引き継ぐ。

「こんな手段でナワバリを誇示する奴は一匹しかない…。ババコンガだな。」

「ああ！！なるほどババコンガの奴か！！」

俺はそんなモンスターもいたと納得した。

ババコンガはピンク色の毛並を持つゴリラの様なモンスターだ。
ゴリラと違って器用に動く長い尻尾を持ち、その尻尾で大好物のキノコをいつも持ち歩いている。

ただ少々、いや、かなり下品なモンスターでもある。

敵対したモンスターやハンターにオナラで攻撃したり、フンを投げつけたりする。

だから自ら望んで戦いに行くハンターはあまりいない。

俺も一度戦ったことがあるが二度は行きたいとは思わなかった。

「いや、忘れてたぜ。ババコンガなんて久しぶりだな。」

「……どうしますエレノアさん？別に戦ってもいいですけど。」

カインがエレノアさんに確認してみる。

エレノアさんは少し考えてから言った。

「アナタ達の目的を優先してあげたいところだけど、こんな秘密通路のある場所をナワバリにされるのは嫌ね。」

「じゃあ……。」

「ええ。悪いけど少し手伝ってもらえる？」

「「まかせてください!!!」」

俺とカインは力強く答えた。

そして俺達はババコンガのいる場所を探して歩き出した。
おそらくは臭いが一番強い場所にいるだろう。

あまり嗅ぎたくない臭いだが、仕方ないので臭いを辿って行く。

しばらく臭いを頼りに探してみるとババコンガは思ったよりも近くにいた。

キノコの生えた木の前に座ってキノコを貪っている。

「仕掛けますか。」

カインは神楽を鞘から抜く。

するとエレノアさんは一つ提案をしてきた。

「ねえ、一つ勝負をしない？私に勝ったら、村長の隠したがつている秘密を教えてあげるわ。まあ、正直に言って大した秘密じゃないけれど。」

俺とカインは顔を見合わせて考えを交わす。
そして答えた。

「いいですよ…。で、何で勝負するんですか？」

「簡単よ。奴にトドメの一撃をいれた人が勝ち。ただし私が勝ったら秘密は諦めてもらうわ。」

エレノアさんはプロミネンスボウを手にして、軽く動作確認をしながら言う。

「…じゃあ合図はコレで。」

俺はポーチから自分の大陸で使われている通貨を取り出す。

エレノアさんは無言で頷いた。
準備はいいようだ。

それを確認した俺はコインを親指で弾いた。

コインは空中で何度も回転し、そして地面に落ちた。

俺達はそれを確認する間もなくすでに駆け出していた…。

《続く》

14話：狩猟競争（前書き）

久しぶりのキャラ紹介です。

キャラ紹介

エレノア

身長180近い長身（竜人族は全体的に身長高めという作者勝手なイメージのため）

特徴

竜人族

亜麻色の長い髪を纏めている。
紅い目に長い耳が特徴

使用武器

弓ひとすじ

好きなもの

勝負事・お酒・仕事

嫌いなもの

特になし

14話：狩猟競争

弓という武器は遠距離からの攻撃が可能だが、その分だけ威力は低い。

だから基本的には矢の先端に毒薬や睡眠薬といった物を装着して相手を弱らせていくのが戦術だ。

しかし、エレノアさんはリオレウスを倒すほどの実力者だ。離れて特殊な矢を射るだけの戦術なんて使わないだろう。

俺はチラッとエレノアさんの方を見る。

「うわっ！！足速いな！！」

ついさっきまで近くにいたエレノアさんはもう遠くまで離れてしまっていた。

「敵に狙われたら逃げて間合いをとるしかない弓使いにとって足の速さは重要不可欠だからな……」

驚く俺を尻目にして、カインは冷静な目でエレノアさんの動きを見ていた。

エレノアさんはすでにババコンガを射程圏内に捉えた様で、プロミネンスボウに矢をつがえて弦を引いて狙いを付けていた。

「先手はもらうわ。」

俺達に言ったのか、ババコンガに言ったのかは分からないが、エレノアさんは炎の力が宿る矢を放った。

放たれた矢は安穩とキノコを食べていたババコンガの背中に直撃する。

ババコンガは突然の攻撃、それも苦手とする炎の力を受けて驚き、そして叫び声とも言える鳴き声をだして暴れ狂う。

何が起こったか分からずに、ただ怒りと警戒心を前面に押し出しているのだろう。

エレノアさんはそんなババコンガに容赦なく矢を放つ。

それも一本、一本の矢を全てババコンガの死角に移動して射っている。

「さすがに鮮やかだな。」

俺は手放してエレノアさんの馴れた動きを賞賛する。

「負けていられないだろ！！俺達も行くぞ！！」

カインが言って、俺達はババコンガに突っ込む。

それを見たのか、エレノアさんの矢の攻撃が止まる。

「実力拝見、とでも言いたいのか…？」

カインがエレノアさんの考えを読み取る。

「別にいいんじゃないか。少しはカッコイイところを見せてやろうぜ！！まずはいつも通りの作戦でな。」

俺はカインに言って、ババコンガの正面に立つ。
手にはギアノスクロウズを構えている。

当然だが見えない敵に怒りを燃やしていたババコンガは俺を見た瞬間に襲いかかってくる。

長く尖った爪のついた腕で振り払うだけの単純な攻撃だが、威力とスピードは強烈だ。

「さすがに見た目通りのパワーを持ってやがるな！！」

俺はステップしてババコンガの攻撃を避ける。

しかし、当たってはいないがババコンガの腕が空気を裂いた時の風切り音は凄まじく、それだけでババコンガの野生のパワーが伝わってくる。

するとババコンガは振った腕の勢いを利用して連続で腕を振るって

攻撃を仕掛けてくる。

しかし俺はそのババコンガの動きに割って入る。

「ちょっとは反撃させてもらうぜ……!!」

ババコンガは先ほどとは逆の腕を振るってくるが、俺はその下を潜り抜けてババコンガに密着する。

「うらああッ!!」

俺は左脚を軸に一回転しながらギアノスクロウズを振るう。

左右の手に一本ずつ持ったギアノスクロウズはそれぞれ一回ずつババコンガを切り裂さいた。

そして二ヶ所から血を吹き出させるが、肝心の氷属性攻撃はババコンガの持つピンク色の体毛に弾かれて無力化されてしまっている。

それどころかババコンガは斬撃によるダメージを受けながらも怯まず攻撃してくる。

俺はババコンガの脇を通り抜けて一旦離れる。

「……やっぱり氷属性はババコンガには効かないか。」

俺は装備の相性の悪さに舌打ちする。

しかし、役目は果たした。

さっきの攻撃はいつもの陽動作戦だ。
ダメージを与えられなくても別に問題なかったのだ。

俺はカインがババコンガの背後に回り込んでいるのを見て作戦の成功を確認した。

「予定通りだ!!」

カインはババコンガにとっては不意打ちとなる一撃を放つ。

ザクツという刃が突き刺さる音がして、そのままの勢いで振るわれた神楽はババコンガの背中を大きく切り裂く。

ババコンガは怒りのあまり痛みを忘れていいのか、顔を真っ赤にしてすぐさま背後のカインに飛びかかる。

が、すでにカインはそこにはいない。

俺達は今のところはババコンガをうまく手玉に取っていた。

「なかなかやるじゃない。」

アッシュ達の一連の動きを静観していたエレノアは微笑みをもらした。

そして再びプロミネンスボウを構えて攻撃を開始した。

今度は矢の先端に強撃ビンと分類される矢の威力を上昇させるためのビンをセットしている。

ババコンガは俺達の連携で大きな傷を負ったばかりか、再びエレノアさんが攻撃を始めたため、不利を悟ったのか慌てて逃げ出した。

「余裕だな。」

元より機動力のある攻撃を得意とする俺達はパワータイプのモンスターを相手にするのは得意だった。
そして今回はさらに競争意識が働いたため、いつになく絶好調だった。

「思ったよりもやるわね。」

エレノアさんが近くまで戻って来て言う。

「まだこれからですよ。」

俺はババコンガが逃げた方を見据える。

「そうね、あともう少しいってところかしら。」

エレノアさんはそう言ってババコンガを追いかけ始めた。

「アッシュ！！勝負の勝ち負けを気にしすぎるなよ。」

カインも俺に注意をうながしてエレノアさんの後を追う。

「どっちかと言うと、今回はオマエの方が勝負にこだわっていると思うぞ。」

俺も言い返してカインに続く。

まあ、とにかく焦り過ぎて大ケガでもしたら大変だからな。

ババコンガには高い攻撃力があるが、落ち着いて行けば大丈夫だろう。

そう思いながらカインの後ろを走っていると突然目の前にカインの背中が迫ってきた。

何故かは分からないがカインが突然足を止めたのだ。

俺は自分の勢いを止められず、カインに後ろからぶつかってしまふ。

「おい、カイン！！急に止まるなよ！！」

俺はぶつかった時にカインの背負っていた太刀の鞘に鼻をぶつけてしまい、その事を含めて鼻に手をあてながら苦情を言った。

しかしカインは全く気にしてはおらず、ただ目の前を指差した。

「…？」

俺はカインの行動が理解できなくて、とりあえずカインが指差した場所をカインの肩越しに見てみる。

「ババコンガ…。」

その指指された先には先ほどまで俺達と戦っていたババコンガがいた。

正確に言えばババコンガの亡骸だが…。

「ひょっとして、もうエレノアさんが倒しちゃったんですか？」

俺は同じく近くで様子を見ているエレノアさんに聞く。

「いくら私もそんな芸当はできないわ…。」

当たり前のような答えが返ってくる。

「ババコンガの胸の傷をよく見てみる。あんな傷は人がやったものじゃない。」

カインに言われて俺はあらためてババコンガを見る。

「エグいな…。」

ババコンガは胸に風穴が空いていた。
明らかに致命傷だ。
たしかに人間の力ではない。

「じゃあ何が…？」

俺は辺りを見回す。

たぶん、ババコンガを絶命させた犯人はまだ近くにいます。

逃げたババコンガに俺達が追いつくまでの時間はほんの少しだった。

バキバキバキ…ッ！！

「！？」

突然として木々が倒される音が響き渡る。

しかもそれは凄い勢いでこちらに向かってくる…。

「この響き渡る足音…、敵は大きいぞ！！」

カインが声をあげる。

「来るわよ!!」

エレノアさんの合図で俺達はそれぞれバラバラの方向に注意を向ける。

足音はどんどん激しさを増して行き、そしてついにソイツは俺達の目の前に飛び出して来た。

ファンゴという猪と同じ外見のモンスターがいる。

ファンゴの群れにはドスファンゴというリーダーがいる。

ドスファンゴはファンゴよりも一回り大きく白い体表と巨大な牙が特徴だ。

その大きさは人間よりも少しほど大きいくらいだ。

しかし今、俺達の目の前にはその常識を覆すドスファンゴが存在している。

「デカイな...」

思わず声がでてしまう。

それほど存在だった。

通常種の3倍から4倍くらいはあろうか、というほどの大きさをもつドスファンゴは…。

《続く》

14話：狩猟競争（後書き）

感想まっています。

15話：猪突猛進（前書き）

最近、他の先生方のモンスターハンター小説のおかげでモンハン熱が再発しました。

だから最近頑張つてハイペースで更新してます。

他の先生に少しでも追いつくために…。

他の先生方の作品は素晴らしい物が多いのでそっちの方も見てみて下さい！！

感想、意見、アドバイス待ってます！！

15話：猪突猛進

俺達はドスファンゴと睨み合いになった。

とは言っただものの、威圧感なら圧倒的に向こうが上だ。

俺達はジリジリと後ろに下がっていく。

「こんなドスファンゴもいたのね…。私もまだまだ経験が足りないかしら。」

エレノアさんも焦りを隠せず冷や汗をかいている。

今になって気づいたのだが、異常にでかいドスファンゴの異常にかい牙は生々しく血に染まっていた…。

おそらく俺達から逃げてきたババコンガは運悪くコイツと遭遇してしまい、その牙に貫かれたのだろう…。

「ふざけたサイズだな。ハンターズギルドはキングサイズよりも上のクラスを作るべきだな。」

とりあえず愚痴を言ってみるが状況は変わらない。

この巨大なドスファンゴが突き進んだ後には新たな道ができるんじゃないだろうか。

そんなことを考えている間にもドスファンゴは鼻息を荒くしながらジリジリと間合いを詰めてくる。

「まずいな…。もう逃げ場がないぞ。」

カインが背後を気にして言う。

「戦うか？」

俺はカインに聞いてみる。

しかし、カインから答えが返ってくる前にドスファンゴが先に仕掛けてきた。

後退する俺達に向かって破壊力を感じさせる凄まじい突進をしてきたのだ。

「嫌でも戦うしかないみたいだな！！」

カインが叫ぶ。

「気をつけて！！狙いはアッシュ、アナタよ！！」

エレノアさんがドスファンゴの軌道の先が俺であることを見て注意を促す。

「ギリギリ避けられるか？」

俺は武器を抜くよりも先に、まずドスファンゴの突進を避けることに専念する。

そうでもしないと巨大すぎるドスファンゴの突進を避けられそうになかった。

「おらぁ…ッ!!」

俺は気合を込めて思いっきり横に飛び退く。

白い巨大な牙を突き出したドスファンゴは土煙を巻き上げつつ、そんな俺に向かってくる。

当たればババコンガをも一撃で絶命させる突進。

それが俺の脚に当たるか、というギリギリのところを外れた。

ドスファンゴはそのまま突進していき、少ししたところで地面を抉りながらブレーキをかけて止まった。

「危な…ッ!! なんとか生き延びたか…。」

無傷で生還した俺は安堵の息を吐く。

「アッシュ!! 呆けてないで反撃だ!!」

カインが叫んでドスファンゴに斬り掛かる。

エレノアさんもプロミネンスボウで矢を放つ。

さっきのババコンガと同じく炎の矢は有効なハズだ。

ドスファンゴは突進を外して俺達に背後を見せていたため攻撃をまともに受ける。

プロミネンスボウの矢はドスファンゴの体に突き刺さり、カインの神楽がそのドスファンゴの足を斬って動きを鈍らせる。
特にカインの攻撃は突進しか主な攻撃手段を持たないドスファンゴに対しては有効的だろう。

「さすがカイン！！」

俺はカインの後に続くべくギアノスクロウズを振るう。

しかし、刃の短い双剣・ギアノスクロウズでは浅く切り傷を与えるだけで、またもや肝心の氷属性攻撃はドスファンゴの白い体毛に弾かれてしまう。

「ああ！！またもや俺の活躍はないのか！！」

俺は自らのドスファンゴに対しての攻撃力の低さに嘆く。

「今回は諦めなさい。」

エレノアさんにハッキリと言われる。

「じゃあ、いつも通り、またオトリの役目だな。」

さらにカインが追い討ちの様に言うてくる。

「ギリギリの回避行動を何回もやれってか！？当たればヤバいかもしれないんだぜ！？」

俺は全力で拒否する。

「じゃあドスファンゴの近くで戦うんだ。遠くに行くと逆に避けにくくなる。密着していた方が安全だな。」

「対策が分かるなら、初めからそう言えよ！！」

「オマエの粘り具合は毎回楽しみの一つにさせてもらっているからな。」

「…カイン…、いつか覚えていろよ！！」

そんなバカ話をしながらもドスファンゴに密着して攻撃を加え続ける。

故人曰く、塵も積もれば何とやらだ。

ドスファンゴも俺達との距離が近すぎて戦い難そうだった。突進も当たらずに、その場で牙を振り上げても体格差が大きすぎて当たらない。

だが、ドスファンゴは遂に遠くに離れて攻撃しているエレノアさんに狙いをつけた。

俺達の攻撃を受けながら、カインに足を斬られていることを感じさせない突進を見せる。

「エレノアさん!!」

俺は迂濶だったと叫び声をあげる。

いくら逃げ足の速いエレノアさんでも、あの距離ならドスファンゴの直線的な突進にも若干の誘導がかかるため避けられない。

「フッフ、やっぱり私を狙ってきたわね…。」

しかしエレノアさんは余裕の笑みを浮かべている。

それもそのはずだ。

いつ仕掛けたのか、エレノアさんの少し前方にはシビレ罠が設置されていた。

シビレ罠は文字通り、電撃で相手を麻痺させて動きを止めるための罠だ。

主にモンスターを捕獲する時によく使われる。

その効力は抜群で一部のモンスターを除いて、どんなモンスターも動きを止める。

そして案の定、あの巨大なドスファンゴが突進の最中であっても動きを止めた。

「ドスファンゴは単純だから罠に掛かりやすいのよね。」

エレノアさんは結果を見て満足気に笑う。

ドスファンゴはうめき声をあげてひっくり返っている。

「アナタ達、麻酔玉持つてる？捕獲してしましましょう。」

エレノアさんに言われて俺とカインは一つずつ麻酔玉を取り出してドスファンゴにぶつける。

ドスファンゴは俺達の攻撃でダメージが溜まっていたのか、アッサリと眠りについた。

「捕獲成功ですね。」

俺は眠るドスファンゴを見て言う。

「でも、こんなデカイ奴を運ぶんですか？」

カインが当然の疑問を言う。

「それなら心配いらないわ。頼もしい運び屋がいるから。」

エレノアさんは問題ない、という表情のままだ。

「運び屋？」

「まあ、見てて。」

俺が聞くと、エレノアさんは空に向かって何かを放り投げた。

投げられたのは赤い光を発する閃光玉だった。

「何か来るんですか？」

カインは赤い光を見つめる。

「アナタ達も知っているわ。ほら！！来たわよ。」

エレノアさんは向こうの空を見つめる。

俺達もその方向を見る。

紅いシルエツトが飛んで来て、俺達の頭上を通過する。

「リ…リオアンセス…。」

俺とカインはまさかのリオアンセスの登場に啞然として口を揃えて言う。

「驚いた？フレイアはナズナちゃんが村にいる日頃はこうやって村のハンターが捕まえたモンスターを運んでくれるのよ。ナズナちゃんが頼んでくれたみたいでね。」

エレノアさんが言っている間にリオアンセスはゆっくりと降下してきて、眠るドスファンゴをその長く強靱な足で驚掴みにする。

そして巨大なドスファンゴをも物ともせずを持ち上げる。

「カイン…、ナズナの竜操術って本当みたいだな。」

「俺も今は信じるよ。」

俺達はナズナの言葉が本当にリオアンセスを従わせている事に驚きつつ、ドスファンゴを村の方に運んで行くリオアンセスを見送った。

「さてと…。余計な時間がかかったけど、駐屯地に行きましたよっか？」

同じくフレイアを見送ったエレノアさんが驚く俺達の先頭を切って歩き出した。

俺達は無言でそれに従う。

「あつ！ドスファンゴがババコンガを倒しちゃったから勝負はお流れね。」

「ええ！！！少しくらい教えて下さいって！！」

エレノアさんは俺達が驚きで無言になったのをいいことに勝負の話を流そうとした。

俺は、それにカインが過剰に反応するのを見て笑いながら密林の道を歩んだ。

しばらく二人のやり取りは続いていたが密林の出口まで来たところで打ち切られた。

「ここが駐屯地なの…?」

エレノアさんは驚いて言う。

「そうですけど…。俺達がない間に何かあったみたいです。」

カインがゆつくりと口にする。
その顔は驚愕に歪んでいる。

「とにかく…、近くまで行ってみよう…。」

俺も焦りで冷や汗が出てくる。

一日ぶりに見た駐屯地は半壊していたのだ…。

いったい何があったのか確かめるべく、俺達は駐屯地に向かって急いで走って行った…。

《続く》

16話：風翔龍の影（前書き）

このところは毎日の様に更新しています。

16話：風翔龍の影

駐屯地は無惨な姿になってしまっていた。

周辺を囲む壁は崩れ落ち、辺りは穴だらけになっている。

「酷いな…。」

状況を見てカインが言う。

一言だが複雑な感情がにじみ出ている。

どうやら激しい戦いがあった後の様で、半壊した建物にケガ人が集められている。

「話を聞いてみるか。」

俺は辺りにいたハンターに話を聞こうと思い、適当に通りかかった男に近づく。

「忙しそうなところに悪いんだが、少しいいか？」

俺はそう言って男の肩を軽く叩いて振り向かせる。

すると、振り向いた男は俺がよく知る人物だった。

「ラムザ!？」

「アツシュか!？」

ラムザと俺はお互いに顔を見合わせる。

「アツシュ!!どこに行つてたんだよ!？」

ラムザはどうやら俺を探していたところだったらしい。

「ラムザ、いったい何があつたんだ…?」

とりあえず俺はラムザから今の惨状にいたるまでの経緯を聞き出そうとする。

するとラムザは少しの間だけ口を閉ざした後で言った。

「昨日の嵐に紛れて、奴が襲撃してきたんだよ!！」

「奴?これだけのハンターがやられる程のモンスターか!？」

俺は船の時と同じ様に襲撃を受けたことを知って驚く。

「オマエも見ただろ?風と雨を自在に操る奴の姿を!？」

「だから奴って何だよ!!」

興奮するラムザにつられて俺も大きな声をだしてしまう。

「落ち着け、アッシュ。」

すると、そんな俺をカインが制してくる。

「悪いな、ラムザ。訳あって俺達は昨日の夜はここにいなかったんだ。」

そしてカインはラムザに事情を説明する。

ラムザもそれで納得したのか、落ち着いて話の続きを喋る。

「古龍だ…。この大陸には古龍がいたんだ。」

ラムザの表情は暗い。

「古龍!?!」

逆に俺とカインは驚きを隠せない。

「それは間違いなく、風翔龍・クシャルダオラね…。」

一連の会話を聞いていたエレノアさんが会話に入ってくる。

「あ…あれがクシャルダオラなのか!？」

ラムザは初対面のエレノアさんの言葉に動揺する。

ラムザはその存在が古龍だとは分かったものの、それがクシャルダオラであるとは分からなかった様子だ。

名前は知られたクシャルダオラだが、その姿を見て帰って来た者はほとんどいないため、その姿をラムザを含めて俺達は一切知らなかったのだ。

「風と雨を呼ぶ古龍。クシャルダオラに間違いないわ。」

エレノアさんは真剣な面持ちで言う。

「ラムザ…、たしかに見たんだなクシャルダオラを…。」

俺は興味津々でラムザに聞く。

「ああ…。間違いなく奴は風を纏って雨を呼んだ…。」

ラムザは深々と頷いて答える。

「どんな姿だった？」

「オマエに少し前に変な鱗を見せたたる？」

「ああ、あの鋼みたいな。」

俺は今हतぶん村で休んでいるアレムンドさんが持っているであろう、あの黒い鱗を思い出す。

「アレの持ち主だ…。」

「……。」

俺はラムザの一言を聞いて無言になる。

いくら想像力を働かせても鋼の様に硬く、重い鱗を持つ生物を想像することができなかった。

「クシャルダオラに襲われたのは災難以外の何でもないわね。」

エレノアさんが言う。

「…なあ、ところでこの人は誰だ？」

ラムザは話の最中から気にかかっていたのか、エレノアさんのことを聞いてくる。

「この人はエレノアさん。俺達がお世話になる村でハンターをやっているんだ。」

俺はラムザに軽くエレノアさんを紹介する。

「え…、村があるのか!？」

村のことを知らないラムザは俺の言葉の一部に驚く。

「オマエはそこに滞在させてもらうのか？」

ラムザは村のことが気になるのか、続けて聞いてくる。

すると俺が何か言うよりも先にエレノアさんがラムザに単刀直入に聞き返す。

「村に来たいの？」

ラムザは図星を突かれた様で息を呑む。

「いや…、なんと言うか…、エバンスさんも気づいたらいなくなってるしさ…、他に知り合いがいなくてさ。」

「要は寂しいのか？」

俺はラムザの態度があまりにも分かりやすかったのでハッキリと聞いてみる。

「別に寂しくなんかないんだからな！！勘違いするなよ！！ただ仲間がいないのは不安なだけだ。」

ラムザは突然として開き直る。

これは肯定しているのと同じだろう。

エレノアさんもそれが面白かったのか笑みを浮かべて言った。

「なかなか面白いわねアナタ。…いいわ、村に来なさいよ。一人くらいなら私が村長に言っただけから。」

「本当ですか！？」

ラムザは目を輝かせている。

あまりにも分かりやすい態度なので逆に何も言えない。

「ところでラムザ…。他のハンター達はこれからどうする気なんだ？」

話を变えて、カインがラムザに聞く。

たしかにここまで手痛く損害を被ったハンター達の動きは気にかかる。

「…それについてなんだが、どうやら帰りの船がクシャルダオラにやられたらしいんだ。」

ラムザは海岸があるであろう方向を指差す。

「それで帰りの船を皆で作ろってさ…。」

「帰りの船がやられたのか…。まあ、ここには材料も人手もあるしな。時間はかなりかかるが何とかなるだろう。」

カインも海岸の方向を見据えて言った。

「余裕を見て俺達も手伝っていか。」

俺も何とかなるだろうと考え、楽観的に言う。

するとカインはラムザにもう一つだけ尋ねた。

「あと一つ気になったんだが、エバンスさんがいないって言ったのは…？」

ラムザは少し考える格好をして答える。

「それがさ…、この島についた時からずっと居場所が分からないんだ。」

「なんだよ、それ。オマエはエバンスさんの狩り仲間じゃないのか？」

俺はラムザが仲間であるエバンスさんの居場所を把握してないのをおかしく思う。

するとラムザは首を振って答える。

「いや…、あの人とは少し前に軽く話をただけで狩りに行くほどの仲じゃないんだ。」

「えっ？でもオマエの鎧と槍はエバンスさんの力で手にした物じゃないのか？」

俺にはラムザとエバンスさんの仲が理解できない。

「レイアの素材とディアブロスの素材はエバンスさんがくれたんだよ…。」

「くれた…？タダでか？」

「聞かれたことに答えたら、そのお礼につて…。」

「何を聞かれたんだ？」

「黒龍伝説について知っていることを話してくれって…。」

ますます訳の分からない話になってきた…。

そんな事の礼にレイアとディアブロスの素材を渡すなんて信じられない…。

エバンスさんにとって黒龍伝説がそんなに気になることなのだろうか？

考えても分からないので、とりあえず自分の目的である荷物を探すことにした。

「うわ…ッ！！瓦礫に埋もれちゃってるよ…。」

俺は自分の荷物が崩れた瓦礫に埋もれるのを見て頭を抱える。

「よいしょ…っど。」

とりあえず、どけられる限りの瓦礫をどけてみる。

しかし一つ大きな岩があって邪魔をしている。

「一人じゃ無理だな…。カイン、手伝ってくれ。」

俺はカインに助けを求める。

「わかった。『1・2・3』、で押すぞ。」

俺とカインは岩に手をやる。

「『1・2・3!!』」

…俺とカインは懸命に岩を押すが、それでも岩が動く気配はなかった。

「しかたねえな。俺が手伝ってやるよ!!」

すると一部始終を見ていたラムザが加わってくる。

「…ラムザ。助かる!!」

素直に礼を言う。

ラムザに対して礼を言うなんて始めてかもしれない。

「か…勘違いするな!!俺は早く村に行きたいだけだ!!オマエを助けるつもりなんかない!!」

ラムザは照れて向こうを向く。

するとカインが笑って言った。

「やめとけ、ラムザ。オマエに“ツンデレ”は似合わない。」

「「…ツンデレ?」「」

俺とラムザはカインのセリフには似合わない言葉について聞き返してしまう。

「ば…バカな…。この俺がツンデレなんて浮いた言葉を使ってしまうなんて…。」

カインはカインで驚いている様だった。

「オマエ、誰の影響を受けたんだ?」

ラムザが言う。

それを聞いた時、俺はカインの背後に笑うハサンの影が見えた気がした…。

そのハサンの表情は、己の教えが行き届いた事に感動している様に

見えた…。

「奴の真の目的はカインだったのか…。」

俺は始めてハサンに驚愕し、戦慄を覚えた…。

《続く》

16話：風翔龍の影（後書き）

感想まっています

17話：沼地への招待状（前書き）

キャラ紹介

ラムザ

身長

アッシュよりもやや低め

特徴

金髪のオールバック
態度はでかいが怖がりなところもある。
アッシュに対して軽くライバル意識を持っている。

武器

メイン・ランス

サブ・片手剣

好きなもの

樂をすること、釣り

嫌いなもの

孤独、危険なこと

17話：沼地への招待状

あれから俺達はラムザと一緒に村へと帰って来た。

その時にはババコンガやドスファンゴと戦っていたこともあつてすでに夕方だったので、その日はそれ以外何事もなく終了した。

そして次の日を迎える。

あれから考えたのだが無償で村に置いてもらうのは悪いので、俺達は村の仕事、主にモンスターの討伐を手伝おうと考えた。ちなみに俺達というのにはラムザも含まれる。

「ここが村の集会所か…。」

俺達は村に住むハンター達に依頼を斡旋したり、モンスターや環境に関わる情報を管理している集会所にやって来た。

昨日、村に帰って来た時にエレノアさんにこの場所を紹介してもらったのだ。

「どうも！！今日はお世話になります！！」

俺達は集会所の扉を開き、中に入る。

「来たわね。待ってたわよ。」

するとエレノアさんが俺達を迎えてくれた。

「昨日はよく眠れた？」

「ええ、おかげで体調もバッチリです。」

「それなら良かったわ。さっそくだけど集会所の利用の仕方を教えるわね。」

話は軽い社交事例の挨拶を交わした後で本題に入った。

依頼や集会所について少し前にエレノアさんと話をしたのだが、この村の依頼を受ける型式は俺達の大陸でのそれとは違うようだった。

「ほら、あそこに紙が張り出してあるでしょ？」

エレノアさんは集会所の中央にある大きめの木製の掲示板を指差した。

「あれが依頼書ですか？」

カインが尋ねる。

「ええ、村のハンターはあそこから受けたい依頼が書かれた依頼書を持って直接依頼人に会いに行くのよ。」

エレノアさんがカインを見返して答える。

「なんか全体的にレベルが高い気がするぜ…。」

ラムザは依頼書を片っ端から見て困惑する。

「そうなのか？」

俺とカインはラムザの言ったことを確認すべく依頼書を覗く。

「村に住んでる人は資源採集や弱いモンスターの討伐は基本的に自分でなんとかしちゃうから…。」

エレノアさんは軽く笑いながら言う…。

「この村の人って随分とたくましいですね…。」

俺は依頼書を見ながら言う。

「まあ、村のある環境が環境だからな…。」

カインが苦笑いして言う。

「おっ！！これなら問題ないんじゃないか？」

突然、ラムザが声をあげた。

「どんな依頼だ？」

カインがラムザから依頼書を奪い取る。

俺もそれを覗き込む。

「…シヨウグンギザミか。場所は沼地か。」

カインが呟く。

シヨウグンギザミは以前、俺が密林でアレムンドさんと一緒に戦ったダイミョウザザミと同じ甲殻種だ。

青色の甲殻に身を覆われ、ダイミョウザザミと同じく飛龍の頭蓋に身を宿す。

そして最大の特徴はその腕だ。

ダイミョウザザミが巨大なハサミなら、ショウグンギザミは巨大な鎌だ。

体のサイズこそダイミョウザザミよりも小さいが、その鎌のついた腕の攻撃範囲はダイミョウザザミよりも大きく、危険性も高い。

生息地域は沼地や火山の洞窟などだが、ショウグンギザミは発達した脚を持っていて、活動範囲はその洞窟の天井にまで及ぶ。

「少し危ないか？」

カインがラムザに言う。

俺もカインと同意見だ。

ショウグンギザミと戦って無傷ですんだハンターは限りなく0に等しい。

それだけ高い攻撃範囲を持ち、さらに中々の速さを兼ね備えている…。

「そんなこと言っただけで他の依頼書はこんなのだぜ…？」

ラムザは依頼書を並べてみる。

内容は俺達みたいな中堅ハンターからすると敷居が高いものばかりだ。

依頼書のレベルを見るかぎり、この村が過酷な環境が分かる。
エレノアさんの高い実力も、この村の環境によって鍛えられたものだろう。

「これしかないか…。」

残りの依頼書を見たカインは手元のショウグンギザミ討伐の依頼書を見つめた。

「そつだな…。」

俺もこの依頼を受けることに納得し、依頼人を確認する。

「…誰だコレ？」

「ああ、その人は村の鍛冶屋のおばあちゃんね!!」

俺達の依頼書を見ていたエレノアさんが言った。

「鍛冶屋のおばあちゃん？」

「ええ、ずっと前にこの大陸に流れついた人よ。私が知ってるかぎりは初めて外からきた人ね。それから私達、竜人族の鍛冶技術を学んで、今では凄腕の鍛冶屋さんね……。」

聞き返した俺にエレノアさんは補足して言う。

「これから色々とお世話になる人よ。その依頼をやっても損はないと思うわ。」

「なるほどね……。じゃあ、まずはこの人に会いに行くか。」

俺達は依頼書を持って鍛冶屋のおばあちゃんに会いに行くことにした。

「じゃあ、頑張ってね。」

エレノアさんはそんな俺達を見送って言う。

「あれ？エレノアさんは一緒に来てくれないんですか？」

ラムザはエレノアさんの言葉に反応し、足を止めて振り返る。

「ごめんなさいね。私も依頼を受けてたから…」

そう言つてエレノアさんは一枚の依頼書を取り出す。

依頼書にはこう書いてある。

『私は外から来た者なのだが、ここに来る途中の戦いで武器が大きく破損してしまった。

新しい武器を手に入れたいのだが、まだ体が本調子ではない。私の代わりに素材となる物を集めて欲しい。

依頼人・アレムンド』

アレムンドさんの依頼だった。

「それなら仕方ないですね。」

俺はリオアセスとの戦いを思い出した。

アレムンドさんの武器が壊れたのは俺の責任だ。

だから、俺がなんとかしないといけないのだが、俺ではアレムンドさんに見合う武器を調達できそうにない。

「エレノアさん。アレムンドさんに最高の武器を調達してあげてください。」

俺はエレノアさんに託すことにした。

「任せておいて。武器ならちょうど心あたりがあるから。」

エレノアさんはそう言ってガッツポーズを作る。

「じゃあ、よろしく願いします!!」

「あなた達も頑張ってね。」

そして俺達は集会所を後にした。

鍛冶屋は集会所からさほど遠くなかった。
場所は鉄を熱して叩く鍛冶屋独特の音が聞こえたので分かりやすかった。

「すいませーん!! 依頼を受けたハンターなんです!!」

俺は鍛冶屋の方に向かって叫んでみた。

すると返事が返ってきた。

「そこで待つてな!! すぐに行くから!!」

俺は声がした方を見る。

「とりやああああ…ッ!!」

すると、気合の入った掛け声がすると同時に空から何かが降ってきた。

太陽を背にしているため姿はよく見えないが、シルエットからするとどうやら人の様である。

そしてその人はそのまま地面に突っ込んだ。

衝突のスピードは凄まじく、辺りには碎けた地面の破片が飛び散り、土煙に覆われる。

「死んだんじゃねえか…?」

ラムザが恐る恐る言う。

「誰が死んだんだい…?」

地面に激突した時の衝撃で巻き上げられた粉塵の向こうから声がした…。

「化け物か…？」

カインが思わず呟く。

俺達の目の前には一人の老婆がいた。

老婆は地面に激突したというのにピンピンしている。

しかも、空気がピリピリと震えるほどの凄まじい覇気を感じる。

実際の身長は俺の半分くらいだが、圧倒的な存在感によって老婆さんの姿が膨張しているように見える。

たしかにカインが思わず呟いたのも納得がいく。

この婆さん何者だ！？

「あんたら見ない顔だね。噂の外から来たハンターだね。」

「はい、そうです！！今日は依頼を受けて来ました！！」

「なら、まずは実力拝見といこうかね。見事にやってのけたら報酬をはずんでやろうじゃないか。」

お婆さんは笑い声をあげながら言う。

「狙いはショウグンギザミの鎌だよ…。新しい武器の開発に必要で

ね。」

「わかりました！！ショウグンギザミの鎌ですね！！」

とにかく俺はヤル気を見せておいた。

この後もお世話になるようだから良い印象を与えたかった。

「もう一度言つとくけど、沼地は普段あまりハンターが行かないからね…。危なくなったらすぐに逃げなよ。」

「大丈夫ですって！！」

そう言つて俺達は沼地に出発した…。

《続く》

17話：沼地への招待状（後書き）

感想まっています

18話：沼地三番勝負・其的一幕（前書き）

今回は 書き方を 少し変えてみました！！（ 言葉と言葉の間に
スペースを 作っている。 ）

ぜひとも 感想を 聞かせて欲しいです！！

18話：沼地三番勝負・其的一幕

沼地は 密林を 海岸とは逆の方向に 抜けた場所にある。

エレノアさんから 密林の通路の地図（かなり簡略化された物ではあるが）を貰っていたので だいたいの行き方は分かった。

密林を進むと だんだんと 空気が 湿り気を帯びてきて、 地面がぬかるんでくる。

そして 太陽に 雲が かかり始めた時には 沼地へと たどり着くことができた。

「うわ…、 足場が ぐちゃぐちゃで 歩きにくい…」

俺は 沼地の ぬかるんだ地面に 悪戦苦闘していた。

「この湿気た空気も かなり最悪だぜ。 じめじめ して 蒸されてるみたいだぜ…」

ラムザも 俺と同じく 劣悪なコンディションに いらだちを感じている様子だった。

「沼地のコンディションが 悪いのは 来る前から分かっていた

事だろう？
」

カインが 愚痴る俺達を 諭す様に言う。

「 たしかに、 分かってはいたんだがな…。
」

分かってはいた…。

しかし、 着込んでいる鎧や 背負っている武器の重さのせいで
泥の足場に 足がとられる。
さらに 鎧の中に 湿気が溜まるため、 ラムザの言った通り 蒸
されるのだ。

とにかく 予想以上に 過酷な環境だった。

「 洞窟まで行けば 少しは楽になるだろう。
」

カインは そう言って 歩くペースを 少し速めた。

俺達は 無言で それに続いた。
できるだけ 気力を 消耗しなくなかったのだ。

それから 少し歩いた…。

無言での行進が 続いていたが、 突然として それは 終わった。

俺も カインも ラムザも、先ほどから 空中を旋回している存在が こっち を 狙っているのに 気がついたのだ。

青い ゴム質の皮に覆われた 丸っこい体に、 短く、 ひよろつとして 先端が丸い 尻尾。
特徴的な トサカのついた マヌケな顔。

それは 間違いなく 毒怪鳥…

「ゲリヨスカ…。」

カインが ダルそうに 言う。

さつきは 我慢強さを 見せていた カインも、 この状態で 目的外のモンスターを 相手にするのは 嫌なのだろう…。

こんな環境は 誰だって 早く抜けてしまいたい。

そんな カインの心境を 察して 俺は言った。

「…考えてることは 俺も同じだ。 でも、 このまま攻撃を受けるのを待っている わけには いかないだろ…。」

俺が言うと、 カインは ため息をついた。

「…そうだな。 アッシュの 言う通りだ。 しかし、 ゲリヨ

スを 相手にするだけの時間が もつたいないのも 事実だ。」

「じゃあ、 どうする気なんだよ？」

カインの考えに ラムザが 言い返す。

カインは 黙って 考えてから 口を開いた。

「ゲリヨス程度なら 一人でも 問題ないな？」

カインは 意味ありげな質問をしてきた。

「ああ、問題ない。 問題ないが…、 まさか…。」

「その 『まさか』 だ。 一人が 残って ゲリヨスの相手をするんだ。」

カインの言葉に 俺と ラムザは 息を呑んだ。

カインは ときどき だが 大胆な事を 口にする時がある。

「『戦力は 小出しにするな』 って言葉を 聞いたことが あ

るんだけどな…。」

俺は 少しだけ 反対の意見を言うておく。

「アッシュ、それは オマエの嫌いな 軍隊の考えだ。俺達は ハンターだ。 必要があれば 戦力を分散して対応するのが ハンター流のやり方だ。」

カインは 冷静に 言う。

「どうやって その “一人” を 決めるんだよ？」

ラムザが 言う。

どうやら ラムザは カインの 考えに 賛成のようだ。

「これで 決めよう。」

カインは ポーチから 3枚の札を 取り出した。

「…ずいぶん 準備がいいな。 じゃあ、俺は この札で。」

ラムザは カインの手から 札を1枚だけ選んで 取る。

「…なら、俺は こっち。」

どうやら この作戦を 実行するしかない みたいだったので、
俺は しかたなく 札を選んだ。

「 残りの1枚は 俺だな。 」

カインは 残った札を 逆の手に持ちかえる。

とりあえず 俺は 自分の札を 見てみる。

「 何も書いてない。 」

俺は 札を 二人に見せる。

「 俺もだ…。 」

カインが 札を 見せる。

残りは ラムザだ。

「 何だよ…、 これ。 」

ラムザは 啞然とした様子で 札を見せた。

「…ずいぶんと縁起が悪い絵だな。」

ラムザの見せた札には 飛龍に喰われるハンターの絵が 書いてあった。

「この大陸に来る前に 買った物でな…。 ギルド公認店の新商品らしい。 つい 衝動買いしてしまつてな。」

「こんな縁起が悪い物を 買うなよな…。」

と言うか、 カインは この新商品とやらを 使いたいから 今回の提案を したんじゃないのか？

それに ギルドも こんな商品を 承認するなよ…。
今思えば、 奴らは ハンターの不幸を 楽しんでいる感じがしなくもない。

「とにかく、 ゲリヨスは ラムザに 任せた！！」

カインは そう言うと ラムザに手を振って ぬかるんだ地面を蹴って 走り出した。

「まあ、 頑張ってくれ。」

俺も ラムザに 適当なエールを送って 走り出した。

背後から ラムザの文句が 聞こえた気がしたが 無視する…。

この湿地に 残されることを 考えれば、 たしかに あの札は
ハズレだろう。

「しかたねえな…」

とり残された ラムザは 一人 呟いた。

その瞳は 一人になった ラムザを 狙って降りてきた ゲリヨス
を見据えている。

「瞬殺 決めて、 あいつらを驚かせてやるか！！」

ラムザは ブロスホーンを 構えた。

その大盾は ラムザの 半身を覆い隠す。

その槍の先は 泥を巻き上げながら着陸した ゲリヨスに 向いて
いる。

そして、 ラムザは ゲリヨスに向かって 駆け出した。

沼地の足場の悪さも ものとも せず、 ただ 槍をゲリヨスに向
けて走る。

スピード・勢いともに申し分ない、ランス使い 必殺の突進だった。

「ラムザの 奴は 大丈夫だと思うか？」

俺は 前を歩く カインに 聞いてみた。

「大丈夫だろう。 ランスの大盾なら ゲリヨスの閃光攻撃も遮断できる。」

ゲリヨスは、 カインの言った通り、 特徴的なトサカから 強烈な光を発し、 ハンター達の視界を奪うのだ。 防ぐ方法は、 距離をとるか、 盾で防ぐか だ。

「さてと、 ショウグン様はどこに いらっしゃる のかな？」

俺は 薄暗い洞窟を 見渡す。

洞窟は 雨などで 冷やされた 外の空気が 流れこんできているので 寒い。

俺達は 寒さによる 体力低下を防ぐため ホットドリンクを服用している。

しかし、自分の体が 内側から温まるのとは 逆に 俺の背中には悪寒がはしった。

洞窟の天井で 何かが 動いている…。

限りなく 無音に近い音だが、 たしかに 何かがいる。

「カイン…。」

俺は カインの方を 見た。

「1枚選べ…。 相手は どうやら オマエの大好きな お友達 のようだ…。」

カインは 俺に向かって 2枚の札を 差し出していた。

《続く》

18話：沼地三番勝負・其的一幕（後書き）

新しい書き方は どうでしょう？

特に 意見や感想が なければ、 次も これで いきます。

19話：沼地三番勝負・其の二幕（前書き）

書き方を元に戻しました！！

19話：沼地三番勝負・其の二幕

俺は恐る恐るカインの差し出す札を選んだ。

「あんな体験は、もう二度とゴメンなんだよ…。」

1年と少し前の話になる。

俺とカインは雪山にフルフルの討伐に向かった。

しかし、当時まだ知識も薄い駆け出しハンターだった俺はフルフルの生態をイマイチ分かっていなかった。

フルフルは洞窟に生息する白い不気味な飛龍だ。暗い所にいるために目が退化しているが、その代わりに嗅覚が発達している。

翼を持ち、飛ぶことも可能ではあるが、基本的には洞窟の天井に張り付き、やって来た獲物に静かに襲いかかる。

そんなことも知らなかった俺は、突然として天井から襲いかかってきたフルフルに頭から喰われた。

フルフルに腰のあたりまで丸飲みにされた俺は、なんとかカインに助けられた。

しかし、フルフルのグロテスクな外見も影響し、その時の事はトラウマになってしまっている…。

俺のハンターとして味わった初めての恐怖体験だ。

「…気持ちは分からなくても、どうやら当たりを引いたみたいだな。」

カインが何も書かれていない自分の札を見せて言う。

「ああ…。」

俺は意気消沈し、自分の札を見せた。

ラムザの時と同じ絵の書かれた札を…。

「まあ、忌まわしい過去を払拭するチャンスだろ。頑張ってくれよ…。ショウグンギザミは俺がなんとかしてみようから。」

カインはそう言って俺を置いてその場を後にしようとする。

「…すぐに応援に行く。」

「…期待している。」

俺はカインと軽いやり取りを交わしてカインを見送った。

俺はカインが奥に向かったのを確認し、視線を上へ向けた。

暗闇に包まれた天井に張り付いている白いシルエツト。

見えるハズのない目をコチラに向け、鼻を効かせているフルフルの姿がある。

その穴の様に大きく開いた口からネバネバとした強烈な酸の様なヨダレを垂らし、人よりも巨大な体で天井に張り付くその姿は見る者に生理的な嫌悪感を与える…。

洞窟の薄気味悪い雰囲気と相まって、まるで悪魔の創造物の様だった。

「戦うしかないか…。」

俺は今回装備してきたレッドサーベルを抜く。

軽く振ると、その赤い刀身に炎が踊る。

その炎の光が一瞬、辺りを包む暗闇を切り裂く様にも見えた。

フルフルは天井をペタペタと這いずる様にして、俺へと近づいてくる。

余計な物音は…ない…。

「…先手はくれてやる。」

俺はゆっくりと接近してくるフルフルを見上げる。
攻撃が届かないので、相手の出方を伺うしかない。

しかし、それだけでも精神力がジリジリと削られていく。

「さあ、掛かって来いよ。」

俺の頬を先ほどから濡らしている汗が、今ゆっくり流れ落ちた。

その汗が地面に落ちると同時だった。

俺とフルフルの相対距離が俺とフルフルのいる天井の高さと変わらなくなった。

「…!!」

俺は一気に駆け出す。

フルフルは大きく体を広げ、天井から俺に飛び降りてくる。

しかし、フルフルの落下速度を俺の足が上回り、飛び降りてきたフルフルは地面に叩きつけられるだけに終わる。

「今度は俺の番だ!!」

俺はすぐに体を反転させ、地面に寝そべる様に体制を崩しているフルフルに突っ込んだ。

「はぁ…ッ!!」

そして、手にしたレッドサーベルを振るった。

レッドサーベルは高熱を出してフルフルの白いブヨブヨした皮を焼き斬る。

さらに、今度はそのまま斬り上げる。

そしてフルフルに火傷の様な十字傷を与えた。

だが、フルフルは苦手な炎属性の攻撃とはいえ、片手剣の浅い斬撃では全く怯まない。

俺の攻撃など一切無視し、その尻尾が動いた。

「ぐわあ…ッ!」

フルフルを深追いし過ぎた俺は尻尾に弾き飛ばされる。

しかし、俺はすぐに体制を立て直し、再びフルフルに攻撃を仕掛ける。

…が、突然フルフルが青白い光に包まれた…。

「俺としたことが…、ぬかつたぜ…。こんな初歩的なミスをやっちゃまうなんて…」

苦しそうな声をだしているのはラムザだ…。

ラムザはゲリヨスとの戦いを有利に進めていた。

ゲリヨス得意の閃光も大盾で遮断し、その他の攻撃もほぼ全て防いだ。

そして相手の攻撃の隙について槍を突き出す。

ランスの真髄とも言える防御力の高さを活かした戦いだった。

そして、ついにゲリヨスは倒された…。

ラムザは己の戦いぶりに酔い、完全に油断してゲリヨスに近づいて行った。

普通のハンターなら知っている有名なゲリヨスの生態がある。

『死んだふり』

そのままの意味だが、ゲリヨスは己が傷つき、不利を悟ると動きを止めて倒れ、ハンターに己が死んだと思わせる。

そして油断して近づいて来たハンターに襲いかかる、という変わった特技をもつ。

ハンターがゲリヨスを相手にするなら警戒すべきことなのだが、ラムザは完全に油断しきっていた。

そして、ラムザはゲリヨスの攻撃に襲われた。

運良く、当たれば鍛えたハンターでも危ういその攻撃は、ラムザ本人には当たらなかった。

しかし、ラムザの持つ大盾に当たり、大盾はそのまま端の方に弾き飛ばされてしまった。

大盾を失ったラムザはゲリヨスの反撃に晒され、大盾を回収する隙さえなかった。

そして今に至る。

ラムザは疲弊し、すでに肩で息をしている。
ダメージも蓄積して、マズイ状況だった。

「最悪だ…。」

ラムザは己の油断を嘆いた。

唯一の希望があるなら、それは相手も自分と同じく満身創痍であるということだ。

相手も自分も、おそらくは次の一撃で決まる。

「基本的に勝算のない戦いはやらないんだけど…。あいにく、この戦いには十分なほど勝算がある。」

ラムザは両手でブロスホーンを構える。

ゲリヨスはトサカから不思議な音を出している。
これはゲリヨスがトサカから閃光を発する時の予備動作だ。

ラムザはゲリヨスに向かって突っ込んだ。
盾がない分だけ速さがある。

しかし、それでもゲリヨスの動きの方が速い。

ゲリヨスのトサカからまぶしい光が放たれる。

それは目を塞いでも、後ろを向いても、その一瞬は何が起こったか分からなくなるだろう。

「喰らいやがれ…ッ!!」

そうなる前に、ラムザは突進の勢いをそのまま力に加え、ブロスホーンをゲリヨスに向けて全力で投じた…。

投げられたブロスホーンは勢いを増して、ゲリヨスに吸い込まれる様に飛んでいく。

そして、目に見える世界が一瞬だけ真っ白な世界に変わった。

「く…ッ!! まぶしくて何も見えねえ!!」

ラムザの視界が麻痺する。

が、しだいに辺りの様子がハッキリとしてくる。

「…ゲリヨスの奴はどうなったんだ？」

ラムザはゲリヨスがいた方向を見る。

「な…ッ…！」

ラムザは目を見開き、啞然とする。

ラムザのすぐ目の前にはゲリヨスがいる。

そして、ゲリヨスの口が開き、ラムザに迫ってくる…。

「うわああああ…ッ…！」

悲鳴をあげるラムザ。

だが、ゲリヨスはそのままだラムザを押し潰すように倒れた。

その体にはブロスホーンが深々と突き刺さっている。

「くそ…ッ…！　驚かせやがって…！！」

ラムザは泥だらけになりながらゲリヨスの下から這い出る。

言いながらも、その顔は安堵の表情だった。

「アツシュ達は大丈夫かな？」

そう言つてラムザはブロスホーンを引き抜き、盾を回収した。

そして、ラムザは回復薬を服用しながらゲリヨスを見下す。

「後で剥ぎ取りにくるからな。覚悟しとけよ!!」

ラムザはゲリヨスに蹴りを一発放つて、アツシュ達を追つて洞窟の中へと入って行った…。

「まさか…、出会い頭に脚をやられるとはな…。」

カインは右脚から血を流し、洞窟の壁を背にしていた。

カインのいるエリアは恐ろしく静かだ。
カインの吐息しか音はない。

そんな静寂なる闇の中で、カインはひたすら神経を研ぎ澄ませていた。

相對するは見えざる敵…。

カインは確実にこちらを狙ってくる敵の動きを待っていた。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

轟音が洞窟に響き渡る。

地面が震える音だ…。

「…！！」

カインは目を見開き、一瞬の動きに全集中力をつぎ込む。

痛みで麻痺した右脚は今は動かない…。

残った左脚だけで跳ぶ。

次の瞬間…。

大地が砕け、粉塵の中から巨大な鎌が出現した…。

鎌は二つ…。

触れた物全てを切り裂く一撃がカインがいた場所に深い亀裂を残す…。

そして、鎌は再び地面の中へと戻る…。

「…これでは手の出しようがないな…。」

カインは再び地面の中に消えた敵に悪態をつく。

カインはこのエリアに入った瞬間にこの攻撃にやられたのだ。

「アッシュ、ラムザ…、できるだけ急いでくれよ…。」

カインはボソツと呟くと、再び神経を集中し始めた。

流れでる血は止まらず、そう長くは戦えないだろう…。

しかし、その間も地中を走る轟音はカインを狙い続けている…。

《続く》

19話：沼地三番勝負・其の二幕（後書き）

感想、意見を待っています!!

20話：沼地三番勝負・其の三幕（前書き）

今回は少し戦闘が強引な気がします…。

最近思ったのですが、自分の作品は味方の受けるダメージの深刻さが他の人の作品よりも酷いものがある気がします…。

少し抑えるべきか…。

感想、意見をお待ちしています!!（最近、ずっと前書きでこれを書いてる気がします（笑））

20話：沼地三番勝負・其の三幕

「この…ゲテモノが…。」

俺は未だに痺れの残る体で立ち上がり、フルフルを忌々しげに見つめた。

フルフルというモンスターは体内に発電器官を持っていて、それにより電撃を口から吐くことや、自分を中心に放電することもできる。

特に放電は攻防一体の厄介な行動パターンだ。

迂濶に飛び込むと、今の俺の様に酷い目に逢う。

「と…とにかく、体の動きが戻らないと、機動力が命の片手剣使いにはキツイな…。」

俺はフルフルが無意味に放電を繰り返している間に体が回復することを祈った。

が…、フルフルは発達した鼻を効かせ、俺の居る位置を正確に掴んだのか、すぐに次なる攻撃を仕掛けてきた。

まず、フルフルは尻尾の先端を吸盤の様に變形させ地面に吸い付か

せる…。

そして、地面から発電に必要なエネルギーを一気に吸い上げ、発電器官において必殺の電撃を生み出す。

そんな複雑な工程をフルフルは最低限の時間でやり遂げ、電撃の矛先をアッシュに向ける。

「ま…マズイ…!!」

俺はフルフルの口に溢れる青い閃光を見て、己が最大のピンチに立たされたことを痛感した。

逃げようにも、痺れが抜けない脚が言うことを聞いてくれない。

だが、俺の思いとは裏腹にフルフルは溜めた電力を、一気に解放した…。

吐き出された電撃は三方向に拡散しながら地面を滑るように飛んでくる…。

「く…ッ…!!」

俺は叫び声をあげ、懸命に動こうとした。

ピク…ッ。

左脚がわずかに反応を返した。

青い光はもう目の前まで迫ってきている…。

「とにかく、避ける…！」

俺は全ての力を左脚の踏み込みに賭けた…。

横に跳ぶ…。

それは無理だ。

距離が近すぎる。

「うあああ…ッ…！」

俺は力の限り上に跳んだ…。

飛び越えるしかない…。

迫りくる巨大な青い光のほとんどは、圧倒的な電力が放っている熱と光にすぎない…。

実際の攻撃範囲はもっと小さいハズだ…。

感電だけ避ければ問題はない。

個人的には熱いのは苦手だが、俺の着ているレイアの鎧は電撃に対する耐性は悪いが、熱には強いのだ。

俺は自分の直感を信じて電撃を片足でまたぐ様に跳ぶ。

俺の脚の半分が青い光の中を通過する。

その瞬間に、高熱と強力な静電気が脚を駆け巡った。

「…熱…ッ!!」

体験した事もない熱さと痛みが俺を襲う。

まるで神経を直接焼かれているようだ…。

しかし、そんな痛みに耐えて、俺は電撃を飛び越えることに成功した。

なんとか命は繋いだが、脚は火傷により大変なことになってしまっている。

覚悟はしていたが、とんでもない賭けだった。

「あのまま黒焦げになるよりはマシだったかな…。」

俺は大きく息を吐いて、レッドサーベルを構え直す。

戦いは続いているのだ。

フルフルは未だに健在で、俺を狙っている。

「とは言っ たものの脚がこの状態じゃあな…。」

反応を取り戻したが、ダメージの多い左脚。
右脚なんて感覚がなくなっちゃっている。

「それでも動ける限りは問題ないな…。」

俺は歩く様な速さでゆっくりとフルフルに近づく。

フルフルは一連の動きの中で俺の居場所が分からなくなったのか、再び鼻を効かせて俺の位置を探っている。

「その隙を見逃すわけにはいかなねえな…！」

俺は左脚だけで踏み込み、フルフルとの距離を詰める。

フルフルは俺の匂いが目の前からしたことに驚いたのか、動きを鈍らせた。

「はぁぁあーッ…！」

俺は渾身の力でレッドサーベルを振るう。

このチャンスで倒せなければ、もう後が続かないだろう。

そうならば逃げることを考えるしかない…。

フルフルの見せたラストチャンスに俺は我を失ったかのようにレッドサーベルを振り回した。

無数の斬撃と同時にフルフルの体の数カ所で小爆発が起きる。

フルフルは尻尾を一回転させて俺を排除しようとするが、すでにフルフルの腹の下に潜り込んだ俺には当たらない。

その間も俺はフルフルに攻撃し続ける。

フルフルは攻撃を受けながらも最終手段である放電で再び俺を蹴散らそうと尻尾を吸盤状に変形させた。

「それを待っていた!!」

俺はフルフルの咄嗟の行動に反応して動く。

フルフルの変形した尻尾、その先端に開いたエネルギー吸収用の穴にレッドサーベルを突き刺したのだ…。

そして発電器官に直結する、その穴からレッドサーベルに宿る灼熱の炎を流し込んだ…。

「さあ、燃え上がれ!!」

炎はフルフルの尻尾の内部を遡り、フルフルの体内を発電器官ごと焼き尽くす…。

ギヤアアアアア!!

絶命間際、金切り声にも似たフルフルの怒りと苦しみの混じった鳴き声が響き渡る。

「く…ッ!!」

耳を貫き、脳にまで達するとも思えるほどに凄まじく、鋭く尖った音に俺は堪らず顔をしかめる。

そして、目の前でフルフルの身が焼け落ちる。

自分でやっておきながらも、目を覆いたくなった。

そして、フルフルが倒れ、匂いと煙が辺りに充満した。

それはゴムを燃やした時の嫌な匂い、やたらと目に染みる煙。

それを間近で浴びた俺はフラフラしながらも意識はハッキリとしていた。

「…かなりの荒業を使ったが、なんとか勝てたみたいだな…。」

俺は言った瞬間に一気に力が抜けて、その場に座り込んだ。

が、すぐにカインやラムザのことが頭をよぎった。

「あいつら大丈夫か…?」

俺は痛めた脚を気遣いながら、ゆっくりと立ち上がる。

「回復薬は…と。」

俺は回復薬を使用して、とりあえず両足が動くようになったことを確認する。

その時、洞窟の入り口の方から誰かが走って来た。

考えずとも分かる、ラムザだ。

「アッシュ!? カインはどうしたんだよ!？」

息を切らしながら走って来たラムザは俺を見て驚く。

「…どうやら無事みたいだな。けっこうダメージを受けたみたいだが…。」

俺は真新しい傷が見受けられるラムザを見て言う。

俺と同じく回復薬を使用したのか、半分以上の傷が塞がってはいるが、受けているダメージは中々のものだと言える。

「カインなら俺があそこで倒れてるゲテモノを相手にする間に、先に奥に向かったぜ。」

俺は向こうの方で倒れているフルフルを指差す。

「…フルフルか。オマエもかなりやられたみたいだな。」

ラムザはフルフルから立ち上る煙が気になるのか、顔を覆いながら言った。

「俺はやっぱりフルフルが大嫌いだと再確認したよ…。」

俺は受けた傷がまだ痛むのを感じとりながら呟いた。

「…そうだ！！そんなことよりもカインの奴の応援に行かねえとマズイぜ！！相手はシヨウゲンギザミだろ！？」

ラムザが叫ぶ。

「たしかにな…。ショウグンギザミはカイン一人に任せておけない相手だからな。」

俺は自らの役目を終えたところで安心して忘れていたが、すぐさま応援に駆けつけるべき状況であることを思い出した。

「なら、急がないとな…。」

俺はカインが向かった洞窟の奥へと続く道を見て言った。

場面は再び洞窟の奥地…。

ガキイイイーン!!

闇の中で鋼と鋼がぶつかる様な音が響き渡る。

カインは神楽の刃を傾け、ショウグンギザミが振り降ろす鎌をつま

く受け流していた。

しかし、太刀というのは繊細な造りゆえに防御には全く向いていない。

下手をすれば刃が折れてしまうからだ。

ならば、何故カインはそんなことをするのか？

それは真っ赤に染まった彼の右脚と、酷使により痙攣を起こしかけている左脚を見れば分かる。

もう、ほとんど脚が動かないのだ。

だからカインは太刀で攻撃を受けるという危険極まりない行動にでるしかなかった。

それは相手の得物が自分の得物が接触する刹那の瞬間の動き。失敗すれば神楽ごと自分も真つ二つだろう…。

そんな状況で、この一瞬の業。
もはや神業の域だろう。

これはカインの裏打ちされた技術と極限までの集中力が可能にした奇跡…。

カインが纏うのは、燃える様な紅い気ではなく、研ぎ澄まされた、氷の様に冷たい気だ。

「く…ッ!」

しかし、再び相手の攻撃を受けた時、カインは苦しみの声をもらし、手に持つ神楽の刃が僅かに欠ける。

精神を削る、極限下での動きにカインは確実に限界に近づいていった…。

《続く》

20話：沼地三番勝負・其の三幕（後書き）

沼地三番勝負も次で終わりを迎えます。

今回はちよつとした冒険、もとい試みでした。

一対一が三つも続くのは視点の切り替えなどが難しい。
それに戦闘で決定的な一撃を生み出すアイデアに困る。

ともかく、頑張りますので応援お願いします！！

21話：沼地三番勝負・其の四幕（前書き）

ずいぶん更新が遅れてしまいました。

待っていてくれた人（いるのだろうか？）スイマセンでした。

なにぶん忙しかったので…。

しかし、残念なことにしばらくは更新が遅れてしまいます。

首を長くしてお待ち下さい。

できる限り急ぎますので…。

では沼地三番勝負の完結をご覧ください。

21話：沼地三番勝負・其の四幕

「ブウンッ」

シヨウグンギザミの大鎌が空を切った。

カインは身を屈めて、…いや、体を支える脚が限界をむかえ、崩れ落ちる様にしゃがみこんだ結果としてシヨウグンギザミの攻撃はカインの頭のあつた場所を空振りした…。

そして、シヨウグンギザミは粘る敵を一気に仕留めようと全力の力で鎌を振るつたため、その空振りによりシヨウグンギザミはバランスを崩して転倒、大きな隙を見せる。

「く…くそっ！！」

しかし、攻撃に転じようとするカインも動くことができずにチャンスを活かせなかった。

だが、シヨウグンギザミが倒れた体を何とか立て直そうともがいている間に、カインもまた神楽を地面に突き立て、それを支えにして立ち上がる。

そして、回復薬グレード（回復薬の効能を強力にしたもの）を取り出して服用する。

超がつく程に強い即効性によって、すぐに傷が癒え、麻痺していた脚がある程度は元の通り動くようになった。

しかし、それと同時にカインは強い横殴りの衝撃で吹き飛ばされた。

「くう…っ!!」

言うまでもなく体制を立て直したシヨウグンギザミの攻撃。

だが、回復薬グレードの回復量はこの攻撃をのダメージを上回るだけのものがあつた。

これも計算の内だったのだ。

その証拠にカインは先ほどまでまともに動かなかつた足で地面を踏みしめ、軽業師の様にクルッと受け身をとつた。

「さあ、反撃開始といかせてもらおうか…。こちらの仲間もやって来たことだしな…。」

カインは笑みをうかべ、シヨウグンギザミを見て、そして近づいて来た足音を聞いて言った。

「アッシュ!!あそこで誰かが戦ってるみたいだぜ!!」

ラムザが通路の向こうから聞こえる激しい物音を聞き、前方を走る俺に言う。

「…カイン!!」

俺は通路を走り抜け、開けたエリアに飛び出した。

「助けに来たぜ!!」

俺はレッドサーベルを抜き、そこにカイン、そしてショウゲンギザミが向かい合う様に立っているのを視認すると、応援の到来をカインに向かって叫んだ。

「…遅いぞ、アッシュ!! ついでにラムザ!!」

カインは軽く笑う。

その顔には軽く安堵の表情が混ざっている。
予想通り相当苦戦していた様だった。

「『ついでに…』っていうのはずいぶん酷いぜ。俺だって頑張ってゲリヨスを倒してここまで追いついて来たんだからな…。」

ラムザが愚痴を言う。

しかし、その手は槍を握り、すでに臨戦体制だ。

「さあて、覚悟してもらうぜ、シヨウゲンギザミ!!」

俺は突然の敵の増援に困惑しているのか、動きを止めて様子を伺っているシヨウゲンギザミに先駆けた。

「抜け駆けすんな!!俺も行かせてもらうぜ!!」

ラムザも俺の後に続く。

動きを阻害する槍と盾はまだ抜いてはいない。

ギリギリのところで抜き放つつもりだろう。

俺は背後にラムザがいることを計算してシヨウゲンギザミの脚の横を抜けながら斬りつける。

「うらああっ!!」

レッドサーベルは比較的柔らかいシヨウゲンギザミの脚の関節部分を斬り、炎を噴出する。

が…、シヨウゲンギザミはダメージを受けたことで我に返り、脚の横を通り抜けようとしていたアッシュを狙い、鎌をすくい上げる様にして振るった。

「ぐわああ…ッ!!」

俺は予想以上にシヨウゲンギザミの動きが速かったこともあり、そ

の攻撃を避けきれずに弾き飛ばされた。

「ぬおお…ッ!!」

ラムザが驚愕の声を出す。

ドカアアッ!!

吹っ飛んで来た俺が後方から突っ込んで来ていたラムザに激突して、二人で纏れ合う様に倒れたのだった。

「おまえら何のために駆けつけたんだよ…。」

カインが俺達の醜態ぶりに溜め息を吐いて言う。

「…アツシュがぶっ飛んで来たんだよ!!」

ラムザが俺の下敷きになりながら反論の声を漏らした。

「…予想以上に強いぜ、このショウグンさんは…。」

あっけなくやられた俺が言うと言い訳がましいが、確かにこのショウグンギザミは普通の奴よりも一段と強い気がする。

「…言い訳はいいから、とにかくドケよ、オラッ!!」

ラムザが重いと言わんばかりに俺を押し退ける。

シヨウグンギザミが俺達を狙って迫って来ているのだ。

「下がってろ、アツシュ!!」

ラムザが槍と盾を構える。

「こんな奴はこの俺が突き崩してやるよ!!」

ラムザはシヨウグンギザミの攻撃に備えて盾に身を隠す。

シヨウグンギザミはラムザに向かって容赦なく鎌を振る。

盾と鎌…。

ハンターの世界ではダイミヨウザザミとシヨウグンギザミの存在から、対になる物という認識がある。

その二つがぶつかった…。

「ぐへええ…ッ!!」

しかし、結果は惨敗…。

シヨウグンギザミの獲物を巻き込む様な軌道の攻撃にラムザは対応できずにぶっ飛ばされた。

「…普通に強かったよ。」

「…言っただろ。」

俺は倒れたラムザを見下げる。

シヨウグンギザミは自分が勝者だと言わんばかりに二対の鎌を天に突き出す様に掲げている。

「しっかりしろよ…。」

カインは頭を抱えていた。

「安心しろ、カイン。俺には秘策がある。」

俺はそんなカインに言い放つ。

「何だよ、『秘策』って？」

ラムザが起き上がりながら言う。

「まずはラムザ…、オマエが突っ込む。」

「ああ、任せろ。突進は俺の十八番だからな。」

「…そして俺達は…。」

「俺達は…？」

「逃げる…！」

「「オイ…ッ…！」」

「もちろん冗談だ。」

「…とにかくついて来てくれ…！」

俺は再びこちらを目指して動き出したシヨウグンギザミに背を向けて走り出した。

その方向には俺達がやって来た通路がある。

「マジで逃げんのか…？」

「いいからついて来てくれ…！」

俺達は迫り来るシヨウグンギザミから全力で走って逃げる。

だが、シヨウグンギザミの動きは速く、すぐに追いつかれた。

…そして鎌が振り上げられ、俺達を両断しようとする振るわれる…。

と、同時に俺達は通路に滑り込んだ…。

ガアアーン…ッ！！

岩が砕けた音が響いた…。

狭い通路は俺達能通过るには十分な幅があったが、シヨウグンギザミの巨体が通るのは許さなかったのだ。

シヨウグンギザミは俺達を追うことに夢中になるばかりに、壁に激しく身をぶつけ、体を挟まれることとなった。

「やったぜ、予想通り！！」

「やるな、アツシュ！！」

「これは大チャンスだぜ！！」

シヨウグンギザミは身を退こうともがくが、体が通路に挟まって動けない。

「くらいやがれ…ッ!!」

俺はレッドサーベルを、

カインは神楽を、

ラムザはブロスホーンを、

それぞれ畏にハマったシヨウグンギザミの胴体めがけて一斉に突き出した…。

グシャグシャグシャアッ!!

俺達の武器を突き立てられたシヨウグンギザミは青黒い血液を大量に撒き散らしながらも身を震わせ、強引に通路から体を引き抜こうとする。

が、シヨウグンギザミは体を引き抜くことには成功したが、壁に突き刺さった鎌が抜けない。

「…カイン、今だ!!」

「ああ…ッ!!」

カインは神楽に気を込め、そして突き刺さった鎌、シヨウグンギザミの腕を狙って一気に振り抜いた…。

その一閃はシヨウグンギザミの腕の関節を確実に捉えて切断した。

シヨウグンギザミは片方の鎌を失ったことでバランスを崩し大きく
退けぞり、転倒。

それでも何とか体を起こして抵抗を試みようとしているが、受けた
ダメージは致死量で、それも叶わずに遂に力尽きた…。

「…終わったか。」

「ああ…。」

「今回はいつになく疲れたぜ。」

俺達はシヨウグンギザミが力尽きたのを確認すると、未だに壁に突
き刺さっている先ほど切断に成功したシヨウグンギザミの鎌を引っ
張り出した。

「頼まれた物はこれでいいな。」

「依頼完了だ!!」

俺とカインはハイタッチを交わした。

「でも、帰りはその鎌に加えて更に、シヨウグンギザミ本体にフル
フル、ゲリヨスの素材を持ってあの湿地帯を帰らないといけないん

だろ？」

ラムザがボソツと呟いた。

「安心しろ、ラムザ。それに関しては問題ない。」

「…どういうことだ？」

「まあ、見てろ。」

そう言つて、俺は息を吸い込み、そして力いっぱい叫んだ。

「うわっ、ヤベエ、最大のピンチだ！！誰か助けくれええーッ！！」

洞窟中に俺の声が響き渡る。

「はあ、オマエ何を言ってるんだ？」

ラムザは意味不明だと言った感じでキョトンとしている。

だが、しだいにドタドタと足音が近づいて来た。

そして…

「…安心しな！…このハサン様がやって来たからには問題は全て解決だぜ！！どんな奴も俺のハンマー捌きの前には無力さ！！」

…ハサン登場。

「と、言うことで、ハサン。後は頼んだぞ。」

そう言つて、俺とカインは巨大なショウゲンギザミの鎌をハサンめかけて投げた。

「グハアッ！！お…重いぞ。と言うか、て…敵はどこだよ？」

ハサンは一人で持つには重いショウゲンギザミの鎌を頑張つて持ち上げる。

「敵…？そんな奴はいない。荷物が多すぎて困っていたら丁度良いところでオマエが来たんだ。」

「は…計つたな、アツシュ！！」

「ハッハッハ、君の存在自体がいけないのだよ！！」

「ク…ッ、わ…我が人生に栄光あれーッ！！」

ベチャ…ッ

それだけ言ってハサンは鎌を支え切れなくなって潰された。

「まあ、せいぜい頑張ってくれたまえ。俺達は先に帰るから。」

「これでいいのかよ…?」

「別にいいんだよ。」

と言うわけで、俺達は依頼を見事に果たし、モンスター三匹の素材を手に入れ帰路についた…。

《続く》

21話：沼地三番勝負・其の四幕（後書き）

沼地三番勝負の終結です。

私の作品は戦闘が長いのが特徴的だと自分で思っているのですが、今回は特に長かった…。

感想待っています！！

22話：斬破刀・焰の道（前書き）

久しぶりの高速連続更新です。

できればこつい速度で更新したいです。

まあ、今回は表現、表記に工夫したところがあったりします。

意見や感想、アドバイスを待っています！！

22話：斬破刀・焰の道

沼地から帰って来た俺達は村で休養中…。
予想以上に沼地での依頼はハードだった。

とにかくシヨウグンギザミの鎌を鍛冶屋のおばあさんに渡した俺達はその礼として、この村にいる間は武器や防具の面倒を見てもらえる事になった。

俺はさっそく損傷の激しかったレイアシリーズの装備を破棄して、新しく狩ったばかりのシヨウグンギザミの素材で防具を造ってもらうことにしたのだ。

それが今日完成予定なので鍛冶屋まで引き取りに来て、現在鍛冶屋の前まで来ている。

「…あれ、カイン？」

俺はそこにカインがいるのを発見した。

「アッシュか…。鎧の完成予定は今日だったな。」

カインは自らの愛刀である神楽を手に持っている。

「どうした、カイン？新しく武器でも造ってもらうのか？」

「いや…。シヨウゲンギザミと戦ってから神楽の切れ味が悪くてな…。ちよつと見てもらおうと思ったんだ。」

カインは神楽を抜いて軽く素振りをした。

すると突然、鍛冶屋の扉が開いて、中から大男が出てきた…。

「おや…。アツシュにカインじゃないか…。」

「カアレムンドさん…!!」

大男だと思っていたのはアレムンドさんだった。

「あれ…。それって…。新しい武器ですか？」

カインはアレムンドさんの背中に見慣れぬ武器が背負われているのを発見して言う。

「ああ、君達も私がエレノアさんに依頼をした事は知ってるって聞いたんだが、これがその代物だよ。まさか、これほどの武器を用意してくれるとは思っていなかったんだがね…。」

アレムンドさんは新しい大剣を抜いて掲げてみせる。

翡翠色に煌めくその剣には所々に最新の技術や、高度な技術が盛り込まれているのが分かる…。

「蒼剣ガノトトスだ…。」

「かなりの物ですね…。」

蒼剣ガノトトスは水の刃で相手を斬り裂く、強力な大剣だ。

「ところで君達はどうしたんだい？」

「俺は新しい鎧を引き取りに来たんです。」

「俺は武器の事で…。」

俺とカインはそれぞれ答え、そもその目的を思い出す。

「なるほど…、なかなか良い素材が集まった様だね。」

「ええ、やっぱりこの島に来て良かったですよ。」

たしかに、この島に来てから大分戦ってきたし、ハンターとしての実力も鍛えられたと思う。

「…その新しい鎧とやらを私にも見せてもらっても良いかい？」

「もちろん構いませんよ。」

俺達はそれぞれの用件を済ませるべく鍛冶屋の中へと入った。

「うわっ…。スゲーッ!!」

鍛冶屋の中には無数の素材、武器や防具が並んでおり、中には相当の業物もあった…。

鍛冶屋独特の鉄の匂いがして、空気が熱を含んでいる。

「おっ、アンタかい!! 鎧はちゃんと仕上がっているよ!!」

辺りの様子に見呆けていると、声がして、ギジギシという木製の階段を降りる音を響かせておばあさんが上の階から降りて来た。

「ほらっ…、コイツだよ!!」

おばあさんは部屋の片隅に置かれた布を被った物体を指差す。

俺は無言でそれに近づくと、その布を取り去った…。

「おおーッ!!」

驚きの声しかなかった。

シヨウグンギザミの堅い甲殻は見事に加工され、造り上げられた鎧は流線型のフレームに加え、所々に付けられた鎌を模した装飾。

そして、シヨウグンギザミの甲殻の色である青色は磨かれた様に光を反射して輝き、息を呑む程に格好良くて、最高に美しい仕上がり具合だった。

「…さすが…、良い腕だ…。」

アレムンドさん思わず見とれている。

「どうだい。気に入ったかい？」

「もちろん…!!」

俺はおばあさんの技術力の高さに感服させられた。

「そりゃあ良かった。…ところでアンタはどうしたんだい？」

おばあさんは俺が満足したのを見て深くうなずくと、続いてカインを見て言った。

「…コイツを見て欲しいんですけど…。」

カインはそう言っておばあさんに神楽を手渡す。

「…こりゃあ…、無理だ。」

おばあさんは受け取った神楽を鞘から抜いて刃を見ると、すぐさま言い放った。

「…そう…ですか…。」

カインは分かっていたのか驚くそぶりも見せない。

しかし、愛刀である神楽が使えないという宣告はカインを落ち込ませるには十分だった。

「残念ながら、今のままじゃ無理だね…。この刀はアンタの腕について行けなくなったのさ。」

おばあさんは静かに言う。

「刀が俺の腕に…?」

カインも不思議そうに言う。

「そうさ…。この刀は更なる進化を求めているんだよ…。」

おばあさんはそう言って、何やら探しだした。

「たしか、アンタ達はこのあいだフルフルの電気袋を持って帰ってきたね…？」

「あつ…、はい。」

「他の足りない素材は、この間の礼もまだ不十分だし私が立て替えよう。だから、この刀を私に預けな…、打ち直してやるよ。」

「えっ…！？」

カインは驚きの声を出す。

「この刀は雷の力を得て蘇るよ。『斬破刀』としてね。」

「…斬破刀。」

「ただし、一つ問題がある。足りない素材があるんだよ。」

「えっ…、何ですか！？」

俺達は息を呑む。

どんな希少な素材を必要とするのだろうか…？

「鉄鉱石が全然足りないね。」

「て…鉄鉱石ですか？」

「そう…、鉄鉱石。意外だと思ukai？鉄鉱石は色々な武器、防具に使うからね。補充が全く追いつかないのが現状さ。」

おばあさんの言った鉄鉱石なんて言うのはどこにでもある鉄の原料だ。

まあ、たしかに色々な所で使われているから補充が追いつかないのも納得がいく。

「鉄鉱石くらいなら俺が取って来ますよ。」

俺はおばあさんに申し出る。

が、おばあさんは首を降って言った。

「一個や二個っていう数じゃないんだよ。ただでさえ鉄鉱石の数を使う太刀だ、それに斬破刀の製造には並外れた数の鉄を使う。」

「い…いくつくらいですか？」

「そうだね…。刀の強度自体が大分落ち込んでるから、それを直すことを計算すると40から50は欲しいね…。」

「うわ…っ!!」

俺は想像以上の数に呆気にとられてしまう。

「これだけの数はその辺では集まらないよ…。鉱物資源の豊富な火山地帯まで出張の必要があるね。」

おばあさんは、「それでもやるのか?」と言いたげに言った。

「…暑いのは嫌いなんだけどな、行くしかねえか!!」

俺は少し戸惑ったが即決した。

「おいっ…、アッシュ!!」

カインが声をかけてくる。

「心配するなよ、カイン!!日頃から世話になっている礼だ。」

俺は胸に手をやり、任せろとサインを出す。

「…分かった。なら、頼む。」

そして、それを見たカインもうなづいて言った。

これで次の目的は決した。

『火山で鉱物資源の搾取』

難易度 (推定)

目的：鉄鉱石50個の納品。

斬破刀の素材となる大量の鉄鉱石を求めて灼熱の地へ…。

「だが、50なんて数、一人じゃ無理だろ。」

カインが言う。

「それに関してなんだが…。」

ここで会話の流れを聞いていたアレムンドさんが口を挟んだ。

「今回、蒼剣ガノトトスの初陣も兼ねてエレノアさんと一緒に火山までバサルモスの討伐に行こうと思っていてね…。どうだろう、一緒に行けば何とかなるんじゃないかい？」

マジで良いタイミングだった。

「断る理由なんてありませんよ。もちろん、その提案にのらせていただきます！！バサルモス退治を手伝う代わりに、鉄鉱石収集に協力してください！！」

「分かった、私からエレノアさんに言うておこう。」

目的変更

『鉄鉱石収集とバサルモス討伐』
難易度 （推定）

目的：鉄鉱石50個納品
バサルモス討伐

アレムンドさんとエレノアさんと協力してバサルモスを討伐し、代わりに鉄鉱石収集を手伝ってもらおう。

「出発は明日の朝で良いかな？ 集合場所は村の門で。」

「あつ、はい。分かりました。」

アレムンドさんはエレノアさんにこの事を伝えるためか、鍛冶屋を後にした。

「…アッシュ。」

「うん？」

カインがアレムンドさんを見送った俺に声をかけた。

「すまないな、借りができた。」

「いいて、気にするな。」

「俺の予想だが、たぶん火山は沼地以上に何が起こるか分からない所だ…。気をつけるよ。」

「ああ…。」

そして…

次の日の朝へと時間は進む。

《続く》

22話：斬破刀・焰の道（後書き）

どうでしたか？

次は火山編です。

今回のこだわりは

- ・ ショウゲンギザミの鎧の表現

- ・ 目的の明確な表記に加えて難易度の表記など

意見や感想、アドバイスを待っています！！

23話：灼熱のハンティング

俺は火山という過酷な環境の中へ身を投じるということで、昨日の内から念入りに準備をして村の門へと向かった。

もちろん俺は新しく造ってもらったショウグンギザミの素材を使用した鎧を着込み、意気揚々と朝霧に包まれた村の中を歩いて行った。背中にはヴァイパーバイトと呼ばれる刃に麻痺毒が仕込まれた片手用の剣。

この島に来てからは初めて使うことになるだろうか。

そして俺は朝の早い内からすでに開かれていた村の門の前でアレムンドさんとエレノアさんの姿を見つけた。

今回、目的地である火山に向かうパーティーだ。

いちおうラムザにも火山に行く旨を伝えたが、「いや…、俺は一旦様子を見に駐屯地に戻るよ。」と言って参加しなかった。

ということで火山には三人で挑むこととなる。

「すみません、お待たせしました!!」

「いや、私達も今来たところだよ。準備の方は大丈夫かい？」

と、アレムンドさん。

背中には例の新武器、蒼剣ガノトトスが背負われている。

「ええ、バッチリですよ。」

「それなら早く行きましょうか。けっこうな量の鉄鉱石がいるんでしょう?」

と、エレノアさん。

武器は火属性に強いモンスターが多く生息する火山に行くということもあって、前回使っていたプロビネンスボウからワイルドボウという貫通力に優れた弓、その強化発展系であるワイルドボウ?と変更されていた。

おそらく前回一緒に戦ったババコンガの素材を使って造ったのだろう…。

「あつ、はい。今日はお世話になります!!」

俺はペコッと頭を下げる。

「気を遣わなくても構わないよ。私達もバサルモス討伐を手伝ってもらったからね。」

「そついうことだから、早く行きましょう。」

アレムンドさんとエレノアさんに言われ、俺は頭を上げた。

「そうですね…、じゃあ出発しましょう！ー！」

そうして、俺達はやや速い足どりで火山へと出発した…。

灼熱の地、火山。

辺りから吹き出るマグマの熱が来訪者達の体力を容赦なく奪っていく。

「…ヤバい、死ぬかも…。」

俺は呟いた。

覚悟していた以上に火山の暑さはキツかった。

いちおう、クーラードリンクという暑さを緩和してくれる有難いアイテムを服用しているが、それでも暑いものは暑い。

「まだ火山に着いて数分だぞ。しつかりしろ。」

アレムンドさんがグロッキー状態の俺に肩を貸しながら言う。

「すみません。俺、寒い地方の生まれなもので…。」

「…今回はずいぶんと頼り無いわね。親友のためにも頑張りなさい。」

「…そうですね。すみませんアレムンドさん、エレノアさん。」

エレノアさんに言われて俺はアレムンドさんの肩を貸りるのをやめて気を入れ直した。

「じゃあ、先にバサルモスの奴を討伐しちゃいましょう。」

「うん、その方が良さそうね。鉄鉱石の採取はその後でゆっくりとやろう。」

まずは岩竜バサルモスを仕留める算段を立てる。

「バサルモスはその奥にはいないでしょうね…。ただ、岩に擬態してるから少々探す手間がかかるわね…。」

エレノアさんが言う。

「なら三手に別れて探しましょうか？見つけたら合図を…、この打

ち上げ式閃光爆弾で。」

俺はアレムンドさんとエレノアさんに小型のタル爆弾を手渡した。着火すると上空まで打ち上がって強烈な光を出しながら爆発する。まあ、花火みたいな物だ。

「珍しい物を持っているね。」

アレムンドさんはそれを手に取って見つめた。

「この大陸に来る前に買ったんですよ。ギルドが作った新商品らしいです。」

「ふーん…。なら合図についてはコレを使いましょう。じゃあ、私はこつちを探すから、あなた達は別の場所をよろしくね。」

そう言ってエレノアさんは向こうの方に走って行く。

「ふむ…、じゃあ私はこつちを探そうか。」

アレムンドさんは真逆の方向へ向かう。

「なら俺は真ん中の道を行いますか…。」

俺はバサルモスを探して真ん中の道を進んだ。

「とは言ったものの、ゴツゴツした岩がずいぶん多いな……。これじゃあ見分けるのは難しいな。」

バサルモスは普段は背中だけ地上に出した状態で地中に潜っている。それがまたパツと見ただけでは岩と区別がつかないのだ。

「くそ……。ただでさえこの暑さでイライラしてるのに、見つからないっていうのは腹が立つてくるぜ……。」

俺は再び辺りを見回す。

そこには

岩……岩……岩、岩だらけ。

「……こうなりやヤケだ……！」

俺は落ちていた石ころを数個拾い上げると、手当たりしだいに放り投げた……。

カッン、カッン、カッン!!

石ころがその辺の岩に当たって転がる。

グラグラ…ゴゴゴゴッ!!

すると、岩の一つが動き…

ドオオオオオンッ!!

轟音と共に、岩竜バサルモスがその姿を現した…。

「おおっ、ビンゴ!! よしっ、早速合図を送って…、あれ?」

俺は合図を送ろうと思い、打ち上げ式閃光爆弾を取り出したところで、不思議な光景を目にした。

目の前にいる一体のバサルモス。

そして…

グラグラ…ゴゴゴッ…！

また別の岩が揺れている。

グラグラ…ゴゴゴッ…！

そのまた向こうでも…。

「はあ？ま…まさか…。」

冷や汗が流れた…。

「どう？そっちにはいた？」

エレノアがアレムンドと合流し、声をかけた。

「いや…、いなかった。どうやら群れで行動して…、あつ！？」

アレムンドが突然何かに気づいて、しまったと言わんばかりの表情になる。

「どうさたの？」

エレノアがそれを気にする。

「いや…、アッシュに今回のバサルモスが“複数討伐”である事を言うのを忘れていたんだよ。」

「…あの子…、大丈夫かしら？」

パアアーンッ！！

その時、上空に閃光が走った。

パアアーンッ！！

パアアーンッ！！

パアアーンッ！！

更に続けざまに三発も…。

「…相当パニックになっているみたいね。」

それを見たエレノアが冷や汗を浮かべて言う。

「やっぱり群れで行動していたみたいだな…。急ごう！！」

そう言っ、アレムンドは足早に駆け出した。

「私達が行くまで死ぬんじゃないわよ！！」

エレノアもそれに続いて走り出した。

「ギャアアアアーツ！！」

俺は悲鳴をあげた…。

ここには三体ものバサルモスが潜んでいたのだ。

それも、バサルモスは俺を敵と認識したらしく、先ほどから猛攻を仕掛けてくる。

「…こうなれば、俺一人でもやってやる！！」

俺は開き直って、一番近かったバサルモスに向かって突っ込んだ。

バサルモスの腹の下に潜り込んだ俺はヴァイパーバイトを振り回す。

全身岩石でできた甲殻に覆われたバサルモスだが、器用さが売りの片手剣はその隙を縫うようにしてバサルモスにダメージを与える。

さらに斬りつける度に、俺の剣、ヴァイパーバイトの麻痺毒が蓄積していく。

腹の下を斬られたバサルモスは己の鎧とも言える岩の甲殻を通り抜けてくるダメージに混乱して暴れ狂うが、そんなデタラメな動きにヤラレはしない。

しかし、ここには他に二匹のバサルモスがいる…。

二匹のバサルモスは仲間が攻撃を受けたことに激昂して、外敵である俺を排除しようと大地を揺るがしながら近づいて来た。

「くそ…っ、やっぱりマズイか!？」

俺はけっきょく逃げの一手しか選択肢のないことに憤慨して腹を立てた。

が、しかし、二匹のバサルモスは俺を攻撃しようとしたが、俺が残り一匹のバサルモスの腹の下に隠れる様にいるせいで手を出せないでいる…。

「……!!これは……いける!!」

それを見た俺は勝機を見出した。

一匹倒せれば、後二匹くらいなら問題はない……。

俺はなおもヴァイパーバイトを振り回した。

俺が狙ったバサルモスはその麻痺毒が蓄積したことで、遂にその巨体の動きを止める……。

「きた……っ、この新兵器を使うチャンスが……。」

俺はそう言っ、その新兵器を取り出した……。

《続く》

24話：岩の城塞（前書き）

少しは更新速度が戻ったでしょうか？

最近、モンスターハンター小説を書かれている先生方が増えてきたので若干嬉しい気がします。

モンスターハンターを知っている人からメッセージや感想をいただけると思います。

24話：岩の城塞

「これが新兵器、打ち込み式タル爆弾！！」

俺は対バサルモス用に持ち込んだ新兵器を取り出した。

それは小型タル爆弾と同等のサイズだが、通常の物とは違って、鋭利で巨大な楔の形状をしているのだ。

おおかた予想できるだろうが、これは堅い甲殻を持つ敵に対して開発された物だ。

見た目の通り堅い甲殻の隙間に打ち込むことでその爆発の威力を内側に伝導して、内部から堅い甲殻を粉碎する。

ひいきにしていたギルド御用達の商人から特別に入手した物なので、余り数はない。

「お前みたいな奴のためにある物なんだぜ！！その自慢の岩の鎧を砕いてやるよ！！」

俺はヴァイパーバイトの麻痺毒で動きを止めているバサルモスの胸部にその巨大な楔を叩きつけた。

ガキイイインッ！！

岩の鎧に、尖った鋭角が強引に割って入る。

「うらあっ！！！」

それを更に力を込めて強引に押し込む。

顔にバサルモスの鎧を構成していたマカライト鉱石の欠片が当たってうつつとしいが、それ以上の強度を誇るドラグライト鉱石製の楔は十分な深さまで届いた。

「よしっ…、退避!!」

俺はタル爆弾に着火すると足早にバサルモスの腹の下から逃げ出した。

その動きを見た残り二匹のバサルモスが俺を押し潰そうと重さと堅さだけが取り柄の愚鈍な巨体で迫って来るが、そんなものに捕まる俺ではない…。

ガアアアアアア!!

と同時に、楔を打ち込んだバサルモスが麻痺から解き放たれ激昂する。

「ようやく動き始めたか…、愚鈍にも程があるぜ。」

バサルモスは怒り狂い、身を大きく震わせるが打ち込んだ楔が揺るぐことはない。

そして…

「吹き飛びやがれ…ウスノ口。」

ドオグウオオオオンッ！！

破壊力が押し留められた様な鈍い爆発音が響いた…。

不発を思わせる音だが、それは爆発の威力が岩の鎧の内側へと潜り込んだ証だ。

「しゃあっ！！やったぜ！！」

俺は自慢の鎧の隙間から黒煙を噴き上げながら豪沈するバサルモスの巨体を見て握り拳を突き上げた。

楔を打ち込んだ胸部に至っては岩の甲殻は跡形も無く吹き飛び、柔らかな身が焼け焦げており、その眼の光はすでに失われている…。

バサルモスはそのまま地に倒れ、行動を停止した。

「スゲーー威力だな…。頑丈が取り柄のバサルモスも味わったことない内側からの衝撃には耐えられなかったか…。」

俺は凄まじい威力を目にして感動に近い感情を抱いた。

だが…、

ズウウウンッ！！

ズウウウンッ！！

ズウウウンッ！！

仲間がやられたのを気にも留めずに二匹のバサルモスが地を踏み鳴らしながら凄まじい勢いで突進して来る。

「…ッ！！」

加速のついた重量級の巨体はまるで、大陸の新技术である機関車を連想させた…。

その経験し難い威圧感が二つも。

俺は息を呑むよりも早く、頭の中が真っ白になった…。

「ぐがああ…ッ！！」

そして、次に見たのは逆転した世界だった…。

バサルモスの勢いは俺をまるで風が木の葉を吹き飛ばすかの様に軽々と宙へと舞わした。

ドシャアアア…ッ！！

頭がグルグルする…。

俺は地面に叩きつけられた。

「く…っ、ヤベエ…な…。」

一瞬で先ほどまで有利だった状況が一変した。

己の油断が招いた事態とはいえ、複数のモンスターを相手にするのは本来、常に流れる水のように戦局が移ろい易いのだ。

「せつかくの新品の鎧がへこんじまったぜ…。」

俺はふらつきながらも立ち上がってみせる…。

正面から突進をくらったのか、鎧の前部分がへこんでいる。

「でも…、あんなのくらって、これだけで済んだのはショウゲンギザミの甲殻と、ばあさんの腕に感謝だな…。」

俺は体中に走る痛みを気力で抑え込み、ヴァイパーバイトを構えた。いつの間にか二匹のバサルモスは俺を挟みこむ位置へと移動している。

「なんとか…するしかねえな。」

俺はバサルモスをグルツと見回す様に睨みつけた。

が、先ほどまで有利な状況に浸っていた俺の頭は激変した状況について行けず状況を打開する手段が見い出せなかった…。

ガアアアアアアッ！！

しかし、その間もバサルモスは威嚇の鳴き声を出しながら、グルグルと俺の周りを回りながら包囲を縮めてくる。

シュタアアーンッ！！

その時、暗雲立ち込める狩場を一筋の矢が引き裂いた…。

「な…何か…飛んできた？」

俺の耳に届いた風切り音…。

それが聞こえると同時に一本の矢がバサルモスの片目を貫いていたのだ…。

バサルモスは片目を失い、荒れ狂う。

俺は矢の軌道を目で追った。

「待たせたわね…、アッシュ。」

「エレノアさん!!」

目で追った先には岩場の上にワイルドボウ?を構えたエレノアさんの姿があった。

ガキイーンッ!!

すると、今度は背後で鋭い切断音が聞こえる。

俺は慌てて振り返った。

「…やはり、良い武器だな。」

「アレムンドさんも!!」

アレムンドさんは隻眼となったバサルモスに向かって蒼剣ガノトトスを振るい、その岩石が繋がってできた様な尻尾を意図も簡単に斬り落としていた…。

「無事だったかい…?」

「まあ、それなりに…。」

俺は真新しい、へこんだ鎧が目に入り、少々自分の失態の痕跡に涙ぐましくなった。

「村へ戻ったら直してもらえさ…。今はこいつらを倒してしまうことにしよう。」

アレムンドさんは軽く俺を気遣いいつも目の前の敵に集中力を注いだ。

「じゃあ、私は援護に徹するから、アツシユ、あなたは元気な方のバサルモスの注意を引き付けておいてね。」

「…了解。」

エレノアさんに言われ、俺は再び臨戦体制に入る。

そこから先の戦いはあつという間だった…。

二匹を同時に相手にするより、まず俺が一匹を引き付け、その間にエレノアさんの援護を受けたアレムンドさんが弱った方を早々と仕留める。

その作戦通り、アレムンドさんの振るう蒼剣ガノトトスは岩をも切断する水の刃でたちまちバサルモスを倒す。

集中した俺は引き受けたバサルモスの攻撃を避けつつ、ヴァイパー

バイトで何度も斬りつけ、そこにエレノアさんの放つ麻痺毒を仕込んだ矢が加わったことで、バサルモスはたちまち麻痺毒の餌食となった。

そして、片方のバサルモスを仕留めたアレムンドさんも今度はこっちの攻撃に加わり、麻痺したバサルモスに総攻撃を仕掛けて見事に討伐に成功した…。

「ひとつめの仕事はこれで終わりだな。」

アレムンドさんが倒れた三匹のバサルモスを見渡して言う。

「正直、もう少し来るのが遅かったら俺、ヤバかったですよ。」

俺も堅い岩竜を斬り続けて切れ味の落ちたヴァイパーバイトを研ぎ石で研ぎながら言う。

「結果オーライよ。無事だったんだし良いんじゃない？」

エレノアさんはかなり楽観的だった。

「さてと…、お次は鉄鉱石だな。」

アレムンドさんは持参したピッケルを取り出し、採掘できそうなポイントを探して歩き始めた。

「じゃあ、お手伝いお願い致します。」

俺も一礼してアレムンドさんに続く。

「あまり力仕事は好きじゃないんだけど、たまには良いかしらね。」

エレノアさんもそう言って、ゆっくりと後についてくる。その足どりはもう仕事を終えたかの様に軽いものだった。

俺も正直、後は鉄鉱石だけで、今回の山場は越えたものだと思っていたのだ。

…しかし、この時はまだ、火山地帯を網目の様に流れるマグマが何かに共振する様に震えているのに誰も気がついてはいなかった…。

《続く》

25話：逆巻く炎

ガキインッ！！
ガキインッ！！

と、ピッケルで岩肌を削り取る力強い音が響く。

崩れた岩の断層からはただの石ころを含めて、様々な鉱石が転がり出てくる。

「うおっ！！！すげえ、鉱石の大放出だ！！！」

俺は掘れば掘るほどに、底無しかと思われる程に出てくる鉱石に思わず歓喜の声を漏らした。

俺達の大陸では鉱物資源豊富な火山でも、すでになりの数の人の手が入ってしまったので、ここまでゴロゴロと鉱石が発掘できる事はないだろう。

あらためてこちら側の大陸が、エレノアさん達、村の人間を除けば、全く人が関与していないことを思い知らされた。

「ふむ……、これだけ出るようなら、すぐにこの仕事も終えられそうだな。」

アレムンドさんも、火山地帯での肉体労働に流れ出る汗を拭いながらピッケルを振るう。

「えーっと……、これはマカライト鉱石……、これが鉄鉱石で、これは……ただの石ころね。」

エレノアさんは黙々と俺達が掘り出した石の山から鉱石を識別している。

「……これで一応は予定の鉄鉱石の数は掘り出せたわよ。」

エレノアさんが50個目の鉄鉱石を同じ鉄鉱石ばかりが入った革袋に放り込む。

「考えていたよりも早く終わりましたね。」

俺は自分の経験から考えると、もう少し時間が必要だと思っていたのだが、案外アツサリと終わってしまった。

「しかし、用は済んでしまったし……。時間が余ったからと言って、これ以上鉱石を掘り続けても仕方あるまい。」

アテムンドさんはそう言って断層に突き刺っているピッケルを引き抜く。

「まあ、俺もこんな暑い場所からはさっさとおさらばしたいですね。」

俺は汗が滝の様に流れ出てくる暑さにはいい加減に参っていたところなので、帰るという意見には賛成だった。

だいたい、その流れ出た汗ですら地面を濡らした矢先に蒸発していくような暑さだ。

これ以上の肉体労働は多少……、いや、かなり辛いものがある。

「そうね……、私も賛成。とつとと帰りましょう。」

そう言つて、エレノアさんも散らばった鉱石を集めて帰り仕度を済ませる。

「よお……つとー!」

俺は意見が一致したのを見て、アレムンドさんと同じ様にピッケルを断層から引き抜く。

ガチャアアン……

すると、断層の中から何か小さな塊が、ピッケルに引きずり出される様にして転がり落ちてきた。

「何だ……これ？」

俺は出てきた小さな塊を繁々と見つめる。

「表面が錆び付いていて何も分からねえな……。帰ってからゆっくり調べるか……。」

俺はじつくりと観察してみたが、それが剣の様な物であるとしからなかった……。

しかし、ひよとすると掘り出し物かも知れない、と思い、これを持ち帰ろうと荷物に加えた。

「ほら……っ、アツシュ。置いて帰るわよ!!」

「えっ……、あっ!? すいません、今行きます!!」

突然のエレノアさんの急かす言葉に、俺が慌てて顔をそちらの方に向けると、すでにエレノアさんとアレムンドさんは断層地帯の入り口の辺りまで帰って行ってしまっている。

俺は謎の小さな塊の事は忘れて、二人に追いつくために駆け足で急いだ。

「あら……っ、困ったわね。」

エレノアさんが珍しく困惑の言葉を口にした。

「道……、塞がっていますね。」

無理もない……。

俺もそれを目撃して困惑した。

ここに来るときに来た道が塞がってしまっているのだから……。

「知らない間にマグマの流れが変わってしまったみたいだな……。」

そっ……、アレムンドさんの言った通りだ。

俺達が作業に打ち込んでいた間にマグマの流れが変わり、俺達の来た方に流れ込んで、道を塞いでしまったのだった。

「……どうします?」

俺が一番この辺りの地形に詳しいであろう、エレノアさんに打開策を聞いてみる。

エレノアさんは少し考え、そして結論を述べた。

「廻り道するしかないわね。たしか、遠回りになるけど、そんな道があつたはずよ。」

エレノアさんもあまり使うことがない道なのか、微妙に自信なさげだ。

「とにかく、その道に向かうしかないさそうだな。」

アレムンドさんも目の前を横切るマグマの川を前にしては、それしかないだろう、とハッキリ言い切るしかない。

「分かったわ、案内する。でも、村のハンターは誰も使おうとしない道よ……。」

エレノアさんは何かが不安なのか、あまり気が進まない様子だ。

「何かあるんですか？」

そうなったら俺は聞かずにはいられない。

「誰かが確かめたわけじゃないんだけどね……。」

エレノアさんは、確証がない、と断りを入れてから話した。

「その道にはね……、古龍の飛来地だって言われているの。」

「え……っ?」

俺は超危険なワードに啞然とし、そして……

「えええーッ!? こ…古龍ですか!?!」

思わず叫んだ。

膨大な熱気を発する赤いマグマがエリア一帯をドロドロと流動している。

その異常な熱量の中心に鎮座する王がいた……。

見る者を圧する程に美しく悠然としたたてがみに、莊嚴で威嚴に満ちた二本角。

天を背負うかの様に広げた翼はまさしく王たる身に見合った権勢の証。

そして……、その燃え盛る紅蓮の炎の様に紅い瞳は怒りに満ちていた……。

自らの領域に近づく者達がいる……。

先ほどから自らの支配する熱を通じて感じていた気配が進路を変えて確実に近づいて来ている。

領域を侵す者には容赦はできない……。

王は翼を雄大に広げ、火の粉を撒き散らしながら力強く飛翔した。

王の名はテオⅡテスカトル。

古来より紅蓮の覇者として恐れ、崇められてきた古龍種。

今、アッシュ達に過去最大級の試練が訪れようとしていた……。

《続く》

25話：逆巻く炎（後書き）

いよいよ古龍の登場です。

古龍の描写は難しい気がしますが頑張りたいと思います。

これからも応援お願いします!!

26話：炎獄に響く砲哮（前書き）

今回のサブタイトルは秘密基地の方で募集したものです!!

かつこいいサブタイトルを提供してくださった紅ノ風さんに感謝です。

話の方は古龍との戦いへ…。

感想、意見、指摘などを待っています!!

26話：炎獄に響く砲哮

飛来した悪夢……。

とでも言っておこうか……。

それは火山灰が降り注ぐ、灰色に曇った空を突き破って現れた。

俺の目にはその紅いオーラを纏う主が煉獄の化身の様に思えた。

炎王龍・テオⅡテスカトル。

天候、自然現象を自由自在に操るとされる古龍の中においても、郡を抜いた存在とされる化け物。

彼が司るのは全てを燃やし尽くす炎。

最初に炎王龍の飛来に気がついたのはエレノアさんだった。

エレノアさんは僅かだが、急に温度が上昇したのをその並外れた感覚で感じとり足を止めた。

それに気づいた俺とアレムンドさんも同じく足を止めて、辺りを見渡す。

マグマが振動していた……。

無生物であるマグマが自らの主人の到来に歓喜していたのだ。

「――！！」

その時だった。

アレムンドさんが声にならぬ声を上げ、震える手で上空を指差したのは……。

俺には破滅を告げる紅い光が降って来た様に見えた。

正直、俺は視認するまでもなく、それが何であるか本能で悟っていたのかもしれない……。

なぜなら、その存在を前に、俺の脚は恐怖に震え、頭の中は真っ白になってしまっていたのだから……。

それでも正気に戻ったのは、エレノアさんが俺が感じているのと同じ威圧感を必死に振り払い、震える手で弓を引き、襲撃者に向け限界まで溜めた矢を放ったからだった。

戦うしかない……。

ハンターの血が、立ち向かうことを決意した仲間を見て、俺を奮い

起たせた。

しかし、紅い光は急降下しながらも身を捻る様に変形して超速度の矢を避けた……。

そして降下するにつれてその大きさを増し、全体像がしだいにハッキリする。

「炎王……龍……、テオ……テスカトル……。」

ここで初めて、エレノアさんが口にしたことで、俺はその存在の正体を知った。

「——避ける——！」

アレムンドさんの警告が聞こえるが、それよりも速く、俺は飛び退いていた。

ガアアアアアーンッ！！

急降下してきた炎王龍はそのままの勢いで大地を砕く。

その破壊力と衝撃は辺りのマグマを刺激し、活性化させるには十分

だった。

瞬く間に辺りの温度が急激に上昇し盛り上がったマグマが小爆発を起こし始める。

これぞまさしく、灼熱地獄だ。

「どうしたものか……。」

アレムンドさんがジリジリと後退しながら舞い降りた炎王龍を見据える。

「どうしたも、こうしたも、戦うしかないでしょう……。」

俺はヴァイパーバイトに天を伸ばす。

「やるしか……ないみたいね……。」

エレノアさんもワイルドボウ？に矢をつがえる。

少しでも威力を、と、その矢には強撃ビンがセットされている。

「よしっ……、いくぞ……！！」

俺達の覚悟を見たアレムンドさんも背中に背負った蒼剣ガノトトス

に天をやった。

炎王龍の姿は火の粉が舞い散る灼熱地獄の熱で揺らいで見えた。

そして、炎王龍は一度だけ目を細めて俺達の姿を見た後で、前肢を高く持ち上げ……

——ッ！！

火の粉を撒き散らしながら咆哮した……。

それだけで、辺りで爆発が巻き起こり、炎王龍自身の叫びをかき消す程の爆音が響き渡った。

その凄まじい熱風が俺達に容赦なく襲いかかる。

「ぐああああっ！！」

俺は堪らず悲鳴を上げた。

「ぐう……っ！！」

「きゃああっ！！」

アレムンドさんもエレノアさんも同じく怯む。

今のでさらに温度が上昇した。

すでに、ここにいるだけでクラクラする。

そして、今のだけでもハッキリと分かる力量の差……。

戦う前から氣力を失い、挫けてしまいそうだ。

「……覚悟は決まった…、行くぞっ!!」

それでも、俺は圧倒的な存在に向けて駆け出した。

勝てずとも、必ず生き延びてみせると……。

「一人で行かせはしないっ!!」

アレムンドさんも俺の後ろに続く。

「……って、どこに攻撃すりゃあ良いんだよ!!」

俺は四肢で地にドツシリと地に根を張る炎王龍のどこに斬りかかっても通用しない気がした。

「くうっ……そおおッ!!」

俺は開き直って、とにかく足を止めずに斬り抜けることだけを考えた。

俺は一気にトップスピードに入って、炎王龍との距離を瞬く間に縮める。

が、しかし……

ゴオオオオオ……ッ!!

炎王龍の周囲にはさらなる熱風が吹き荒れていた……。

「ぐうっ!! 何だよ、火の中に飛び込んだって言うのかよ!!」

とにかく、直接ダメージになる様な、そんな熱さだった。

しかし、駆け抜けるしかない。

「はああああッ!!」

俺は力一杯ヴァイパーバイトを振り抜いた。

ザクシュッ……

ヴァイパーバイトの切っ先が炎王龍の右前足を切り裂く。

だが、炎王龍はそれを全く意に閑せず、尖った爪の付いた左前足を持ち上げ、邪魔だと言わんばかりに振り払った。

その動きは直前まで静止していたとは思えないほどに俊敏なものだった。

「うおお……っ!？」

俺はギリギリ、それに反応することができ、身を捻って攻撃を避ける。

ガキインツ!!

だが、俺の着ていたショウグンギザミの鎧に鋭利な爪先が擦り、鈍い金属音の様な音がして、接触部分には深い傷跡が残る。

そして、炎王龍自身が発する強力な熱によつて、その傷跡から発火現象が起こった……。

「な……何だと!？」

俺はあまりにも危険な炎王龍の一撃に驚愕する。

炎には強いシウグンギザミの鎧だけあって、火は燃え広がることなくすぐに鎮火したが、普通にくれば裂傷と同時に焼かれるという味わいようもないダメージを負うこととなるだろう。

「ちくしょう……ッ!」

俺は舌打ちして炎王龍の脇を駆け抜けた。

その時、計ったわけではないが、炎王龍の気が僅か一瞬だが、完全に俺に向く。

「うおおおお……ッ!」

その隙について、アレムンドさんが雄叫びをあげながら突っ込んで来る。

そして、両手でしっかりと握り締められた蒼剣ガノトスが力任せに振り下ろされた。

蒼剣ガノトスは水の刃を形成し、炎王龍に襲いかかる。

狙いは炎王龍の右角……。

アレムンドは以前読んだ古い文献の中で、古龍はその角に森羅万象を操る力を持つ、といった記述を覚えていたのだ。

それが正しいかどうかは分からないが、とにかく狙うならそこしか

ないと判断した。

ゴオオオオオッ!!

水の刃が熱風を切り裂いて炎王龍に迫る……。

が……、

「なに……ッ!？」

アレムンドの視界から炎王龍の姿が消えた……。

当たると思った攻撃……。

炎王龍の反射と速度はその予想を上回った。

「上ですっ!!」

俺は炎王龍の姿を見失なったアレムンドさんに警告を促す。

「上だと……!？」

アレムンドさんは俺の声に反応し、天を仰ぐ。

炎王龍はその巨大な翼を羽ばたかせて浮遊している。

その翼から発生する熱風は地上にいる俺達に強烈に吹きつけられる。

「落ちなさい!!」

我慢ならないと、エレノアさんが強撃ビンをセットした矢を炎王龍めがけて放つ。

が、矢は炎王龍が巻き起こす熱風を前にその勢いを失い、炎王龍に届くことはなかった。

それを見た時だった……。

「な……何だ？」

俺は異変に気づいた。

空気中に浮く炎の粉塵が増えている。

それにこの異臭は……

ガス……!?

「——危な……！！」

危ないと言おうとしたが、その言葉を言い切る前に大氣中を満たす爆弾にスイッチが入った。

カチィッ……！！

炎王龍が、その鋭い歯を擦り合わせる様に打ちつけたのだ。

火打ち石の様な炎王龍の歯からは火花が発生し、それがガスへと引火した……。

「——！？」

次に俺の目に写ったのは辺り一面で起こる爆発、襲いかかる灼熱波という、赤い世界だった……。

《続く》

27話：燃える風、荒ぶる大地（前書き）

V S テオ II テスカトル。

やたら無性に長いです。

灼熱の火山編はまだ実は半分過ぎたところです。

寒い季節に暑い戦いを描くのって変な気がします。

27話：燃える風、荒ぶる大地

何が起こった……？

俺は仰向けに倒れた状態から体を起こそうとする。

（痛ッ……！！）

すると体全体に痛みが走る。

よく見ると体中、火傷だらけで裂傷や打ち傷まである。

（……そうか。俺は炎王龍の起こした爆発で……。）

ほんの少し記憶が曖昧だが、しだいに霞に覆われた記憶がハッキリしてきた……。

（……！！ 戦いはどうなったんだよ！？）

それと同時に様々な思考が次々と頭をよぎり、俺は飛び起きる。

どうやら岩影に寝かされていたみたいだ……。

俺は身をのり出して様子を伺おうとする。

すると……

ガシッ！！

と、誰かが俺の肩を掴んで俺を引き戻した。

俺は驚いて、その手の主を見る。

「あ…アレムンドさ……うぐうつ！！」

俺は言い切る前に、俺を引き戻した人物・アレムンドさんの大きな手で口を覆われ、言葉を封じられた。

「シーツ、静かに……。」

アレムンドさんは片方の手で俺の口を塞ぎながら、もう一方の手で人差し指を一本立てて自分の口の前に持って行き、音をたてるな、と合図する。

「ゆっくりだ……。ゆっくり、その岩影から向こう側を覗いてみるんだ……。」

アレムンドさんは小声で言い、俺の口を塞ぐ手をどけた。

「……。」

俺は無言で、言われた通りゆっくりと岩の向こうを覗き込む。

「……!」

そこには立ち込める煙と、未だに燦る炎。

そして、奴の姿もあった……。

奴……、炎王龍・テオ「テスカトルはギョロギョロと鋭い目を左右に動かし俺達を探していた。

（まだ居やがるのか……。）

俺は獲物を見失ったなら帰ってくれ、と思いつつ炎王龍の姿を目を焼き付ける。

伝説級の古龍が目の前にいることが未だに信じられない……。

むしろ感動的でした。

まあ、それが今、俺達の命を刈り取るのに全身全霊を傾けているのは最悪だが……。

そんな事を考えていると、炎王龍を挟んだ反対の岩壁の上から誰か

が手を振っているのを発見した。

(……うん?)

俺は目を凝らす。

(……エレノアさん?)

そこにはエレノアさんの姿が、それも、こちらに向かって何か合図らしきものを送っている。

俺はその合図を必死に読み取った。

(……こっちに来い? ……退路が……ある? 逃げ道があるのか!?)

俺はここで自分達の隠れている場所が壁ばかりの袋小路であることに気がついた。

道は二つ……、俺達がやって来た道と、エレノアさんが見つけたと言う脱出口。

しかし、どの道に行くにしろ、中央に君臨する炎王龍を振り切らなければならぬ……。

(腹をくくるしかないか……。)

俺は覚悟を決める。

何も炎王龍を倒せ、とは言っていないのだ。

ただ振り切る……、それだけだ。

俺はそう自分に言い聞かせて、一旦体を岩影へと戻した。

「……アレムンドさん。逃げ道がありました。」

俺は小声でアレムンドさんに伝える。

「……そうか。しかし、行くのはアッシュ……、君だけでいい。」

「えっ……！？」

俺はアレムンドさんの言った事を理解できなかった。

「……少々ヘマをしてね。このザマだ……。」

アレムンドさんは体を岩に預けた状態で、投げ出す様に伸ばした脚に視線を向ける。

「あっ……！？」

俺は目を疑った……。

アレムンドさんの脚、特に右脚からはおびただしい量の血が流れ出ていた……。

すでに回復薬が使われたのか傷口は閉じ始め、傷口が焼け焦げていることもあって、これ以上の出血はないだろうが、かなり酷い傷だ……。

「まさか…、俺を助け出すために……？」

俺は恐る恐る言う。

すると、アレムンドさんは首を振って言った。

「まあ、こういう訳だ……。俺のこの脚では炎王龍からは逃げられん。君一人で行くんだ……。」

「そんなこと……できませんよ！！ アレムンドさん一人を残して逃げられませんー！！」

俺は断じてそんなことはできないと、言い張る。

「しかし、このままではいずれ二人とも炎王龍の餌食だぞー！！」

アレムンドさんは俺だけでも逃がそうと懸命に俺を説得する。

「なら……、俺が奴の注意を引き付けますよ。その間に、這つてもいいから向こう側まで行つて下さい!!」

俺はヴァイパーバイトをゆっくりと鞘から抜いた。

「……バカな。奴の力を見ただろう？ 一人で立ち向かえる相手ではない!!」

アレムンドさんは必死に俺を引き留める。

だが、俺の意思は揺らがない。

「絶対に仲間を見捨てない……。仲間が……ハンターの誇りですから。」

俺はアレムンドさんの静止を振り切つて岩影から飛び出した……。

「おいっ、アッシュ!! くそおっ!!」

アレムンドは飛び出したアッシュを見て、自分が犠牲になることを諦め、残った左脚で立ち上がり、片足で歩き出す。

俺はそれを見ることなく未だに獲物を探す炎王龍に突っ込んだ。

（ちょっと……！！　あの子、何しているのよ！？）

岩壁の上からそれを見ていたエレノアは心の中で驚愕する。

「どうした、炎王龍！！　生きの良い獲物がここにいるぜっ！！」

俺はとにかく力一杯叫んだ。

炎王龍の意識をアレムンドさんから逸らさねば……。

ガアアアアアアーツ！！

炎王龍は俺の目論み通りに咆哮を上げ、熱風を纏いながら俺に襲いかかってくる。

強靱な四肢で、この熱気で乾燥しきった大地を蹴り、これまでになり速度での突進……。

「そんな単調過ぎる攻撃で俺を殺せると思ってんのか！？」

俺は挑発するように叫ぶ。

もちろんこれは、渾身の虚偽だ……。

実際はギリギリのところでなんとか体を捻って逃れられた、という全く余裕を感じられない動きだった。

（ちくしょうっ！！　こんなの長くは続かねえぞっ！！）

俺は心の中で悪態をつく。

アレムンドさんは、今ようやく蒼剣ガノトスを杖の代わりにして
進み、だいたい半分くらいのところまで来た。

（後残り半分の距離……、持ち堪える！！）

俺は再び気合いを入れて炎王龍と向き合う。

「覚悟しやがれっ！！」

今度は俺から攻撃を仕掛ける。

真一文字に突っ込み、ヴァイパーバイトを握る手を振るっ。

しかし、そんな片手剣の軽い攻撃が古龍たるテオⅡテスカトルに通
用するはずがない。

もちろん、そんなことは俺も承知の上だ。

（だが、やるしかねえ！！）

人間、腹をくくった時が一番強いのだ。

精神論だと馬鹿にする奴らもいるが、そんな奴には一生賭けても分かるまい。

ザシュッ……！！

先ほどアレムンドさんの攻撃を驚異的なスピードでかわしてみせた炎王龍も、さすがに超軽量級の片手剣のスピードには対応しきれずに、ヴァイパーバイトの斬撃を素直に受ける。

だが同時に怯む素振りすら見せない……、これも先ほどと全くもって同じだ。

（……それなら今回は手数を出してやるまでだ！！）

俺はハンターとしての下積み時代から必死に修練した得意の連携技を繰り出す。

ザクシュッ……！！

一度振り降ろした剣の刃を切り返し、今度は斬り上げる。

ザクッ……！！

再び斬り下げ、

ズバァッ……！！

力を込めた横斬りに繋ぐ。

ガァァァ……！！

さすがのテオⅡテスカトルも、ハリネズミの無数のハリのごとく突き出される切っ先に面喰らったのか、動きを止める。

「もらったあっ！！」

チャンスを前にして俺は更に攻撃の手を出す。

ザシユッ……！！

盾と剣によるコンビネーション。

そして……

「はあああああッ！！」

ズバァァァッ！！

全身全霊の気を込めた剣に体の回転で加速と勢いを加えた横回転斬

り……。

（どうだよ……、ちょっとは効いたかぁ！？）

俺は渾身の連携技を放ったのだ。

これではさすがの炎王龍も……

ガアアアアアッ！！

炎王龍の口の中に溢れる紅い閃光……。

全てを焼き払う灼熱のプレス。

「う……ウソだろ……？」

バカなっ……！！ と頭の中は信じられないという思考で埋め尽くされる。

そして、炎王龍は溜め込んだ灼熱の力を解放……

スバアアアアーンッ！！

今度こそ熱風を突き破り、炎王龍の半身に深々と突き刺った矢……。

想定外のダメージにより、テオ〓テスカトル必殺のプレス攻撃は中断される。

「…………エレノアさん!!」

俺はその矢を放った人物の方に視線をやった。

「アッシュ!! 援護するから早くこっちに来て!!」

エレノアさんは必死に俺に呼びかける。

遂に、ようやくアレムンドさんがそこまでたどり着いたのだった。

後は俺が何とかしてエレノアさん達のいる岩壁にたどり着かねばならない。

だが、度重なる攻撃により、炎王龍の怒りは頂点に達していた……。

《続く》

27話：燃える風、荒ぶる大地（後書き）

どれだけ長いんだ。

炎王龍との戦いは……。

火山編自体がやたらとなげえ。

沼地編よりも遥かになげえ。

感想、意見待っています！！

28話：遺跡に眠る記憶

炎王龍の口からは黒煙と、吐き出されるそばから発火するほどに熱を持った吐息が漏れている。

瞳は、自分を怒らせた名も知らぬ愚者の姿を一時たりとも離すまい、と見開かれたままだ。

「こうなったら……、逃げるしかないだろうっ!!」

俺はわき目も振らずに一目散に逃げ出す。

炎王龍は逃すわけがない、と言わんばかりの速度で俺の横を追い抜き、俺の進行方向正面に立ち塞がる。

「……ッ!？」

俺は簡単には逃げられない、と分かっていたが、こつもアッサリ逃走を防がれるとは思いもしなかった……。

「く……ッ!!」

炎王龍はジリジリと俺に近づいて来る。

絶体絶命……。

先ほどは出会い頭の強襲で機先を制することに成功したが、今度はかりはそうはいかない。

相手は警戒心バリバリで俺の一挙一動にも気を払っているのだ。

「岩壁まで二十歩ほどか、……でも、それが霞んで見えてしまうなんてな……。」

どう動くか……。

頭をフル回転させて策を練る。

が、その時だった。

「……アッシュー!! 目を塞ぎなさい!!」

エレノアさんの声。

「……!!」

俺は慌てて目を塞ぎ、その上からさらに手で顔を覆う。

ドオオオオオンッ!!

爆発音……、と同時に真っ暗な視界までが白く染まってしまうほどに強烈な閃光……。

これは……閃光玉？

いや、これは俺が渡した打ち上げ式閃光タル爆弾……。

「今よ！！ 走って！！」

エレノアさんの叫び声が聞こえ、俺はゆっくり目を開く。

（目が辛い……。）

目を隠していたとはいえ、これだけ強烈な光が間近で炸裂したのだ……。

視界の七割が一時的だろうが、白く濁っている。

だが、俺以上に深刻な被害を被った奴がいる……。

ガアアアアアッ！！

凄まじい叫びが響き渡った。

（そりやそうだろ……。さすがのテオ＝テスカトルでも閃光攻撃なんて警戒網の外だからな……。）

俺の動きを捉えるため、ずっと視覚に神経を割いていた炎王龍にとって今の閃光攻撃は最悪だったというわけだ……。

（だが、そのおかげで俺は楽に逃げられる！！）

俺は音や嗅覚で正確な立ち位置を把握されるかも……。と警戒はしたが、のたうちまわる炎王龍の姿を見て足早に岩壁まで退いた。

「さあ、今のうちにとっと逃げるわよ！ー」

俺はエレノアさんの手を借り、岩壁によじ登る。

「脱出口は……？」

俺は岩壁の上にたどり着いたところで、そこにいるアレムンドさんに肩を貸しつつエレノアさんに聞く。

「あそこよ……。見て。」

エレノアさんが向こうを指差す。

「洞穴……？」

そこには地表から地底に向かって伸びる洞穴があった。

「地下通路か？」

俺に続き、アレムンドさんも驚きに近い声を出す。

「たぶん、そんなとこよ。」

「たぶん、って……、本当にわき道を知っているんですか、エレノアさん？」

俺はエレノアさんが曖昧な表現をしたのが気がかりだった。

「最初に言っただしょ。誰も通ろうとしたことがない、って。」

エレノアさんはそう言って、一旦後ろを振り返る。

「……それに、急がないとマズイみたいよ……。」

「……！？」

今、この瞬間に俺達の背後では炎王龍が戒めから解かれ、俺達を追うため翼を広げ、飛翔しようとしていた……。

「行けますか、アレムンドさん!？」

「ああ、できれば肩は貸したままにしてくれ……。」

「分かってますよ!!」

俺はアレムンドさんに肩を貸したまま、可能な限り早く洞窟を目指す。

洞窟の入り口は狭く、俺達は通れても、奴には無理な幅だ。

だから、そこまで行けば……。

「早く!! 急いで!!」

エレノアさんは無我夢中でワイルドボウ?を引き絞り、矢を連射する。

放った矢は全て炎王龍の纏う熱風の前に無力化されているが、その飛翔を阻害することはできているようだ。

「あと少し……!!」

俺とアレムンドさんは洞窟のすぐ目の前で来た。

ガァァァァアッ！！

だが、ここで炎王龍も矢の雨をくぐり抜け、飛翔した。

そして地表ギリギリを滑空し、高速で俺達に迫って来た……。

「早く洞窟に……！！」

エレノアさんが俺達に追いつき、俺の反対側からアレムンドさんを支える。

しかし、迫りくる炎王龍……。

そして、炎王龍の爪が俺達を捕らえる……

といったギリギリのところで俺達は洞窟に飛び込んだ……。

グオオオオオ……ッ！！

炎王龍は無念そうな鳴き声を漏らして、俺達を諦め、地面との激突を避けるために上空へと舞い上がった……。

「……生き延びたか……。」

俺は安堵感で力が一気に抜け、その場に座り込んだ。

「かと言って、外に出るのはまだ危険ね……。奴が簡単に諦め切るとは思えないわ。」

エレノアさんはそう言って暗い洞窟の奥を覗き見た……。

「何だよ……、この洞窟。」

洞窟の中を突き進む内に、俺は衝撃的なものを目撃した。

「ここは……、何かの遺跡か？」

俺に肩を貸りながら歩くアレムンドさんも息を呑む。

洞窟の壁一帯に彫られた、龍のレリーフ……。

その数は数千に及ぶ……。

「このレリーフ……。村の祭殿で見たのと同じだ……。」

俺は村の祭殿にも、これと同じレリーフが彫られていたのを思いだした。

「ふっ……、どうやら宝物でもありそうな勢いだな。」

アレムンドさんは辺りの奇怪さについて冗談を口にする。

だが、目の前に光が差し込んできた時だった……。

「出口か!？」

「いや……、何かが光っているんだ!！」

俺は外の光だと思ったが、アレムンドさんが光の正体が得体の知れない発光体であることを看破する。

「どうやら……」

ここで、遺跡に入ってからずっと口を閉ざしていたエレノアさんが口を開く。

「どうやら……、ここにはお宝以上のものが眠っていたようね。」

その顔には冷や汗が浮かんでいた……。

暗い洞窟を進んで来たため、まばゆい光に視界を失っていたのだが、しだいに俺達の視覚も回復してくる。

そして、俺達もエレノアさんが見たものを見た……。

「な……ッ!？」

「こ……これは!？」

俺もアレムンドさんも二人揃って驚愕した。

「……氷漬けの……龍!？」

突如現れた、開けたエリア。

両端が見えない程に広いこのエリアの中央には、五つの台座と、それらを交点に据えて描かれた五芒星……。

さらに、その五芒星の中心に位置する場所にたたずむ氷山の様に巨大な氷塊。

そして、氷山には一匹の龍が閉じ込められていた……。

「デカイな……。」

率直な感想だった。

通常のモンスターのサイズを大きく上回るその龍は翼を持っておらず、飛龍種ではないことが分かる。

体色は先ほどまで地表に噴出していたマグマの様な黒ずんだ赤だ。

そして、体全体、特に背中のはりは禍々しく、巨大で頑丈そうな棘がいくつかが飛び出ている。

「遺跡の奥底に人知れず眠る化物か……。」

アレムンドさんはその龍を化物と評した。

氷漬けとは言え、溢れ出る様な覇気……、たしかに化物だ。

氷漬けでなければ、とっくの昔に逃げ出している。

「これ……、生きてるのか？」

俺はしげしげとその龍を観察してみる。

「覇龍……。」

「えっ……！？」

エレノアさんが何か呟いた。

「覇龍、アカムトルム……。」

《続く》

29話：黒龍神話（前書き）

今回は私の考えだした、黒龍神話の真相です。

はたして、アカムトルムとミラボレアスの関わりは……！？

感想、意見をお待ちしています。

29話：黒龍神話

覇龍、アカムトルム。

俺は聞いたことのない名を耳にして、いぶかしげな表情になる。

「なんですか、そのアカムトルムっていうのは？」

俺は発言者であるエレノアさんに問う。

「例の村の秘密よ……。」

「えっ……、あの時にジンさんが隠したがっている、って言うていた、あの秘密ですか？」

俺は村の祭殿で村長、ジンさんとのやり取りを思い出す。

そして、教えてもらえなかった秘密の正体を賭けてエレノアさんと狩猟勝負をしたが、決着がつかずに結局は分からずじまいとなってしまうってことも思い出した。

「秘密……？ 何のことだい？」

アレムンドさんが訳が分からない、といった感じで聞いてくる。

「まあ、色々あって……。」

俺はアレムンドさんにある程度の事の成り行きを説明した。

「なるほど……、村の黒龍信仰にまつわる秘密か。」

アレムンドさんもこれで話の筋を理解した様だ。

「……で、その秘密と、この氷漬けのアカムトルムとかいう龍と、どう関係があるんですか？」

俺は本題へと戻り、エレノアさんに再度問う。

すると、エレノアさんは少しの間、黙ったまま氷漬けのアカムトルムを見つめ、そして口を開いた。

「まさか、本当だとは私も思っていなかったし……、それに、こんなを見つけてしまった以上、もう隠す意味ないわね……。」

エレノアさんはゆっくりと氷塊の周りを歩き出した。

「……。」

俺達も無言でそれにつられる様にして歩き出す。

「アッシュ、黒龍神話を知っているわよね？」

「ええ……、一応は知ってます。まあ、有名な伝説ですしね……。」

『黒龍神話』

古くからある伝説で、その内訳は一匹の古龍によって次々と国が滅ぼされていく、という破壊神が具現化したような伝説だ。

破壊神の名は……、黒龍・ミラボレアス……。

最近の調査では、これらは伝説ではなく、実際の史実であるという理論が有力視されている。

「……で、それが何か？」

俺はエレノアさんに聞き返す。

エレノアさんは足を止め、こちらへと振り返って言った。

「もし……、その黒龍神話が真実ではないとしたら、どうするかしら？」

「えっ……！？」

俺は告げられた言葉に固まる。

何かとんでもない事を知ってしまいそうな気がしたのだ……。

それこそ歴史が覆る様な……。

「どういうことだ……！？」

すると、固まる俺に代わって、今度はアレムンドさんが聞き返した。

その声は俺と同じく、驚愕に震えている。

「これから言うことは、誰にも言っては駄目よ……。」

エレノアさんはそれに対し、まず俺達に口止めをした。

俺達もそれにうなづいて返す。

「これから語るのは、まぎれまなく黒龍神話の真相よ。この大陸に眠る最強最悪の龍、アカムトルムと、英雄……初代・龍の巫女、そして龍の巫女に仕えるしもべ、ミラボレアスの話……。」

アカムトルムという龍がいた。

それは古龍と種別されることもあったが、そうではないとする説もあった。

とにかく、その龍の力は強大なもので、全てをその力でねじ伏せることから、『覇龍』と呼ばれるようになった。

覇龍は古の国家をいくつも滅ぼした……。

古の国家は今よりもずっと技術が進んでおり、覇龍自身、そして他のモンスターもその技術により産み出された兵器だという……。

だが、それが覇龍の力の前に滅びる……。

世界の終わりではないか、そう思われていた時だった。

一人の英雄……、女性が現れたのだ……。

彼女は覇龍に対抗できる力を持った強力なモンスターを引き連れてアカムトルムに立ち向かう。

その時、英雄が引き連れていたモンスターこそが、黒龍・ミラボレ
アスだった。

そして、彼女は長きに渡る戦いの末に、アカムトルムを滅ぼすまで
は至らずとも、それを封じること成功した。

その時に彼女は龍の巫女として名を残す。

そして、龍の巫女はある重大な事を相棒であるミラボレアスに伝え
る……。

「今後……、ずっと先の未来までの間に、このアカムトルムの邪悪
な力を狙う奴らが現れるかもしれない……。

そうなれば、その時に立ち向かえる人物がいなければ世界は今後こ
そ終わりだろう。

だから、オマエはそういう企みを持った者達からこの封印を護りな
さい……。」

そして……

その命を受けたミラボレアスは、アカムトルムの存在を知り、その
復活を目論む国を滅ぼし始めた。

どの国もアカムトルムと同等の力を持ったミラボレアスの力の前には
無力だった。

けっきょく、旧文明の国のほとんどはアカムトルム、そしてミラボレアスによって滅んだ。

そして、ミラボレアスは黒龍神話の中で破壊神として記されることとなる。

代わりに、アカムトルムという存在は歴史上の文献には一切記されてはいない……。

「じゃあ……、ミラボレアスは、破壊神ではなくて守護者ってことですか!?!」

俺は語られた事実に驚きを隠せずに叫んでしまう。

「そうよ……。やったことは同じ破壊行動だけれど、黒龍神話に隠された本当の邪悪なる存在こそがアカムトルム……。」

エレノアさんはアカムトルムが閉じ込められている氷塊の表面に手をやる。

「そして……、これがその封印装置というわけか……。」

アレムンドさんは辺りを囲む五つの台座を見た。

「村長が隠したがるのも分かるでしょう？ アカムトルムなんて存在が外にばれるとマズイのよ……。正直、私も今の今まで秘密のことなんて全く信じていなかったけど……。」

エレノアさんが再び氷塊を見上げる。

「まさか……、こんなところに本当に封印があるなんて思ってもいなかったわ……。」

「あ……あの……、エレノアさん。」

氷塊をゆっくりと観察する様に見つめるエレノアさん。

だが、俺は一つ、とんでもないものを見つけてしまい、震える声でエレノアさんと呼んだ……。

「どうしたの？」

エレノアさんは俺の声に反応して振り返って応える。

今、俺は周りの台座を調べていたところなのだが、五つの台座の内の一つがおかしいのだ……。

「……………」

アレムンドさんも俺の横で、腕を組んだ状態でそれを見ている。

「何かあったの……………」

エレノアさんが近づいて来た。

俺は恐る恐る言った……………。

「ふ……………ふ……………」

「ふ……………？ “ふ”がどうかしたの？」

しかし、言葉が震えてうまく言えない。

だが、やっとのことで俺は言い放った……………。

「ふ……………封印が……………、一つ解けちゃってます……………！！！」

《続く》

29話：黒龍神話（後書き）

今回は地の文章がどうしても多くなってしまい、読みにくかったかもしれません。

まあ、今回は重大な真実が明かされたわけなのですが、ここから物語は急転していきます！！

重大なお知らせ

モンスターハンター・ハンティングワールドを読んでくださっている皆様へ。

このたびは大変残念なお知らせをお伝えします。

感想や意見を頂くにつれて考え始めたことなのですが、この作品、モンスターハンター・ハンティングワールドの連載を打ち切る決意をしました。

理由は色々ありますが、大きく3つ。

1つは、ストーリーの構成上での問題です。

書き始めの当初は勢いのみで、全く先を考えておらず、伏線も後々使えそうなものを適当に作っていたのですが、それが今になって話の展開上で矛盾などを生み出す原因となってしまいました。

これはもう修正不可能です。

2つ目は、自分で読み返してみて、文章の稚拙さに嫌気がさしたことです。

最近書いた部品はある程度、自分でも納得できるのですが、書き始めは問題外の稚拙さ。

自分の作品を愛せない、これは連載を続ける上で致命的です。

3つ目は、今のままでは使いたいネタの大半が埋もれたままで終わってしまう、ということです。

自分に力量が無いために、話の舞台設定を無視してしまい、自分独自の世界観というものが消えてしまったことです。

この話の流れでは最初に作った設定も生きていません。

そこに自分で不快感がありました。

以上のことからハンティングワールドの連載を打ち切ります。

応援してくださった読者の皆様、本当に申しわけございません。

どんな批判を受けても、返す言葉すらありません。

モンスターハンターの二次創作自体は続けていくつもりです。

たぶん、すぐに(2・3日)新たなモンスターハンターのファンフィクション作品を投稿し始めると思います。

今後こそ完結させますので、その時はどうかお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2991c/>

モンスターハンター・ハンティングワールド

2010年10月8日13時21分発行